

男は外に出て働き、女は内に居て凝と守つて居れば其の家は安らかである。これを文字に書いても安と云ふ字は、家の下に女の居る形になつて居る。即ち家の内に女が居ると云ふ意を示して居る。併しこれは昔の教訓で、今日は女と雖も家にばかり引籠つては居られまい。忠臣蔵のとなせの辭柄ぢやないが、夫に代る此の一腰で、時には外へも出掛けずばなるまい。時に出かける位ならば好いが、内を外に押廻つて居つては主婦の役目が勤まるまい。主婦にして主婦の勤を空しうするやうな女には、家を持てさうな道理がない。主婦の責任を重んずる女であれば、さう矢鱈に外出の出来さうな筈はない。

然るに或る女は頗る出好きで、暇さへあれば何處でも出かける。イヤ暇があつて出かけるのは好いが、暇が無くとも出かけて行く。家に居る事が大嫌で、何處へか押出して行かぬことに居堪まらぬ。手放し難い仕事があつても打棄つて出かけて行く。家事も子供も女中任せで、自分は殆どお關ひ無しだ、暢氣と云はうか無責任と云はうか名の付けやうがない。

或る時子供の熱のあるのを棄て、出かけて行つた。輕くて濟めば好かつたが、子供は段々悪くなつた。女中の手では何うする事も出来なくなつた。人を諸方に捜しに遣つたが、行方が更に分らなかつた。近所の人は始末に困つて、主人の勤先に電話をかけて呼び戻した。

夕方から子供は段々悪くなつて行つた。それに母親は夜の十二時近くまで戻つて來なかつた。飛んだ時刻に姿を見せたが、この日は演劇に出かけたのであつた。子供は翌日死んで了つた。男は怒つて打据ゑた。

斯んな事があつても懲りずに、女は矢張諸方へ出かけた。或る日は甲の許に出かけ或る日は乙の許に行く。行つて話らん人の噂などして人に時間を潰させる。この女には何處の家でも困り切つて、門先に姿が見えると、「ア、また油を賣りに來た？」と眉を人に擧めさせる。全く困りものである。

毎日斯うして知邊の所を一渡も二渡も廻つて、最う行かうにも行先が無くなると、今度は近所廻を始める。近所の人達も持餘して、姿を見かけると隠れるやうに誰もする。それでも平氣で何處へでも押掛けて行く。

實に足のまめな女で、昨日は西の方角で會つたと思ふと、今日は東の方角で顔を合せる。午前は甲の家で喋つて居たと思ふと、午後には又飛んだ人の所に行つて邪魔をして澄して居る。

肝腎の主婦が毎日これだから、家の不取締な事はお話にならぬ。困るのは亭主、氣安いののは奉公人、何んな事をしやうと誰も咎め手が無い。この女と來ては又非常な長尻で、その上極印

附の饒舌と来て居るので、人の厭がるのも無理はない。

(一一五) 恩を忘れぬ人

恩を仇で返すやうな不都合な人間があると思ふと、世には又些細な恩恵を受けたことでも永く記憶して居つて、兼て自分の受けた恩恵の幾層倍にもして返さねば息まぬやうな律義堅い人もある。

それかと思ふと人は實に十人十色のもので、普通ならぬ恩恵を人に受けながら、諺に云ふ咽下過ぐれば熱さを忘れるで、その場を過ぐれば何時となく忘れて了つて、知らぬ顔をして居るやうな横着者もある。世には實に斯うした質の人が多い。イヤこれが寧ろ世間普通のやうであるが、鳥畜類でさへ恩は忘れぬものだと思へば、それでは人間の人間たる價値は認められぬことになる。人間として人に幾分の恩恵でも受けたならば、永く記憶して居つて、我が兼て人より受けた恩恵の幾倍にもして返すやうでなくては、人の人たる道を守る人間とは言はれない。併し今日の世の中には、斯う云ふ義理堅い話は段々廢れて来て、此方に便利の好い時には煩い程訪ねて行つて向ふを勞はし、最早御用がないと見ると、門先を通つても知らん顔をして過

ぎるのが當世風となつて居る。人間相互の交際も斯う利己主義になつて来ては、實に心細い話である。これが段々進んで来た日には所謂肉強食で、強い奴は弱い奴を壓へつけて、おのれの腹を肥す爲には、向ふに温かい肉を啖ひ血を吸ふやうになつて来ずには居らぬであらう。けれども人間は本來左様したものでは無くて、人は情の持合と云ふからには、或る時は人から情をかけられたならば、これを忘れぬやうにして居つて、向ふに事のある場合には、兼て自分の被つた恩恵の切めては十倍百倍にもして返したいものである。この心がけがあつてこそ人は始めて人に尊敬せられるやうにも成り得るのである。

或る一人の若い男が職を失つて困つて居た際に、成る一人の有力者が口を利いて、去る會社の事務員に世話をして遣つた。すると其の男は大きく心に喜んで、爾來五ヶ年の間益暮には、必ず其の人の許を訪ねることを怠らずに居つた。

一方では實に感心な男だと云つて褒めて居ると、人の上には誰しもあること有爲轉變は免れ難いもので、その中に此方は事業に失敗して、實に見るかげもない身の上になつた。人は誠に薄情なもので此方の身の富み榮えて居つた時は、他人も親戚のやうに云つて来たが、一朝浮世の舞臺を陥み外したとなると、親戚の者も他人のやうな顔をして、我が許に寄附く者は日一日

と段々少くなつて来た。

失意の中に年が暮れた。榮えて居つた去年と變つて、今年是最う歳暮などに來る人も僅かになつた其の中に、前の男は相變らず歳暮に遣つて來た。此方は愈々感心して居ると、年始にも來れば翌年の盆にも來た。盆に來た頃は此方は太く病つて居つた。度々見舞に遣つて來て「若し私に出來ます御用があたりでしたら」と云つて、何かと此方の面倒を見てくれ居つた。

その後三年ばかり此方は失意の地位に立つて居つたが、不圖したことが動機になつて、一陽來復また再び世の中に出て、人の頭に立つことの出來る身の上になつた。同時に其の男を抜擢して、これまで參拾九圓取つて居つた人に、八拾圓の給料を與へ、自分の傍に置いて使つて見ると、第一人物と云ひ執務振と云ひ、非常に立勝れた人間で、二人は相依つて大いに働くことが出來た。

今日では共に成功して益々盛んに活動して居る。當時の青年執務家とは誰ぞ。今日の深川染工會社の専務取締役加藤勢之助氏で、當時の有力者と假に前に云つたのは、今日の同會社の社長奥井與三氏の事である。

(一一六) 亭主ばかり取換へて居る女

貞女兩夫に見えずなどは、今は昔の物堅い日本婦人の間に權威を有つて居た語で、今日の婦人の多數大多數は、そんな狭い了簡は抱いて居らぬ。其處が即ち現代婦女の所謂新しいとする所であらうか。

中には随分極端な女が居る。或る女學生上りの女で、五年間に夫を十三人半取換へたと云ふのが居る。「十三人は分つたが、後の半と云ふのは何うしたのだ。人間の分數は妙ぢやないかと或る人が糾いて見たら、「行きかけてやめたから半と見たのだ」と其の女は言つたさうである。

第一は官吏、第二は會社員、第三が軍人、第四が美術家、第五が商人、第六が學校教師、第七が新聞記者、第八が音楽家、第九が船員、第十番目が宣教師、第十一番目が活辯、第十二番目が自動車の運轉手、第十三番目が醫師、後半分で廢にしたのが、汽車の機關手、今度はお寺に行つて大黒さまになつて見たいと言つてるさうだ。

成程顔は一寸成つて居る。これを資本に夫ばかり取換へて居る。半歳と同じ所には尻が据つ

て居ない。行つたかと思ふと戻つて来る。親も愛想を盡して了ひ、嫁かゝるが戻らうが最う一切
 關ひ付けぬことに成つて居る。女は結局これを好い事にして勝手に男を捜して歩く。

女はこれに妙を得て居る。甲の男と別れたかと思ふと、直に最う乙に關係を付けて居る。實
 に無雑作に話が運ぶ。僅か二三回會つた男でも、遊びに来ませんかと言へば直に其の男に付い
 て行く、何うかすると遊びに行つた儘同棲したこともあるさうだ。

出て来る時も簡單だ。いやに成れば左様ならとも言はずに出て来る。第十三回目に醫師の細
 君になつた時などは、頗る話が速かだつた。女が道を歩いて居ると何だか急に氣持が悪くなつ
 た。幸ひ其邊に醫者の看板が目についた。のこく其處に入つて行つて診察して貰つた。

「軽い腦貧血です。少し静にして居らっしゃい！」

「ちやア少し休ませて頂きますか？」

寢臺の上に寢たは好いが、その儘ぐろぐろ寢込んで了つた。その邊は又至極暢氣なものだ。

二三時間も経つた頃に眼が覺めた。四邊に誰も居なかつた。此方へ出て来て聲をかけると、奥
 から主人公が出て來た。

「如何で居らっしゃいます。最うお氣分はお治りでしたか」

「ハイお蔭さまで……何うも難有うございました！」

醫師は若い男であつた。未だ開業仕立てだと見えて、家は空家のやうで、女中一人使つても
 居なかつた。

「先生貴方お一人ですか」

女は試みに糾いて見た。

「ハイ獨身です。貴方は？」

「エ、私も獨身よ。貴方の奥さんになつてあげませうか」

「ハイ何うか願ひますか？」

申談と思ひの外、女は其儘尻を据えて、三月ばかり醫師の妻として過したさうだ。今日の世
 の中には斯うした女が少なくない。早い話が人間の皮を被つた獸だ。

(一一七) 強いやうて弱い人

人は強ち外見に依らぬものである。一寸見た所では如何にも活地の無い弱さうな人間であり
 ながら、それが非常な意志の剛堅な人物で、何か事のある場合には忽ち見變へたやうな強い人

に成つて、如何なる大事も物の見事に遣つて退けて、人に呀と口を開かせるやうな人もあれば平素は馬鹿に強さうな人間に見えながら、それが真個の外見倒しで、何か事のある場合に臨むと、忽ち弱くなつて顔色を變へ、齒の根も合はずがたくと顫へ上るやな臆病者もある。

人は外見ばかりで決して信ぜられるものではない。獨り勇氣の點ばかりでなく他の事も總てが然うで、正直さうに見えて不正直な人間もあれば、また悪人のやうに見えて、その實虫も殺し切らぬやうな人もある。また平生は極めて不愛想な人間のやうに見えながら、此方に何か事のある場合には「待ち給へ、君金が無くちや困るだらう」と云ふやうな情に饒んだ人間もあれば、不斷は極めて優しい口を利いて居りながら、いざと云ふ場合に成ると、三度が三度、五度が五度、上手に逃げて了ふやうな薄情な人間も世にはある。

體軀が大きくて髯髯でも生して居ると、その男は馬鹿に強さうに見えるものであるが、世には「土常歸の大木」と云ふ諺もあつて、強さうに見える人ばかりが決して強いものではない。不斷弱さうに見えて居る人間に、却つて弱くない人間がある。人は決して外見ばかりに依るものでない。

或る一人の事業家が事業を始めて、一時は大分盛大に成つて來た。人も大勢寄つて來て、皆

その事業に依つて衣食するやうに成つて來た。然るに如何なる事業でも、その時その時で盡衰は免れぬ。右の事業家の經營も一時は誠に調子好く行つたが、或る時非常な難境に打附つて、最早事業を廢めて了つて、後の解決を附けるより外に道を見出すことが出来なく成つた。時も時丁度歳末に差迫つて居つたので、經營者は途方に暮れたが、又新しい思考を得た。「最早何も出す手はないが、膝とも談合と云ふこともある。一番幹部の者を集めて其の意見を糺して見やう。彼等の意思の如何に依つて、踏み止まつて戦ふとも、又は城を枕に戦死するとも、二ツの一ツに決定しやう」と考へて、幹部の面々を十人許事務所の二階に呼び集めた。

經營者は一同の顔の揃つた所で、「既に諸君も御承知の通りの始末であるが、此處で寄手に城を開け渡したのか、それとも又踏み止まつて戦つたものであらうか、一同の御意見を伺ひたい」と切つて出た。

何しろ非常な難境であるので、皆各自に頭を煮して考へたが、その中の過半数は言葉を揃へて、「最早非運又非運で事故に及んだ上は、何と手の下しやうもない。無理をすれば血が出るといふこともある。斷然無事に開城して、善後の策を講じた方が宜からう」と言つた。

事業主は其の云ふ所を聞いて失望した。同時に實に意外な思ひがした。何故かと云ふと非戦

論者の面々は、豫て自分が勇氣ある人々と恃みにして居つた面々許りで、主戦論者の人々は、豫て自分が餘り重きを置かなかつた面々であつた。日頃の想像と事實が丁度反對に行つたので「人は外見に依らぬものだ」と、事業主は今日始めて今更のやうに驚いた。

併し此方の心は顔色にも見せず、「然らば多數の御意見に従はう」と言つて、非戦論者七名には即日暇を遣つて了ひ、翌朝更に残る三名の主戦論者を事務所の一階に集め、今日は十分に善後策を講じて見ることにした。事業主は三人の主戦論者を集めて、自分の心の奥底を打明けた。「實を言へば私は今この仕事を棄て、何うする。全く棄てる氣は無いのだ！」

三人は凜然と此方の顔を視た。併し未だ一言も發しなかつた。事業主は椅子にドンと腰を下して、

「戦意のない人間を幾人集めて置いて見た所で、たゞ此方の手足纏に成る丈の事だ。それで昨日の幹部會議は、實に一同の氣を引いて見るための會合であつた。その結果私は今日此處に君達三人の同志を得た。知らるゝ通りの悲境には陥つて居るが、世の中の事は左様一概に悲觀したものではない。人間の智慧で考へて見れば、これは大いに見込があると思つて懸つた事で案外物に成らずに了ることもあれば、また人間の想像では、これは最う到底助かるべき道はない

と断念した事であつても、それが不思議と成就して好い實を結ぶやうな事、世間には往々ある。其處で私は運を天に任せて、此處で一番踏み止まつて、最も勇敢に奮闘して見やうと思ふが諸君のお考へは何うだ？ まかり違へば四人一齊に腹を切らねばならぬやうな結果に陥らぬとも限らぬが、イヤ寧ろ左様なる方が事實に近いが諸君は此の事業の爲に私と一齊に死んでくれるか何うだ？ 先づ其の御決心を伺ひたい！ 萬事は其の上の御相談に仕やう」

「宜しい貴方と一齊に死にませう！ 何處までも生命がけになつて戦ひませう！ その變は決して御心配下さるた！」

三人一齊に断々乎たる決心の色を面に見せて答へた。兼て強さうに見えた人間は強くなくて弱さうに見えて居た三人の顔には勇氣が充實して、眼には希望の光が跳つて居た。事業主はこれまで自分が人を見損つて居つた事を心に耻ぢた。併し三人の決死的人物を得たので、彼の勇氣は俄に盛んになつて來た。

人間は斯う成つて來ると、人あつて教へる如く、ひよいと好い智慧も動いて來るものである。「機智は必要の子なり」と云ふのは實際である。

「それでは遣らう、神佛の助けに依つて此の難關を突破しやう。諸君何うか十分に決死の覺悟

を有つて働いてくれ給へ！」

「何う云ふ方針をお取りになりますか？最早今年も後一週間しかありませんが……、五萬八千圓これ丈は是非共無くては成りません！」

「諾！」

此方は凝然と考へたが、事の成る時は斯うしたものか、直に或る物が頭腦の中に閃いた。

「ちやア君は今日直に立つて大阪に行け！君は新潟に向つて飛べ！君は早速横濱に行け！我輩は此方で必死に奔走する！その方法は斯々爾々……」

四人齊しく蹶起して、四方に向つて出發した。斯う成つては皆生命がけであるので、實弾同様に中て方が強い。効力も一通りでない。その夜先づ横濱方面から吉報を得た。翌日東京方面の運動も確實な手應があつた。夜には大阪から一大吉報が飛んで來た。その翌日の正午頃に新潟からも吉報が入つて來た。五萬八千圓あれば好い所に六萬八千圓金が出来た。この間の四人の働きは、まるで神のやうであつた。

これでその事業は復活して、翌年から又利益を見られることに成つた。強さうで弱かつた人々は、眼を圓くして居つた事業は再び盛んに成つたが、最早本の古巢にヌク／＼歸る譯には行

かず、「彼様に持直すやうだつたら暫く我慢して居れば好かつた」と後悔した。弱く見えても強かつた三人は、非常に主人の信用を得て今では皆結構な地位に在附いて居る。これは或特殊の機械を製造して居る某工場に於いて、四五年前の歳末に演じられた活劇談であつた。

(一一八) 内證金を溜める女

夫婦の間には何も秘密は要りさうもないものだ。夫の物は妻の物、妻の物は夫の物だとして置いたならば、それで事は足りるであらうに、世には馬鹿に水臭い女が居る。夫に秘密で内證金を溜める。

斯んな女を女房にしては、氣も許せなければ添ひ甲斐もない。何の爲の女房だか分らない。切々と働く夫こそ好い面の皮である。全くの所氣の毒である。

去る所に斯うした女が居る。彼の女の外見はおとなしうな女だ。働くことも能く働いて居る。別にこれと云ふ批點の打所と云つてもないが、この女に世帯を渡してから太く食物が悪くなつたと言つて、舅二人は零し切つて居た。それちや夫の金の渡方が減じたかと云ふと左うでない。費用は却つて二三割方も増して居た。

臺所の經濟が此の女の手に移つてから食物に不満を感じるの老人夫婦ばかりで無かつた。主人も飯の分量が段々に減じて來た。夫は或る日注意した。

「近頃太く食物が不味ぢやないか、最少し何とかしてくれんぢや遣切れんね？」

「お氣の毒さまですが、諸式がお高くなりましたからね」

女は澄して斯う言つた。其處に行つちや男は應揚なものだ。

「ぢやア最少し經費を増す事にせうよ」

男は粗食に堪へかねて、副食物の料として月々拾圓づゝ増す事にした。少しばかりの間は幾らか箸が取れるやうに成つたと思つたが、また段々元に復つて來た。

「家の嫁は私達を干殺す。これぢや所詮一緒に居られない？」

舅姑は窃に歎じて居た。終に堪らず子息に別居を申し出した。

「お前は何う思ふ。私達にや食物が酷くて何うも我慢仕切れない。何うか別に暮らさせて欲しい。」

夫は又若干かの食費を増して行く事にした。暫く好いかと思ふと、また段々前に復つて行くその爲紛紜が絶えなかつたが、何としても食事は改められなかつた。

この間に二年経つた。まさか營養不良の爲でも無かつたか知らぬが、男は小半年病つて俵給口を失つた。金に困つて思案に暮れた。女の生家は金があつた。男が融通を頼んで來いと言つても、女は義理が悪いと言つて應じなかつた。

この際ひよとした事から、夫は銀行の通帳を探し出した。開けて見ると食物の悪かつた譯も全然好く解つた。

「斯んな悪い事をして居つたのか？」

夫は齒を食閉つて通を握つた、責めて終に白状させた。金は夫に取上げられた。おまけに其の日叩き出された。女は其の後再縁した。病氣と見える。其處でも同じ手を遣つて、今度は舅去を食つたさうだ。

(一一九) 仕事に身を入れぬ人

人間は働く時は火のやうに成つて働き、遊ぶ時は仕事を離れて、愉快に遊ぶ人でなければ、到底十分に働くことは出來ぬ。

ところが世には仕事を仕ながら遊ぶことを考へ、また遊びながら仕事のことを考へなどして

働いて居るとも附かず、また遊んで居るとも附かぬやうな人がある。

斯んなことをして毎日を送つて居るやうな人は、到底仕事の上に好い成績を擧げることはい出来ない。人に使はれても斯う云ふ人は決して重く用ひられるものではない。

そんな意地ぎたない事をせず、遊ぶ時は思ひ切つて十分愉快に遊び、精神の再造を遺つて新銳の氣力を以て、働く時は全力を擧げて事に當らなければ決して十分に働き得られるものではない。「常に働くのみを以て勝つと思ふは大なる誤りなり。人間時に娛樂なかるべからず」で大いに働かうと思ふ者は、また大いに遊ばなければ成らぬ。

併しながら此の考へを有つて居らん人は、遊びもせねば働きもせぬ。常に意地ぎたない仕事の仕方をして居るので、働く時に當つて全身仕事の人と成つて目覺しく十分に働くことが出来る。斯う云ふ人は思ひ切つて時々氣を脱かぬので身體も精神も疲れて居る。だから仕事に懸つて見ても、思ふやうに頭腦も利かぬば身體も利かぬ。その爲に手には仕事をして居りながら精神は疲れて休んで居る。その結果は何うだと云ふと、一向仕事に身が入らぬ。言ひ換へて見れば、働いて居るとも遊んで居るとも附かぬやうな形に成つて、何時人に見られても其の人間は愚圖々々して、物の役に立ちさうにも見えぬ。

毎日斯んな氣の利かぬことをして居る人は、少しも働かぬがせぬので、彼んな人間は有つても無くても可いと云ふ事に成つて、人に使はれても無能視せられ別地位に進まなければ給料なども上らない。さうして自分では散々愚痴を溢して居る。世の中にこれ位馬鹿な話はあるまい。

仕事に懸つた時は手と頭とがヒタと一致して働かなければ決して好い結果は得られるものではない。手には何か仕事をして居る。同時に頭は姦通をして何か外の事を考へて居ると云ふやうな不熱心なことでは、何をしても結果の好からう道理はない。

斯う云ふ仕事の遣方をする人を稱して、「彼奴は愚圖だ！」とも云へば、また、「仕事に身を入れぬ人」とも云ふ。これに反して、仕事に身を入れる人、言ひ換へて見やうならば、おのれの手と頭とがヒタと一致して、一時一物に向つて己れの全精力を集中して働いて居る人は、仕事にズン／＼埒が開いて、而も極めて結果が好い。斯う云ふ人は、僅かの時間に多く働くことが出来て、而も其の成績が好いので、おなじく人に使はれても、「彼の男は働きのものだ、中々好くこの間に合ふ」と云つて重寶がられる。

斯う云ふ人は此方から催促するまでもなく、向ふからズン／＼地位を進めてくれれば給料も

増してくれる。おなじく人に使はれるにしても、人から重寶がられるのと無能視せられるでは其處に大した相違を生じて來ることになる。

人間は仕事に身を入れる人であれば、何處へ行つても使用者は大勢あるが、仕事に不熱心な人間では、何處へ行つて、幾度口を求めて見ても、己れの満足するやうな地位は得られるものでない。おなじく人を使ふにしても、仕事を仕ながら側目を振つたり、欠伸を仕たり坐眠を仕たり、机の上に頬杖を突いて、片手の小指の爪で鼻糞を掘りながら、下らんことを茫然と考へ込んで居るやうな人間は決して使はぬことである。

(一一一) 押の強い女

女は氣心の優しいのが好ましい。女性で餘り押の強いのは人に愛想を盡させる。向意氣の荒い女で人に懐かしがられるものはない。何處へ行つても憎まれる。何んな酷い目に會つても人が救はうとしてくれぬ。女は女らしくして居る方が得である。

或る人の細君と來ては實に呆れる程押が強い、言換へて見れば太々しい。「太い女だ」と人が言ふ。何か事があるといふと、亭主を其處退にして人の家に談判に押懸けて行く。相手が誰

であらうと容赦はせぬ。おのれの勝手な理窟を列べて人の言ふ事は耳にも入れぬ。その向意氣の荒さと來ては、まるで破戸漢のやうである。

何處の家にも門から怒鳴り込んで行つて、飛んだ言掛をすることがある。女と思つて向ふが控目にして居ると、實に無法な事を言ひ出す。相手が男ですら然うだから、女であらうものなら白い物でも黒く言ひ爲して罵り騒ぐ。

或る時自分の内の主人の靴が見えなくなつた。今磨いて此處に置き、一寸臺所まで行つた間に何うして靴が無くなつたらう、屑屋に持つて行かれる筈もない。不思議だ不思議だと思つて居る中に、

「ア、左様だ？」

疑ひは隣の家の飼犬にかゝつた。

「彼の犬が啣へて行つたに違ひない！」

早速怒鳴り込んで行つた。

「只今私共の主人の靴を、此方さまの犬が啣へて参りましたから頂きに参りました」

隣の細君は驚いた。

「オヤ左様でございますか」

「ハイ、確に私が見て居りました。」

「それは不思議でございますね、私共の犬はお晝前から子供と一緒に何處へか遊びに出かけて居ないやうでございますが」

「だつて奥さん私只今見て居たんでございますよ」

「左様ですか、ちやア先に戻つて来たんですか知ら……」

「随分おひどい事をおツしやいますね。私何ほ何だつて靴一足位のことと言掛など致しちやまゐりませんよ」

「飛んだ事をおツしやいます、そんな譯ぢやありませんが、犬が先へ歸つて来たことは存じませんでしたので……、それはまあ申譯の無い事を致しました？」

何處にございますでせう。頂いて参りたいものでございます」

此方ではハタと困つた。

「私全く見かけなかつたんでございますが、何處へ脚へてまゐりましたらう！眞個に仕方の無い犬だこと！」

その邊を捜して見ても見當らぬ。細君は困つて、

「脚へて宅に戻つたのでございませうか」

「そんなにお疑ひなさるやうならば、靴の一足位最う何うでも宜しうございますよ」

そんな譯は無いと思ふが、脚へて来たのを見て居つたと言はれては強ひて言ひ切る譯にも行かぬ。兎に角犬が戻つたか戻らぬかを確めて見る必要がある。

呼んで見ても姿を見せぬ。態と門の前まで出て呼んで見ても、犬は姿を見せなかつた。主人の聲を聞きつければ、直に尾を振つて飛んで来るのが例である。幾ら呼んで見ても姿を見せぬ所を見ると、未だ戻つて来ては居らぬと云ふ事が能く分つた。此方は強い自信を以て、

「未だ宅の犬は戻つて参つて居ないやうですが、何うした譯でございませう。よしや宅に居りましても、これまで餘所さんの物を持つて来たと申すやうな事は一度もございませんでしたが畜生ですもの、奥さん左様はまゐりますまいよ。お届け致してまゐりましたのは今日が始めてでございますが、先日も現在貴方私共の鶏を一羽取りましてね、何處へか飛んで行つたんでございますよ」

「マア然うでしたか、少しも存じませんでした」

嘘とは思ふが口では言つた。

「その前にも度々貴方、おなじやうな事があつたんでございますよ」

「左様ですか、それは誠に相済みませんでした。これから何うぞ其の都度左様おツしやつて頂きたいものでございますね」

「靴は何う致しましたらうね！」

「何うも見えませんやうでございますが」

「それぢや誠に困りますね」

「何うも申譯がありません」

「全く困りますよ度々これぢや」

「何處へか遣つて了ふ事に致しませう」

「それは御勝手ですが、靴には誠に困りましたね、餘り不取締なやうで、私も夫に済みませんでございます。確に此方さまの犬が啣へて飛んでまゐるのを、私只今見て居たんでございますからね」

「ぢやア買つてお返しする事に致しませうです」

「穿き好い好い靴だと夫が大切に致して居りましたんでね……。奥さん何うかお返し下さいませんか、私只今頂いて参りませう」

「それは御無理でせう。無い物をお返しする譯にやまゐらないぢやありませんか。直に買つてお返し致しますから、主人の歸るまで何うかお待ち下さいまし」

餘りだと思ふので、つひ此方でも斯う言つた。

「何ですと奥さん、返す譯にや行かないとおツしやるんですか。面白い、然うおツしやれば此方も意地です。只今頂いて歸りませう。貴方は私が何處までも言掛りをすると思つて居らツしやるんでございますね。左様承はつては私も徒手では歸られません。貴方は好くも人に痕をお付けなさいましたね」

坐り込んで動かない。

賣言葉に買言葉、此方も全く辛抱仕かねた。

「奥さん餘り六ヶしい事を言ひつゝ無しに致さうぢやありませんか。つまる所は私共の犬の悪い所をお詫して、靴を買つてお返し申し、それで何うか御勘辨を願ひたいもんですね」

「マア何でも好いから靴を返して下さいよ。後は此方の考にある事です。」

「主人の歸るまでお待ちは願はれますまいか。」

「何も御主人がお歸りにならなくても、犬の啣へて来た靴をお返しに成れない事はないでせう」
 話は段々絡んで行つた。相手が下から出れば出る程附上り、女だてらあられもない、馬鹿の
 間拔の泥棒のと、果は金切聲を出して叫び始めた。

近所の人達が一方に同情して仲裁に入つた。此方は何處までも押強く出て、果は大勢を對手
 に取つて罵り始めた。

「此處の犬が確に啣へて歸るのを見届けた上の話だ。返せ泥棒」

何處までも斯う言つて力みかへつて居る所に、子供が犬を連れて戻つて来た。母親は問ふた

「お前今までボチと一緒に歩いて居たのかい！」

子供は黙首いた。

「叔父さん所と一緒に居つたの」

「左様かい。それぢや奥さん餘所の犬とお見違へになつたんぢやありませんまいか。お氣の毒さ
 まながら私共の犬ぢや無ささうでございますね」

「盲人ぢやあるまいし、犬の毛色位は分る。これだ、これだ、この犬だつた！」

兎に角まあ主人の歸るまで待つて頂く事に致しませうね皆さん」

「飛んだ御災難ですね！」

「ヘン、何方さまが御災難だ！」

狗も動かす罵つて居る所に、近所の妻君が此の女の子供を連れて来た。その細君は優しく腰
 を屈めて、

「私餘計な事でございますが、そのお靴と云ふのは、若や此のお子さんの穿いて居らつしやる
 んぢやございませうまいか」

六ツばかりの男の子が、親父さんの大きな靴を穿いて居た。其處に磨いて置いた靴を子供が
 穿いて、何處へか遊びに出て居たのを、適切犬の仕業だと早合點したのであつた。流石にハツ
 と思つたが、何處まで押が強いかわれぬ。

「イエ違ひます。此處の犬が啣へて来たのは、最う一足の靴の方でございます。二足磨いて整
 然と揃へてあつたんですもの」

女は其の細君に斯う言つて、

「早く家にお歸りなさい！」

邪見な聲で子供を叱つた、一同は突合つて苦笑した。女は減らず口を叩き、靴を一足盗まれた？」と悪罵ひながら歸つて行つた。

(一一一) 何でも出来て取得の無い人

人間は妙なもので、これと云ふ藝能を具へて居らんでも、正直であるとか、勤勉であるとか何か一ツ其の人にこれと云ふ長所のある人間であれば、決して人には見棄てられぬものである人が人に見棄てられぬ以上は、何處へ行かうと少なくとも其の日の衣食に困るやうな憂ひはないおなじく人を使ふにしても、何かこれと云ふ取得のある人間でなければ使つて見ても役には立たぬ。されば世の中に出て獨りで飯を食つて行かうと云ふ人間は、何か一ツの取得即ち長所を具へて世に立つことが肝要である。何でも宜しい己れの身に、これと云ふ長所を具へ得た時はおのれ獨りの力で飯の食へる時である。

世の中に何か一ツ取得のない人間ほど哀れなものはない。取得のない人間は、譬へば柄のない鎌を見たやうなもので、誠に使ひ道に困るものである。假令少々錆びて居やうと、又は少々刃が缺けて居らうと、柄さへ附けて居らうならば、鎌の役目をせんでもないが、如何に好く切れる鎌であらうとも、柄のないことには使ひやうがない。柄のない鎌を見たやうな人間が世の中には幾らもある。こんな人間は何んな立派な藝能を具へて居らうと、使はうにも使ひ道が無いので自然人に棄てられる。だから斯う云ふ人間は何時もブラ／＼して飯を食ふ道に困つて居る。棄て置くのは可憐いものだ云つて、偶と拾つて使つて見る人があつても、肝腎な掴まへ所が無いので始末に困る。矢張棄てるより外には道がなくなつて来る。人間は何うしても何か取得の無いことには仕方がない。

取得は人間の處世的最良の武器である。然るに世には何でも出来て一ツの取得も有つて居らぬ人がある。例へば手も達者に書く、算盤も持せても巧い、學問も相當にある。この外何にかけても一通り出来る人間でありながら、さてこれと云ふ長所のない人間が世にはある。一萬能に通じて取得のない男」と云ふのは此の種の人間で、誠に氣の毒なものではあるが、柄のない鎌で何とも使ひ道がない。だから斯う云ふ人間は何んな好い能力を有つて居つても一定の職業の人に成り得ず何時も窮し切つて居る。何處へ行つても使ひ手が無いからである。

これに反して、假令無能な人間であつても、單に正直といふ一事が其の男の取得になつて居れば、早い話が人の金箱の番人にでも雇はれる。また彼の男は外には何にも能はないが、走り

使ひや掃除をさへすれば、誰よりも好く間に合ふと云ふことになれば、差當り小使と云ふ役目に有付くことが出来る。併しながら總てのことに達して居つても、何を爲せても彼の男は一向間に合はぬと云ふ事になつては、何處へ行つても職を授けてくれる人はない。

兎角學問流行の今日の世の中には、何處へ行つても斯う云ふ人が多し。極言すれば社會の各方面には、何でも出来ぬことはないが、さてこれと云ふ取得と云つては一つもない人間が大勢居る。さうして皆勝手な熱を吹いて、食ふにも着るにも住むにも困りながら怠けて居る。無能ならば人間は寧ろ無能の方が好いが、なまじつか一通り事に通じて、何一ツ取得のない人間程始末に困るものはない。斯う云ふ人間は何うせ碌なことは仕出來さぬものである。されば人間は萬能に達せんとするよりも、何か一つこれと云ふ取得のある人間になるやうに心がける事が肝要である。假令何んな物知であらうと、取得のない人間と見たならば、その男とは決して深く交はらぬことである。そんな誠意の乏しい人間と親しくすると結果は必らず面白くないものである。

(一三三) 氣の小さい女

女は寧ろ内氣な方が好ましいとは云ふものゝ、これも矢張程度問題で、餘りに又氣が小さ過ぎてはだ困るものである。

或る家に嫁を貰つた。誠に忠實な性質で、その温順しいことゝ云つたら口も碌々利けない位で舅姑も傷々しがつて居つた。

オイ!

夫は少し荒い聲で呼ばれても、嫁はビクとして胸を騒がせた。

「この節の女に、内の嫁のやうな内氣なものはない。成るべく大事に撫恤つて遣らなければならぬ!」

舅達は常に斯う言つて居つた。夫も成るべく不憚を加へて、荒い聲では物も言はぬやうにして居つた。

その中に月日は段々過ぎて行つて、早二三年も一緒に暮して見た。嫁は相變らず内氣な一方で、顔色も冴えなければ、一度高笑をするでも無く、何時も片隅に小さくなつて暮して居た。

「彼の様子では病氣にでも成りさうだ。何とかして最少し氣を大きく持たせたいものだ!」

舅姑は窃に嫁の健康を氣遣つて居た。勿論夫も氣を揉んで、色々氣を引立せやうとして

見ても、これが其の性分だと見えて、妻は相變らず小さく成つて居つた。

何か氣の沈むやうな事でも家にあるかと云へば左様でもない。家は老人達初め皆快活な人達で、少しも氣の置けるややうな事はなかつた。夫は時々見かねるやうな事もあつた。舅か煙管でコンと灰吹を叩いても、嫁は直にビクとする。夫は効かに眉を擧めて、

「お前のやうに物に氣を置いて居ると、今に痰氣になつて了ふぞ、何もそんなに小さくなつて居る事は無いぢやないか、少し氣を大きく持つて快活に成らんぢやいかん！」

夫は耐えず積りで言つても、嫁は連りに苦になつて、何うしたらば好からうかと、ハラ／＼思つて御飯も咽喉を通らなかつた。

その中に妊娠した。悦びの聲が一家に充滿した。舅夫婦は喜んで、「今に子供でも生れたら少しは氣が勇んで来るだらう。嬉しいことだ！」と言つて居つた。

月が満ちて男の子が生れた。一家は悦びに騒ぎ狂ふた。時しも丁度年の暮であつた。夫は或る日一包の金を持つて歸つて妻に渡した。未だ産聲を全く離れずに居た妻は、その金を受取つて簞笥の抽斗に納つて置いた。四五日経つて何か用事のあつた序に其の抽斗を開けて見たら、何うした事か金が失せて居つた。後で賊に取られたのだと云ふ事が分つた。併し産婦は一途に

これを氣に惱んで、誰にも言ひ得ず深い思ひに沈んで居た。
これが原因で發狂して了つた。有ゆる方法を取つて見たが、終に正氣に復らずに哀れな最後を遂げて果てた。跳返は宜しく無いが、餘りに氣が小さいと、斯んな結果に成らぬとも限らな
5。

(一三三) 己れの職業を卑しむ人

世には兎角自己の職業を卑しんで、無闇に他人の職業を羨むやうな不心得な人間がある。斯う云ふ不眞面目な人間は決して立身出世を遂げるものでない。

昔の人が謂つて居る「何人にもあれ自己の職業を卑しんで、ア、斯んな事をして居つてはつまらぬと云ふ考への起つた時は、その人間は既に自分の力で飯の食へぬ時である」これは實に左もありさうなことである。

何でも關はぬ、現在自分の従事して居る職業に對して「今自分の遣つて居る職業程結構なことは無い」と云ふ考へを有つて盡してこそ人は始めて其の職業に依つて身を立てることも終には出来るものである。左も無くして自分の日々従事して居る職業に對して初めから不眞面目な

考へを抱いて、長く斯んな事をして居つてはつまらぬなどと思つた日には、云ふまでも無く其の職業に身の入りさうな筈は無い。何んな職業に従事しやうとも、己れの一念力を籠めずして好い結果の得られやう道理は無い。

所が世間大多数の人は、迂濶にも此に心を留めずして、徒らに自分の職業を卑しんで、他人のして居ることを羨むやうな傾向がある。そんな人間は既にそれ丈己れの職業に不熱心不忠實であるので、現在己れの従事して居る職業に依つて身を立てる事が出来ないのである。現在己れの従事して居る職業に對して、斯う云ふ不眞面目な了簡を抱いて居るやうな人間は、幾度轉業して見ても、これは如何にも結構な職業だ」と満足して忠實に働くことは出来ぬ。直に又第二の職業を卑しんで、他の職業を羨むやうに成るに極つて居る。

總じて職業と云ふ觀念の乏しい者は、常に斯うして己れの職業を卑しんで、他人の職業を羨んで居るが、それは大した心得違で、如何なる職業に従事しやうとも、汗をかゝずに大成することは世の中に一つも無い。然るに人間が己れの職業の爲に一汗掻かうと云ふ氣にさへ成れば何んな卑い職業に従事しやうと、熱心に己れの職業に盡せば盡す程、勵めば勵む丈効果の擧らぬと云ふ道理はない。如何に職業ばかりを選んで見た所で、己れの至誠と努力を盡して當らぬ

ことには、斷じて大成するものではない。

各人の職業は何れも皆神聖なものである。職業に貴賤の別は斷じてない。たゞ自己の職業と能く一致して働く人が、人間としての大成功者である。何人も一樣に期せねば成らぬ所は、常に能く己れの職業と一致して働くことで、その職業の種類如何は固より深く問ふべき所でない論より證據、職業に不熱心なお座敷商賣のお醫者さまより忠實に勞働して居る土方の方が遙に見上げたものである。何んな結構なお座敷商賣をしやうとも、怠けて居つては何にも出来ぬが假令その日常生活の草鞋家業をしやうとも、自己の職業に忠實な人間には、必ずそれ丈の果報が見舞つて來ずには居らぬ。要するに事の成否は其の職業の如何に依らずして一に己れの努力如何に依るものである。早く此に氣の着く人は、おのれが最初に得た職業を重んじて、それに依つて大成する。斯う云ふ職業的觀念に厚い人は、斷じて他人の職業を濫りに羨むやうなことはせぬ。何處までも己れの得た職業に依つて身を立てる。斯う云ふ眞面目な了簡の人ならば確實である。決して風來坊に成るやうな憂ひは無い。併しながらこれはいかん、これは面白く無いと云つて、無間矢鱈に職業選擇に日を送り、それからこれへと段々に絶えず轉業轉職するやうな氣の浮いた人間は、終には何にも出来ぬ事に成つて、腰は屈み眼は霞んで來るものである。

(二四) 剽軽な女

世には夫を怨んで見たり、泣いて見たり怒つて見たり、或ひは詬り或ひは張合ひ、又は張てたり拗ねたりして、氣まずい月日を送る女が其處邊中に多いのに、これは又毛色の變つた剽軽な女が居る。

この女の連合は至つて氣短かい、而も口喧しい男である。これを一々氣にした日には到底三日と一精には添うて居られぬ。天の配劑は有がたいもので、女が至つて剽軽者で、男の言ふことを苦にせないので、一家が事なく治まつて行く。

「剽軽者ぢやない伶俐者ぢや！」

心ある老人は斯う言つて、太く此の女を褒めたさうだ。

男は其の性分を露骨にして、時としては詰らんことで大いに怒ることがある。

「オイ箒が倒れて居るぞ箒が、何故箒を懸けて置かんか馬鹿者……」

近所隣に響き渡るやうな聲で怒鳴る。女は黙つて行つて懸ける。

「何故そんなことをして置いた？」

懸けたら好ささうなものを未だ怒鳴つて居る。黙つて居ては止めさうもない。

そんな時には細君は直に態度を一變して男になる。

「コレ、其方は何故左様な大聲を發するのだ。無禮であらうぞ！拙者を何人と心得て居る？」

「巫山戯るな！」

「靜に致せ！」

「擲るぞ！」

「打てるものなら打つて見ろ、斬れるものなら斬つて見ろ、今は乞食の菰被、野末の床に眠らうと、昔を言へば某は春も彌生のおぼろ夜に……」

假聲を使つて演劇を始める。かうした時に客が來ると主人が慌てる。

「オイ廢せ、オイ廢せ！」

「イヤ罷成らぬ。サア尋常に勝負々々！」

「オイ廢せと言ふに、お客さまだよ」

細君は笑つて出て行く。

「入らつしやいまし。餘り宅で怒りますので、只今一劇演つて居たとおさいます」

男は頭を掻いて居る。實に無類飛切の女だ。

明くる日になると一方が又何かアラを見付けて怒り出す。

「オイ縁先に水が溢れて居るぞ、何故拭いて置かぬか馬鹿！」

細君は平氣だ。

「良人は馬鹿のお連合ですか？」

「黙れ畜生！」

「オヤ、良人には尻尾がお出来になりましたかね！」

「汝のことだ！」

「御申談おツしやい、人間が豈夫畜生を女房には持てますまい。だがそれも全く例のない事ぢやありませんわねえ、お聞きなさいよ！」

細君は嫣然笑つて聲を張上げ。

「篠田の森に歸るぞやア……」

安部の童子のおツ母さんを語り出す。御亭主終に苦い顔をして笑ひ出す。笑顔を見れば細君

は直に廢める。

「サアそれぢや御飯にいたしませうね！」

成程これも一種の良人操縦法である。

(一二五) 物好きな人

世には随分物好きな人がある。變名君は或る時小さな壘を幾つも持つて友達の家を戸毎に廻り、主人に會つて、

「君誠に申しかねたが、この壘に君の小便を少々貰ふ譯には行くまいか」

主人が居らねば細君に會つて、

「奥さん誠に御無心ですが、此方の旦那さまの小便を少々この壘に頂いて置いて下さいませんか」

「彼の人は人の小便を貰つて歩いて何にするのだらう？」

何處でも皆疑つて居つたが、別に深い仔細は無かつた。本を見て小便の分析法を覺えたので知らぬ人の小便では興味が少ないと云ふので、友達の小便を貰つて歩いて、それを一々試験管に取つて、御丁寧に試験をして見て、友達の小便の分析表を作つて見るのだと云ふことが分つ

た。

或る時は又瀬戸物屋を一軒毎に尋ねて、

「お前さん所に渡瓶がありますかい」

「ハイございます」

「一寸見せておくれ」

出して見せると、握拳を口の所に持つて行つて、

「ハアこれは口が小さいな！もつと口の大きいのは有りませんか？拳が楽に出入する位の」

店員は驚いてお客さまの鼻に眼を止め、

「御案内の通り、渡瓶の口の大きさは大概極つたものでございまして……、これではお間に合ひますまいか」

「何うも口が小さ過ぎる。この拳が自由に出たり入つたりしなければ使へない！それぢやまあ外を探して見るとせう」

「何うもそんな口の大きいのはお生憎さまで……」

後で店の者は皆笑ひ、

「餘程一件の太い人だと見えるねえ！拳の大きさ程あるとさ、ハ、ハ、ハ、ハ」

幾軒尋ねて見ても、そんな大きな口の付いて居る渡瓶は終に見當らなかつた。終に探しあぐんで瀬戸の窯元に十個ばかり注文して作らせた。さてそんな大きな口の付いた渡瓶を何に使ふかと云ふと、小便をする爲ではなくて、自分の座の傍に置いて煙草を入れて置く爲であつた。友達が怪しんで、

「何でそんな物に煙草を入れて置くんだ？」

問へば笑つて、

「乾かす濡らす、煙草入には學理上、これが一番理窟に適つて居る。我輩の新発見だ。君にも一ツこの口の大きいのを割愛しやうか」

皆いやな顔をして、一人も貰つて行く人がなかつた。

或る時道を歩いて居ると、二三年前家に使つて居つた女中にひよいと出會した。

「オヤ旦那さまでは居らツしやいませんか」

「オ、松ぢやないか珍らしいな！」

女は臍の飛出す程腹が膨れて居つた。仔細を紐くと女は顔を紅くして、男に棄てられた由

語り、

「誠にお恥かしいことですが、最う今夜にも知れぬお腹を抱へて、差當り行場がないので困つて居ります！」

何處まで物好きな男かも知れぬ。細君に内證で早速一家を借りて姪婦を其處に置き、一週間も傍に附いて居て、自分が産婆の代理をして、身二つにして遣つたは好いが、何時しか此のことが知れて細君に怪しまれ、大悶着を惹起したとのことである。

(一一六) 潔癖な女

世には潔癖も亦實に太甚しい女が居る。或る人の細君は毎日幾度となく手を洗ふ。自分の手でも穢ならしく思はれるのであらう。一日の内に少なくとも十四五回は洗ふさうだ。

何か買つても消毒せねば使はない。餘程變つた女で、我が子と雖も何か病氣に罹ると、直に隔離室に入れて了つて、一切傍へは寄付かぬ。顔も見せず居て、それで容體を氣遣つて居る。勿論高級取の細君だから何んなにも我儘が利く。來客用の足袋として、玄關に足袋が何足も出してある。女中は客が來て奥に通らうとすると、それを案内する前に、

「失禮でございますが、貴方さまのおみ足はお幾文でございますらう」

足袋を買ひに來たんぢやあるまいし、始めての客は妙な顔をする。女中が押して糺くので幾文だと言ふと、女中は客の足に合つた足袋を出して、

「それぢや何うかこれとお穿換を願ひます」
「左様ですか」

黙つて穿換へて通る客もあるが、中には應ぜぬ客もある。愠つて歸る客もある。取次の女中は實に困るさうだ。

客が歸ると座蒲團は、直に日光消毒をさせる。茶を出した器物も一々消毒させる。これは好いとして、バケツに熱湯を汲んで來させて、客の坐つて居た疊をゴシゴシ根氣に拭せる。女中は一人殆どこれにかゝり切つて居る。

主人が役所から歸つて來ると、着物を着換へさせぬ中は合はぬ。内は整然と浴室の設備があるのに、召使は一切入れずに、一々錢湯に逐遣つて了ふ、彼等は何んな病氣を持つて居らうも知れぬと怖れるのである。
この女の病氣の時に醫者が來ると面白い。胸を打いて貰つた後で、未だ醫者の居る前で、夕

オルを熱湯に浸して胸の赤くなる程拭く、醫師の手は何んな病人の身體にも觸れるからである。それでも未だ満足せず、

「往診の時は何うか眞先に來て頂たい！」

醫師に注文して置くのが例である。自分の寢室には一切女中共を入れぬ。無論寢具など觸らせやう筈がない。此處丈は掃除も整然と自分の手です。その邊は女中共も大きに助かる。

臺所で働く者には一々消毒を着せて食器その他に手を觸れる前には、自分が側に就いて居て手を洗はせる。それも一度や二度では濟まぬので、給料は高いが皆厭がつて暇を取る、女中雇入掛として、一人老人が雇つてある。

萬已むを得ざる場合の外には決して外出はせぬ。萬一病毒に感染してはならぬと云ふ恐怖があるからである。その癖この女の多病な事と云つたら夥しい。何時も肺病の間屋さんを見たやうな顔をして内に蹲ぎ込んでばかり居る。主人も殆ど持餘して居る厄介な女である。

(一二七) 遊んで居て儲けやうとする人

金儲と云ふも結局は一生懸命に働いた上の話であつて、毎日空しく遊んでヌク／＼と握器丸

をして居るやうな怠惰漢に金の儲からう道理は無い。

所が毎日汗水垂して働くよりは、手足を休めて居る方が樂なので、何うかすると考へ違ひをして、遊んで居つて金を儲けやうとするやうな横着者が出来る。實に不心得千萬な話であるが何れの時代に於いても斯んな無分別な人間を世間から逐放つて了ふことは出来なかつたに違ひない。

總じて斯んな肌合の人間は、何時も手足を休めて居つて、何か旨いことは無いかと、麥飯を餌にして、鯛でも釣らうと云ふやうな蟲の好いことを考へて居る。麥飯の餌で見事鯛が引つかれば一しほのお慰みであるが、鯛はおるか鯛も引つかゝるもので無い。

その結果は何うなるかと云ふと、これは好からう。今度は當りさうだなどゝ山氣を出して張つて見る度に、それも外れこれも亦見事に外れたと云ふやうな形になつて、何とも方法が附かなくなる、こゝで一番反省して、

「人間は山では行かぬ。何うしても地路に稼がなければ勝利は得られぬ」と云ふことに氣が附けば結構であるが、本來山氣に富んだ人間の大多數は地が怠惰漢と來て居るので、幾度手を焼いても目が覺めぬ。

大山が利かなくなると小山を遣る。それも出来なくなつて来ると、空相場にでも手を出して見ぬことには生きて居られやうな氣持がする。そんな事をしたからとて、人間は決して頭の上るものではない。自分も其處に全く氣の附かぬ譯でも無いが、持つて生れた因果の縁に引かれ引かれて、その悪縁を断つことが出来ぬ。最う何に向つて手を出すことが出来なくなつても毎日空しく手足を休めて心は矢張一攫千金を夢みて居る。

斯う云ふ質の人間は、三日も飯を食はずに居つても、地路に働いて飯を食はうと云ふやうな人間臭い根性には何うしてもなり得ない。腹は背中に乾付く程減り寒さに胴顫する境涯に身を置いて何うかして此處に一ツある此の五厘銅貨を貳拾圓の金貨に化す工夫は無いかと云ふやうな浮ツ調子な考へを起して居る。人生を眞面目に解釋して居る人の目から見ると、馬鹿か狂人のやうにしか見えぬが、本人はそんな切ない境涯に迫つても矢張何うかして山で一當て當てやうと考へて居る。實に淺幕な了簡ではないか。

人間が最早此處まで横道に外れ込んで了つては、よしや神佛の手を以てしても救ふべき道はあるまい。ましてや親兄弟や友達の見位は耳に徹へぬ。既に總ての手段が竭きて了ふと云ふと、斯う云ふ質の人間は、道を歩くにも人が何か落しては無いかと、足下を見廻し見廻し行く

やうになるものである。斯んな人間には死ぬまで僥倖心は其の身體から離れない。

人間として人間の義務を果さずに遊んで居つて、何か旨い金儲をし、それで贅澤をして暮さうなどと云ふ不眞面目極まる考へを抱いて居るやうな人間は、生涯決して自主獨立の人間にはなり得ない。成程斯んな無意氣な生活を希望する人間でも、一時は兎も角當てることも無いとは斯言出来ないが、よしや當つたにしても其の華やかさは虹のやうなもので、忽ち痕なく消えて了ふに極つて居る。断じて長く續くべきものではない。世間に其の實例は幾らもあることである。

されば斯う云ふ肌合の人間と見たならば、決して深く交はつてはならぬ。斯んな無分別な人間には、此方が使はれても損をすれば、また此方で使つても手を焼くに極つて居る。永久的勝利を得んとする者は、山氣を出さず正直に、根好く地路に稼ぐことが肝要である。

(一一二八) 人に食物を惜がる女

何の因果か世には馬鹿に人に對して食物を惜む女が居る。實に宜しくない癖である、これ程好ましくない癖はない。斯んな女は次の世では恐らく乞食にでも生れて来るだらう。實に情な

い事である。

或る女は此の癖を有つて居る。この女の身元を洗つて見れば、非常に吝嗇な母親に育てられたのださうである。遺傳性だと言つても宜しい。事實全く左様に違ひない。

この女は美しい顔をして居る。内気なやうで温順しさうにも見える。口は重い方で針仕事などは殊に巧い、経済は中々上手で、内證金を持つて居るらしい。道樂は演劇と着物を買込むことで、これには金を惜まない。その癖人が行つても茶一杯酌まうともせぬ。見た所からして何となく情の冷たさうな女である。

それで不斷家の食物は何うだと言ふと、相當な物を食べて居る。時としては思ひ切つて御馳走を食べることもある。たゞ人に食べさせるのが惜しい。人の爲にと言つては茶を一杯出すことも身を切られるやうに惜しい。實際惜しくて遣り切れない。

家内は小勢である。「仕事は大勢、甘物は小勢」と云ふ上から言へば、一方の方には至極都合が好い。夫は何う云ふ質の男かと言へば、此方は賑かな事を好む方で、人に物を出したり食べさせたりする事も嫌ひでない。併し極鷹揚な男で、既に二十年も此の女と一緒に暮して居りながら、自分の妻が人に食物を惜むなど云ふ事には少しも氣が付かずに居るらしい、だから内に

甘い物でもあつたと思ふと、突然友達を引張つて来るやうなこともある。左様した時には細君は内證で腹を立てゝ居る。口に出しては決して言はぬ女である。實に陰險な質だ。

今朝夫の出がけに田舎から雉子を二羽送つて來た。女は夕方これで御馳走をして、夫の歸るのを待つて居た。夫はこれがあつたので友達を二人引張つて來て、酒を出せ飯を出せと言つた。細君は不性無性豆腐汁で酒を出した。主人も客も意外であつた。

「雉子は何うした。斯んな物ぢや酒は飲めんぢや無いか」

夫は終に堪へかねて言つた。

「彼は餘所さまに差上げましたよ」

「然うか」

夫は客に氣の毒な思ひをした。客は暫く飲んで居つたが、刺身が一皿出て來さうな様子も無かつた。細君の御手際は兼て承知して居るので、二人は匆々に切上げて歸り、途中で鳥屋へ寄つて飲み直した。

此方では客が歸ると細君が、雉子の御馳走を夫の前にウンと出した、夫は不満な顔をして、「これがあつたら出せば好いのに！」

細君は黙つて居た。この家には人が段々來なく成つて行くさうだ。世には孤立した人間程危ないものは無いらしい。お互さまに考へなければならぬことだ。

(一二九) 煙草入を見たやうな人

人間は常に己れと云ふ氣を有つて、自主獨立で仕事の出来る者でなくては、我れも一個の零丸の所有者として此の世に出て來た甲斐がない。

所が我れも男兒に生れて來ながら、獨立しては仕事が出来ないので、煙草入を見たやうに、始終人の腰の廻りに、ブラ／＼して生きて居る人間がある。斯んな活地のない人間は、生涯人の握尻の臭氣ばかりを嗅いで過さなければ成らぬ。決して自分の智慧と自分の力で飯の食へる氣遣はない。斯んな活地のない人間は、假令人に使はれて見ても斷じて太した働きは出來ぬ。だから何時まで経つても獨立することが出來ずに人の腰の廻りにぶらついて、月給が安いとか、使ひ方が酷いとか、口には散々愚痴を言ひながら、矢張人に使役はれて居る。

併し世にはこれ以下の人間もある。それは何んな人間かと云ふと、世には火吹竹を見たやうな連中が居る。言ひ換へて見ると、人の息の力を藉らねば全たく人間の用をせぬ。此方の方は

煙草入を見たやうな人間よりも更に一層始末が悪い。斯ふ云ふ人間は、一々何うしろと人の指圖を受けぬ事には、手も足も全たく動かぬ。

「オイ大戸見、一寸飛んで行つて來い！」

「何處へ行きます？」

「何處へ行くと云つて、炭が切れたら切れたと何故いはぬ。この寒さに火が無くて居られるか」「ぢやア薪炭屋に行くんですか」

「當然よ」

斯んな男は金を持つて薪炭屋に行きながら、炭を小僧に擔がせて來る智慧も出ぬ。自分で擔いで歸つて來た。それは好いが、俵から粉炭が溢れて襟首に入つたので氣持が悪い。家に歸るが早いか、俵をドンと投げたので、直に主人に小言を言はれた。

「馬鹿者め、そんなことをしちや炭が毀れて了ふぢやないか氣を付けろ！」

突然怒鳴られたので呆れて立つて居る。

「早く炭を出さんか」

澁々炭取に少しばかり出して、また茫然と立つて居る。

「出したら早く火鉢につがんか」

「旦那、火種がありませんが何うしませう？」

「何うしませうツて、そんな奴があるか、少しは智慧も出して見ろ！」

「何うしたら好いでせう？」

「瓦斯に一寸火を點けて、その上に炭を三ツ四ツ載せて置けば譚はないぢやないか」

「旦那、炭に火が附きました」

「ぢやア早く瓦斯を消して、その火を火鉢に取るさ」

「旦那、これで宜しうございますか」

「それ丈で何に成る？早く炭をつがねば折角起した火が消えるぢやないか」

「旦那、炭はこれ位で宜しうございませうか」

「そんなに炭をついぢや、今に火鉢の縁が焦げるぢやないか」

「これぢや何うでせう？」

「それツばかり炭をついで何うするんだ！」

「これ位なら好いでせうか」

「早く火を起して茶を沸せ。最う彼此一時ぢやないか」

「旦那、晝飯はありませんでした」

「朝炊いたぢやないか」

「私が食べて了ひました」

「それを今まで黙つて居る奴があるか」

「ぢやア何うしませう？」

一々指圖を受けぬことには何にも出来ぬ。男世帯に斯んな人間を使つては、それこそ何んなに世話が焼けるかも知れぬ。

(一三〇) 人に食べさせて喜ぶ女

人は其の顔の違ふやうに、皆各自に心も違ふ。氣も違ふ所作も遣方もそれに連れて異つて来る。

こゝに又某の妻は、前の女とは反對に、人に食べさせて喜ばせることを何よりの愉快にして居る。これも亦普通の女に比較して見ると随分變つて居る。變つて居つても悪くない性分だ

人は男女ともに皆斯うこそありたいものだ。前の女が次の世では缺腕を抱へて百結を下げ、「お手元は誠に御面倒さまながら何うか哀な乞食に御飯のお残りでもありましたら」と言つて人の門に立つ身に生れて来るものだと思へば、此方は貴顕富豪の夫人にでも生れて来なければならぬ道理である。この女を育てた母親を檢べて見ると、これが又人に物を振舞ふことを太く喜んだ婦人ださうだ。つまり此方も遺傳性を稟けて居るものだと思へる。

この女は何か口當りの好い物でもあると、直にそれを公開して、自分の口へ入れるよりか先づ人の口に入れさせる。さうしてそれを喜んで居る。

人が来れば何か直に食べさせる。無ければ態々拵へたり買つたりしても食べさせる。誰が来ても何か食べさせぬ事には何うしても気が安まらぬさうである。その癖自分は不味物を食べて満足して居る。「自ら奉ずること厚き者は人に薄く、人に奉ずること厚き者は自ら薄し」と謂ふのは全くである。

この婦人の内には家族が大勢居る。子供の數丈でも七八人はあらう。書生や女中も三四人は居る。生活は決して樂でない。けれども婦人は其の中に惜まらず人に物を食べさせ、身を切るやうな思ひをしても人に物を施して居る。

「壹錢の貯金も持つて居らん癖に、妙に人に物を食べさせたり遣つたりしたがる女だ！」

中には斯う言つて嘔ふ者もある。人が何と言はうと本人は氣にも止めず、平氣で人に施したり饗つたりして居る。餌のある所には自然と生物が集つて来る。人も亦その通りである。この家には人が絶えぬ。不思議と各種の人が集まつて来る。一日の内には誰か一人位は来て、箸を濡して行かぬことはない。金は無くても何時も家が賑かである。笑聲が聞えて居る。「奥さん斯んな物がありません」と言つて、人も亦好く物を持つて来る。この奥さんは人に物を貰つたよりも遣つた方を喜ぶ。人とはまるで反對だ。

この家に何か事があると云ふと、人が直に集まつて来る。皆好く働く。金錢づくでは得られぬ事だ。家は何方かと言へば貧乏であるが、この夫婦が愈々困つた場合になると、不思議と天佑が遣つて来る。皆この家の繁昌せんことを祈つて居る。子供も無事に育つて行く。子供達が皆母親の性を稟けて何の子も何の子も人に物を遣つたり食べさせたりする事を喜ぶ。だから誰にも愛せられる。實に好い家風である。

(一三一) 働いて貧乏する人

怠けて居つて貧乏するのは當然であるが、世には何うかすると、日を通じ年を通じて、一生懸命に働いて居る癖に、何時も物に不自由して居るやうな人がある。

己れの職業を大切にして、精一杯稼ぐと云ふ事は、人間に取つて最も大切な事ではあるが、たゞ稼ぐばかり稼いだからと云つて、その割合に効果の擧るものではない。おなじ仕事に向つて、おなじく力を用ひるにしても、工夫好く働かなければ、その努力は得て無駄骨折に終り易いものである。

切々と働いて居る癖に、何時も貧乏して居るやうな人間は、その不斷に於いて必ず無駄骨を折つて居るに違ひ無い。さも無い事には其の効果の擧らぬ道理は無いが、その缺陷を發見せず無暗と力を用ひるので、結果は何時まで経つても擧らず、譬へば底の無い桶に向つて切々と水を汲み込むやうな事になる。斯う云ふやうに無駄骨ばかり折つて居る人は、如何に力を用ひても、生涯決して黄金の色は見られるものでない。

例へば箱を作るにしても、無暗に釘を打込んだばかりでは、決して確りした箱の出来る氣遣は無い。確かな箱を作らうと云ふには、その要所々々に向つて、一本々々利釘を打込む事が大切である。常に工夫の功を積んで、成るべく効果の擧るやうに働く人は、餘計な骨折を省いて

要所に向つてウンと力を用ひるので、ズン／＼働き榮えがするが、これに反して工夫も無ければ手順も極めず、言はゞ無茶苦茶に働く人は、何時も無駄骨ばかり折つて居るので、勞多くして効少なく、日を通じ年を通じて、絶えず忙しい思ひをして居る癖に、その獲る所は甚だ少なく、不斷怠けて居る人と何等の異なる所も無い。

斯う云ふ愚かな人の働く所を見たならば、何處かに恐らく間の抜けた所を發見するに違ひ無い。おなじく力を用ひるにしても、雨の降る日に山に出かけて薪材を伐り、天氣の好い日に家に居て、切々と繩を縛つて居るやうな事をして居るに違ひ無い。おなじく働くは働くにしても總てに斯う云ふやうな働き方をする人は、生涯斷じて勞働の光輝ある効果を發見する事は出来ぬ。

如何に力を用ひて見た所で、急所に向つて利釘を打込む事を知らぬ者は、朝から夜まで働き通しに働いて居つても、何時も相變らず貧乏生活をして居なければ成らぬ。世の無慘なる貧乏人には、得て斯んな働き方をして居る人間が多い。その愚や實に哀れむべき次第である。

されば人間は働くにしても、大いに工夫の功を積んで、整然と豫め其の日の仕事の段取や筋道を立てた上で、成るべく我が勞苦の結果を有効ならしめるやうに實行しなければ成らぬ。然

らざれば所謂「馬鹿の糞骨」に終つて、底の無い桶に向つて切々と水を汲み込むやうな結果になる。

この點から推して考へて見れば「彼の人間は能く働くから」と云つて、決して信頼せられるものでない。彼は眞に能く働く人間であるか何うか」を確かめるには先づ其の働き振の如何を見ることが大切である。人間には日を以て計る時は餘りあるが如く見えて、年を以て計る時は何物をも有せぬ人もあれば、また日を以て計る時は何物をも有せぬ如く見えて、年を以て計る時は實に驚く程多く貯へて居るやうな人もある。人を使ふにしても、能く其の人を見分る能のない人は、決して人を活用することは出来るものでない。

(一三二) 人の物を欲しがる女

世には又清ましい心を有つた女が居る。それは人の物を欲しがるのだ。これも亦誠に好くない性癖で、人に厭がられること夥しい。無理ならぬことだ。

この女が來ると、人が慌てゝ物を隠すやうになる。小切一ツでも見やうものなら、

「マアこれは好うござんすわねえ、私も何うかして斯んなのを欲しいわ！何處へ行つたら斯ん

なのを賣つてるでせうね、私も何うかして斯んなのを買ひたいわ！」

直にこれだから遣り切れぬ。全く厭に成つて了ふ。

何でも人の物を見さへすれば直に欲しがる。それも一通りや二通りの欲しがり方でない。生命を懸けて欲しがるから堪らない。心から欲しがる、一途に欲しがる。物惜をせぬ人になると

「そんなにお氣に適つたら上げませうお持ちなさい。イエ宜うござんすよ」

「左様ですか、ぢやア頂いてまわりますよ。何うも有がたうございました！」

喜んで持つて行く。人に物を貰ふのを何とも思つて居ない。

或る家で澤庵漬の蓋を開けた所に此の女が遣つて來た。桶の中を念入に覗き込んで、

「マアおいしさうな色に好く漬りましたこと、お鹽の加減も好ささうでござんすね。何うしたら斯んなに巧く漬りますでせう。奥さん私はお澤庵が大好きでござんすよ。斯うして見ますと頂かずにや居られませんか」

此方は煩い。

「ぢやア二三本お持ちなさい」

「マア左様でござんすか。ぢやア頂いてまわりますか」

何處へ行つても直に此の手を遣るから堪らぬ。全く近所の嫌はれものだ。

云ふやうに何を見ても直に欲しがる。矢張一種の病氣と見える。本人には病氣かも知らぬが近所の人達には迷惑である。大人の物を見て欲しがるのは未だ好いが、子供の持つて居る物を見ても欲しがるから始末が悪い。子供が物を食べて居る。直に側へ行つて、

「坊ちゃんそれはおいしいでせうね、誰にお貰ひでしたの、好うござんすね」

「小母さん半分上げやうか」

氣の大きい子であれば、直に分けて半分遣る。女はニコくして、

「坊ちゃん何うも御馳走さま、有がたうございます！」

まあ斯う言つたやうな風である。家が貧乏かと云ふと左様ではない。家には何でも腐る程ある。だから一層人が厭がる。

何して家の妻はあゝあるだらう浅間しい！」

夫はぶつ／＼零し切つて、何うかして此の癖を治さうと、何でも不自由の無いやうに氣をつけて、物をズン／＼買つて遣つても、女は何うしても此の癖が治らない。近所では誰でも乞食だ／＼と言つて居る。

(一三三) 遠慮深い人

人の家に黙つて上り込んで、催促をして飲んだり食つたりして行くやうな横着な人間があるかと思ふと、世には又何處までも内氣な、何處までも遠慮深い人がある。

某君は有名な正直者で、同時に又有名な遠慮家であつた。或る時用事があつて他家に行き、丁度晝飯時に主人と話を居つたので、細君が御飯拵へをして二人の前に御膳を出し「眞の有合せでございますが」と云ふと、客は御膳を見て飛びあがる程吃驚し、談話を止めて告暇も匆々に飛んで歸つて了つた。

その後細君は懲りて了つて、この人が来ても一切物を出さぬことにした。菓子を一ツ出して後にも後に寄り、非常に氣の毒がなるのが、此方は又其の人に對して氣の毒で堪らなかつたからである。一二年も経つて後、向ふに又何か急用が出来て、丁度晝飯時に來合せたので、細君は何う仕そうかと思つた。また突然出して逃出されると、向ふも迷惑此方も氣の毒、後で回復の附かぬことになる。今日は一ツ豫じめ向ふさまの思召を伺つて見た上に仕やうと云ふので、

「何にもございませんが、丁度御時分でございますからお賚食を差上げたいと思ひますが、

如何でせう、召食つて頂かれませうですか」
主人は叱つた。

「そんな餘計な口上を述べる暇で早く持つて来い。それぢや君一緒に飯を食つて早速出かけることにせう」

「有がたうございますが、私は最う食べて参りました」
主人は笑つて、

「馬鹿言ひ給へ、君の話の様子ぢや、書飯を食つて居つた暇などは無かつたらしいではないか御馳走はないが毒は入つて居らんよ。マア一杯一緒に食つて出かけやうぢやないか」

流石遠慮家の隊長も今日は逃げ出す譯に行かなかつた。モジ／＼して居ると、細君が御膳を持つて来た。客は如何にも、恐縮の體で箸を取つたが、僅かに一碗食べた丈で「最う十分です最う澤山です」と茶碗を抱へて後に引き、訴へるやうに御容赦を歎願した。それつ切最う此の家では、この人が来ても断然物は出さぬと云ふことに極めた。

この遠慮家先生が或る年の夏の夕方に、また用事があつて或る人の家に訪ねて行つた。主人が面會して、

「サア君、何うかズツとお先に」と言へば、此方は「ハイ」と言つて後に引く。また「其處ぢやお話が出来ません」何うかズツと此方へお進み下さい」と言へば「ハイ」と言つて又ズツ後に引く。肝腎な用談に先立つて、主人と客とで、先づ席の間答をして居る中に、客は段々後に引いて、遂に縁先まで後退したは好いが、最後に「ハイ」と言つて又後に退つた機勢に、主人が何より大切にして居つた青磁の水盤を迫り落して、見事二ツに割つて了つたさうである。

この人が人に電話をかける時は面白い。先づ電話口で連と丁寧に叩頭をする。さうして向ふの一言々々に對し「ハイ／＼」と頗ぶる慇懃に頭を下げる。その様子を見て居ると馬鹿げても居れば氣の毒でもあり、また失笑したくなる程滑稽にも見えるさうである。

餘り不遠慮極まる人間は、得て人から嫌はれるものであるが、遠慮するにも場合と程度のあるもので、斯う云ふ極端な遠慮家は、初めから不遠慮な人間と同様に、人に不快な感じを與へて遠慮したために、却つて愛想を盡かされるやうなことになる。總じて人間は何事にも素直なのが、一番人から可愛がられるものである。

(一三四) 借金取と喧嘩をする女

去る所に馬鹿に喧嘩の好きな女が居る。近所の人とは毎日子故に喧嘩口論をする。喧嘩と來ては飯よりも好きで、その又口の達者さと來ては男に舌を振はせる。

鳥の鳴かぬ日はあつても、その邊で此の女の叫聲の聞えぬと云ふ日はない。朝から一度も聞えぬ時は、病氣をして寝て居る時か、一三日食へずに休戦して居る時か、さも無い時は何處へか出かけて居る時である。

喧嘩の相手は近所の人達丈では物足らぬ。女の癖に道を通つて居る人に喧嘩を吹ツかけることもある。亭主は破戸漢で滅多に家に居たことは無い。

子供が三人ある。何奴も涕垂小僧の板面ものだ。蟹の子で真直に這ひさうな道理はない譯だ。元より一定の家業があるでも無いので、内の貧乏さ加減と來てはまるでお話になつたものでない。

女は口を資本にして食つて居る。甘い事を言つて商人から物を借りる。借りた時は貰つた積りで、元より支拂ふ豫算も無ければ返す積りでは借りもせぬ。

家主の老爺さん始め諸方から毎日掛取が遣つて來る。女は明日にも金が車力で來るやうな法螺を吹いて追返す。そのお世辭の好き頓智愛嬌挨拶向の巧いこと、云つたら手に入つたものだ。

始めは誰でも烟に巻れて二の矢も次げずに腰を屈めて歸つて行く。左様なら何うか御機嫌好うお静かに……」など、女は言ふ、歸つて後ではペロルと長い舌を出す。

併し出入商人も長く此の手に乗つて居る餘裕のあらう筈がない。それ、嚴談に及んで來る。事こゝに到るや否や、女はからり其の態度を一變して、

「何だ筈棒め無い物は拂へねへや！」

女だてら立膝の卷舌だ、サア其處でお得意の喧嘩が始まる。小僧や若者位ならば一吹だ。終ひには怖い顔をした酒屋の主人さんや、米屋のお父さんなどが目を光らせて遣つて來る。誰が來やうと女は平氣でしやあゝして居る。

「マア待つておくんさいよ。今の所は都合が好くない！」

これ丈言つて相手にせぬ。

「ぢやア何時來れば都合が好いんですか、三十日に來いと言ふから三十日に來れば五日に來いと言ふ。五日に來れば月半にと言ひ延す。果は盆になり暮になり、何時來ても拂つた事はあるまい。都合の好い時は何時だ。それを聞かう。餘り人を馬鹿にする！」

「何うせ貸したものだ、まあそんな大きな聲を仕なさんなよ、私は聲ぢやないよ！」

「ぢやア全體何時が都合が好いんですかい？」

「分らない人だよ。左様さね、矢張都合の好い時が都合が好いね。ほんとに人を笑はせらあ、

女だと思つて居るとまるで手の付けやうがない。近所の人は毎日の事であるので馴れて居るが、餘り騒ぎの太い時は、

「ソレまた借金取と喧嘩が始まつた」

前に来て列んで見物する事がある。そんな時には女は群衆を睨みつけて、

「何で人の家の前に立つ？借金取位がそんなに珍らしいか。欲しけりや幾らでもくれて遣るから持つて行けえ！」

斯う言つて喚き叫ぶ。皆バツと逃げて散る。怖ろしい女だ。

(一三五) 妙な癖のある人

人間に何か癖の無いものは無い。一面から言へば、癖に手足の附いたのが人間だと言つて可い位なものだ。

人と談話をしながら鼻糞を掘くるやうな不體裁なことをする人もあれば、それが一歩進んで

は掘くつた鼻糞を指頭で丸めて、客の顔に弾きかけると云ふやうな人もある。

またお客さまと應對しながら、小楊枝で齒垢を掘り、この齒垢を楊枝の先に指して、齒垢の臭氣を一々嗅いで見なければ承知せぬやうな癖のある人もある。

それかと思ふと客の前で握翠丸をして、膏の出で居る奴を掴んだ手で、お客さまの茶碗を取つて、不遠慮に縁に手をかけ、お茶を注いで下さるやうな親切な人もある。

その一方には何處までも潔癖で、何か弄ると直に一度々々手を洗ひ、一寸疊に手を突くにも直接には突き得ず、わざ／＼手を袖に入れて、袖越しに疊に手を突くやうな人もある。斯う云ふ潔癖な人になると、決して人の一度使つたやうな物は使はぬ。他の家に行つては、物を食つたり飲んだりせぬ。客齋家のお客さまには持つて來いである。小便をする時にも自分の袴を汚がつて、片足上げて前を捲り丁度犬が小便するやうな鹽梅式に、片足上げて用を足す。一寸面白い癖である。

また自分が客と話をして居る傍らに細君が居ると、何か一言客に言つては、その一言々々の間の手に、時々と必らず細君の顔を見るやうな癖のある人もある。

また細君が何を言つても「ウン／＼ウン／＼」と熱心に點頭くやうな熱心家もある。また細

君に御同伴を仰せつかつて、殊の外恐悦に存じ奉つり、後からお伴をして行きながら、前に行つて振り返り、或は横に廻つて横顔を眺め、または遙か後れて其の後姿を眺めるやうな旦那さまもある。

そんなことは先づ御隨意であるが、世には實に奇癖を有つた人がある。或る一人の若い司法官で、毎晩夜食の済んだ後で、必らず一度づゝ細君の鼻を弾いて見ぬことには承知せぬと云ふ人がある。母指と中指とに力を入れて、細君の鼻の先を思ひさま強く弾く、すると一方は涙の出る程痛いので、聲を上げて「アイタ」と言ふ。その聲と、ピンと弾く時の心持が、夫に取つては實に愉快で堪らぬのださうである。實に残忍な癖である。

それで夫婦交情は何うだと云ふと馬鹿に睦い。實に水も漏らさぬ程である。けれども夫の奇癖は休まぬ。毎日夕食が済むと、夫はこれを日課として、否、その日一日の唯一の楽しみとして「オイ一寸此處に來い！」

この一言を聞いた時は、細君は實に慄へ上るさうだ。行かねば御機嫌が悪い。イヤ到底遁れられぬので、羊の歩みたどぐと行つて夫の前に坐ると、一方は莞爾して顔の相好を崩し、「好いか、鼻を出せ！」

「痛たア！」

「最一ツ！」

「オ、痛ッ！」

細君は鼻を抱へて涙を溢す。若し細君が病氣でもして居る場合には、夫は太く力を落し細君の枕頭に行つて、

「オイたつた一ツで好いから何うだね」

「良人今日は御免です！」

斯う云ふ時が、夫は何より辛いさうである。細君は未だ二十七八位の美人であるが、毎日鼻を弾かれるので、可哀さうに鼻の先が赤く色付いて、石のやうに堅く成つて居るさうである。

(一三六) 新らしい女

或る一人の身分ある人が骨折つて一人娘に高等教育を仕込んだ。在學中如何はしい浮名が二度立つた立つたが、兎も角學校では卒業した。

先づ一段落、先づ一安心だと親達は喜んだ。何より先に良縁を選んで嫁に遣らうとした。と

ところが娘が應じなかつた。

「私彼んな所へ嫁に行く事は好みません！」

親達は眼を圓くして驚いた。色々に説きつ諭しつして見たが、娘は唯鼻頭で冷笑つて居た。呆れかへつたが逐出す譯にも行かぬ。これは一番流儀を變へてと、怖い顔をして居る叔父に頼んで、娘に意見して貰ふことにした。

娘は一日嚴格な叔父の家に呼ばれて行つた。叔父さんは威儀を繕つて女の道を懇々と説き、口を酸くして其の不心得を諭して見た。娘は此處でも冷笑つて、

「叔父さんそれは昔の女を教訓した舊式の倫理で、今日承まはると隔世の感が致しますわねえ、随分お古くてよ、オホ、ハ、ハ」

叔父さんも荒騰を挫がれた。

「慎しめ、女だてら怪しからん事を言ふ。眞理に古い新しいがあるか」
娘は肩を揺つて笑ひ、

「叔父さんは根ツから話せない仁ですわねえ！私最少し叔父さんは頭腦の融通の利く仁かと思つて居りましたの」

叔父さんは苦蟲を嚙潰したやうな顔をした。更に其の不心得を諭して、

「親の言ふ所に嫁に行つたが無難だ。悪い事は言はぬ左様しなさい！」

「だつて自己の意志に背いて、虚偽の結婚なんかして見た所で始まらんぢやありませんか。何もそんな事をする必要は無いでせう。私は私を愛し、また私の愛する男の所に勝手に行くわよ」
「そんな野合的結婚を遣つて、末を全うした者がない！」

「いやに成つたら別れるまでですわ、いやな所に行けと言ふのは御無理でせう。叔父さん人の意志は自由なもぢやありませんか、私は私の自由になりますから、何うか御心配下さいませな」
「それならそれで可いとして、お前はこれまで骨折つて育て下さつた親の恩は思はんか、親の言葉には背いても好いと思ふか」

「左様ですね、私は別に親の権能などは認める必要が無いと思ひますわ！」

叔父さんは飛上る程驚いた。

「コレお前は氣が狂れたんぢやないか。今乃公に言つた事は本氣の沙汰か」

「勿論ですわ、叔父さんは何故そんなに吃驚なさいますの？これが正しい御返事ぢやありませんか」

「最う好い歸れツ、今後は断じて此の家に足踏する事は許さん！」
 この翌日娘は無断で家出をした。親を棄て、兄弟を棄て、好いた男と手を引連れて、何處へ
 行つたのであつた。暫くして母親の所に男の惚氣をウンと書いた手紙が届いた。今日は斯う
 した女が世には澤山居るさうな。ハテさて厄介なものである。

(一三七) 物忘をする人

世には馬鹿に記憶の強い人があるかと思ふと、一方には又馬鹿に物忘をする人がある。物に
 記憶の強い人は得をする場合が多いが、その反對に忘れツぽい人に成ると、損をする場合が少
 くない。

根は薄情な人でなくても、物忘をする人になると、心にもなくつひ其儘にして人から頼まれ
 た大切な事などを忘れて居つて、その爲人から悪く思はれるやうなことが屢々生じて来る。

去る人の如きは、實に自分でも時々呆れかへる程物忘をする。自分でも困れば家族も困る。
 親しく交際して居る人も、殆ど持餘すやうな事がある。けれども御當人は案外平氣で、何處を
 風が吹くかと云ふやうな顔をして居るので誠に困る。

だから此の人に物を頼む時は、誰も彼も念に念を入れて頼む。

「君好いかね、明後日だよ」

「ア、分つた」

「君好いかね、明後日は明日の翌日だよ」

「ウン分つてるよ」

「君大丈夫かね、愈々明後日の夜と相成つたよ」

「ウン知つてる大丈夫だよ」

「所が君は何でも甚はだ大丈夫でないので困るて！この前も彼程固く約束をして置いて忘れた
 ぢやないか。その爲家には執達吏が遣つて来る、實に己れは面目を缺いて了つたよ」

「ウン彼の時は實際忘れて申譯が無かつたよ」

「濟んだことは仕方がないが、明後日は言はゞ人間一生の大禮、人の一番縁起を祝ふ婚禮だ。

それも普通の婚禮とは違つて、前々の關係上是非君で無れば都合が悪いんで、君に媒妁をお頼
 みしたんだよ」

「今更そんな事を諄く言はんでも分り切つてるぢやないか」

「ところが相手が君のことだから、よく身に泌み渡るやうに言つて置かねば安心が出来んて！
宜しいかね聞きなさい、よく聞いて置きなさいよ。さう云ふ行きがよりで君に媒妁を頼んだん
だから……」

「ウン好く分つたよウ！」

「宜しいかね？だから明後日の夜、君達夫婦が婚禮の席に顔を揃へて出してくれんと事件だよ。
若し又忘れられでもすると、それこそ眞個に結末が附かんよ」

「行くよ屹度行く！内の嬪にも君から好く左様言つといてくれ給へ！」

「所が君の細君曰くさ、私は何んなことがあつても忘れませんが、内の人は何うも當に成りま
せんよ。私はお受合することは出来ませんから、前以て其のお積りで居らして下さいと、君の
細君に言はれて見ると、此方も安心して譯にや行かないぢやないか。眞個に君大丈夫かね？」

「大丈夫だよウ！」

「承知しましたかね？」

「受合つたよ」

「萬に一ツも忘れるやうな事はあるまいね九助さん！」

「忘れやうと言つても、君見たやうにそんなに耳の端で煩く言はれては、如何に忘れッばい乃
公でも忘れやうが無いぢやないか、最少しお手輕に頼んで置いて貰ひたいね！」

「サ、さう言つたやうな了簡だに依つて、君は人から頼まれた事はつい忘れて了つて、この前
の執達吏一件のやうな手違を人に及ぼすことに成るんだよ。それはそれとして九助さん、明後
日の夜は大丈夫だね、愈々以て確かだね？」

「ア、大丈夫、大丈夫、岩崎男爵の裏書よりも確實だよ、安心してお居下さいよ」

「忽ち大禮の當日と相成つた。細君は朝起きると直に注意した。」

「サア良人、今日お忘れになると大變でございますよ」

「イヤ忘れぬ。今日は何んな事があつても忘れぬ。今日忘れちや大變だ。何んなに不足を言は
れるかも知れぬ」

「お早うございます！」

「アレ最う見えましたよ」

「細君は細帯姿で飛んで出て、」

「お早うございます。今日はまあお芽出たうございます！」

「有がたう、今夜は何分宜しくお願ひ申します！未だお休みで居らっしゃいますかな？」

「イエ最う眼を覺して居ります。只今お眼に懸りますでございませう」

「寝てる所に來られでもしては厄介だ。ヤレ堪らずと跳ね起きた。急いで出て来て、

「ヤアお早う、最う御催促ですか、大丈夫、今日は決して忘れませんよ」

「一昨日彼程お願ひ申しちや置きましたが、實は甚だ不安心なので、今朝早々念の爲に又お願ひに改めて出て來ました」

「大丈夫、飯を食つて床屋に行つて、最う整然と羽織袴で待つて居ります！」

それではと、先方は始めて安心して歸つて行つた。細君は益々氣が揉めた。

「良人今日は生命がけでございますよ。御飯を食つたら、すぐ床屋に行つて入らっしゃいよ」

「大丈夫だ、心配するな！」

成程、朝飯が済むと、すぐに床屋に出かけて行つた。程なく頭をテカ／＼光らせて歸つて來た。

「良人、すぐとお湯に入つて入らしちや如何です？」

「イヤ今日は寒いから、最う湯には入るまい」

「左様ですか、ちやア最う着物を着更へて居らっしゃい」

「餘り早いがさうして置けばもう安心だな」

直に禮服着用に及んで、今度は此方から逆襲に出かけて行つた。

「今日は、如何ですか、此方は今でもお供を致しますよ。この通り／＼」

「ヤア最う悉皆お身仕度が出來ましたな！今日は何うも御苦勞様でございます。併し未だ今夜のことでありますから、何うかお宅さまで御ゆつくり……」

「ちやア一應引取つて居ります。御用の節は何時なりとも！」

歸つて來たが身の置場に困る。夕方まで斯うして居つては退屈で仕方がない。と思つてブラ／＼外に出かけた。

「ヨシ今國技館に大相撲が始つて居る。今日の取組は見ずにや居られぬ」と一人の客がいつて居つた。「出かけやう、中入前まで見て來やう！」

ひよいと電車に乗つてズツと行つて了つた。

寒い日であつたが、上野淺草は可なり賑であつた。正月十五日は早日の暮になつた。細君は亭主の行方が朝から知れなくなつたので、嫁の家には内證で彼此探したが、愈々行方が知れぬ

と云ふので青くなつて居ると、向ふから使が来た。

「何うか直にお来し下さいますやうに！」

儀式の場合だから切口上だ。細君は申譯がないので、屋後の井の中にでも飛び込みたくなつた。此方は亭主、國技館に来て相撲を見ると媒灼人も蕪もあつたものでない。すぐに持病を出して全く相撲に見入つて了つた。中入どころか最後の勝負まで見て了つた。その儘飛んで歸つて来れば無事であつたが、自分一人は天下泰平國土安全、今夜の事も明日の事も忘れて了ひ、歸り兩國邊で一杯飲んだ。飲むと此の男は家に歸らぬ癖がある。今夜もこれから何處へ行つて何をするかも知れぬ。大丈夫家に歸る氣遣はない。細君は今頃は何うして居るだらう。細君は關はぬとして、娘を今夜嫁にやる家では何うするであらう。祝言に媒灼人が無くては妙なものだ、若し一夜延すとしたら貰ふ方では何うであらう。不斷は兎に角こんな場合に斯んなことが生じて来ると、一人の爲に諸方で迷惑をしなければならぬやうなことが出来る。世には何うかすると、斯う云つたやうな厄介千萬な人間も實際ある。

(一三八) 男を見たやうな女

女は身體の格好や言葉遣などの總て優しいものだとのみ思つて居ると大違、中には男を見たりやうな女が居る。男の中にも女のやうな男が居ると同じ寸法だらうか。

この女は怒肩の獅子鼻、眼が大きく口が大きく、眉が尖つて頬骨が出つ張り、顔が四角で額が廣く、脊が高く脚が太い。髪は異人さんのやうで、色は印度人の御類類筋である。聲は男子に其儘で調は太鼓のやうに大きい。これで男装したならば、何んな老練な探偵でも、よもや女子とは眼が届くまい。

變性男子かと云へば左様でない。子供の二人ある所を見ると女子にあるべき物が整然と完全に具はつて居るに違ひない。また髪も時々圓鬚などに結つて居る。着物も應揚をして幅の廣い帯を締め、八口から紅い物がチラ／＼と溢れて居る。

併し何う見ても體軀の格好が男子だ。道を歩くにも大手を振つて、裾をパツパと跳ね返して行く、可哀さうに彼でも女子かと思し召したら、造物者でも御自身の御失作が可笑しくお成りになるだらう。況んや人間同志では、この女の歩振を見ると、いかに無頼着な男でも笑はずにや居られまい。

或る日この女が最も勇壯な態度を見せて大道を歩いて居つた。向ふから来た男が、疑ひの眼

を持つて此の女を見て居つたが、髪や着物の様子を見て、女と合點が行つたものか、腰を屈めて物和かに、

「モシ少々物を承はりたうございますが、この邊に伊勢屋さんと云ふ呉服屋さんがございませうか」

女は腰を伸して男を睨み、

「おれは知らん！」

大手を振つて其儘サツサと行き過ぎた。男は驚いて振返つて居つたが、ぶつと吹出して女と反對の方向に行つた。

この女の御亭主と來ては小男の瘦形だ。おまけに女よりは年齢が四ツ五ツも若い。男は體軀の小さいやうに聲も低い。名古屋訛で猫のやうな聲を出す。

「オイこれやこれや」

斯う言つて豪傑の内儀さんと呼ぶ。

「何んだアな？」

捕つて食ひさうな返事をする。小男は職業の牙彫細工を遣りながら、

「最うお飯にしやうかにアもう……」

「未だ早い！」

「左様かにアもう」

「もつと稼げ〜！」

亭主に號令しながら己れは立膝をしてスパ〜煙草を喫して居る。その勢力の偉大さに男は烟に巻れて居る。

「オーイ！」

亭主を呼ぶに何時もこれだ。

「何かな？」

「使だよう！」

亭主はチヨコ〜出かけて行く。

「えらい内儀さんもあつたもんだ」

近所では皆笑つて居る。これで此の女は時々白粉を買ふと云ふ噂がある。何うも信用の出來ぬ話だ。

(一三九) 貯蓄心に富んだ人

貯蓄心のない者は野蠻人だと云ふが、文明國にも野蠻人は深山居る。言ひ換へて見れば、貯蓄心のない者は世の中に幾らもある。貯蓄心のない者は、假令貯蓄が出来ても貯蓄をせぬ。食物に困らぬ間は怠けて居つて坐食をする。食物のある間は結構だが、それが竭きたとなつたら大變だ。身體も丈夫であり家族の身の上にも幸ひ事變がなければ困る中にも未だ／＼樂だが、食物は渴きた身體は病くした。お負けに家族の上にも何か事が出来たと來ては進退忽ち谷まつて何うすることも出来なくなる。急に貯蓄の必要を感じても、最う斯うなつては野邊戻りの醫者診議で、何んなに心を碎いて見ても追ツつかぬ。貯蓄心のない者は得て此處に落ち易いが、これは其の筈で、貯蓄心のない人間になると、朝飯に御馳走を食ひ盡して、書飯や夕飯のことは少しも考へぬ。萬事が今日主義で明日のことなどは考へて居らぬ。今日食つて了へば明日困ると云ふやうなことは思はぬので、貯蓄など云ふことには氣が附かぬ。有ればある丈浪費して了ふ。今日此處に金が壹圓あるから、この内の五拾錢は今日の生計費に充て、残る五拾錢は明日に備へて置かう。さうして今日は一生懸命に稼いで、今日一日に得たところの金は、

その儘貯蓄して置かうと云ふやうな手堅い考へは起つて來ぬ。假令起るは起つて來ても、その考へ通りに實行する勇氣もなければ忍耐もない。斯う云ふ人間は何うしても一から十まで困らねばならぬやうに出來て居る。イヤ自分から困るやうに困るやうにと其の平生を遣つて居る。だから生涯頭の上る時はない。人が頭を上げさせんのではなくて、自分で頭を上げぬのである。斯う云ふ人間は始終その生計に困つて居るので、雇つて使つて見ても一向仕事に身が入らぬ。生活の苦しみに氣が散るので、何うしても一生懸命になつて働らくことが出來ぬ。その上不正直な人間になると内證でちよい／＼宜しくない事をするものである。だから人にも自然と信用が薄くなつて來る。總じて貯蓄心のないやうな人間は、萬事に何うも手都合が好くないやうになつて來る。斯んな氣の浮いた人間と親しくして居ると、幾干か其の人間の爲に屹度遣られるものである。

これに反して、貯蓄心に富んで居るやうな人は、その引締つた心に伴つて日常萬事が秩序的で、進取の氣にも富んで居る。少しでも多く後日の準備をしようと思ふので、人よりも多く働く。さうして人よりも少なく使ふので、日毎に月毎に年毎に段々と豊に貯蓄が出来ずには居らぬ。人間は貯蓄が出来ると自重するやうになつて來る。言ひ換へて見

れば、常に眞面目に稼ぐやうになつて、世の浮浪の輩とは違ひ、壹圓の元金で百圓も儲けやうと云ふやうな氣の浮いた事はせぬやうになる。「彼の男は手堅い」と自然世間の信用も出来て来るので、此方は益々仕事が出来やうになつて来る。

人間は貯蓄が出来て来ると、毎日安心して働けるやうになる。人間が安心して働けると云ふことは非常に結構なことで、此處まで来れば最う占めたものだ。獨立獨歩で誰の御厄介にもならず世の中に立てる時である。「自分は斯んなに貧乏では、老後は全體何うなるだらう！」又「今自分が重い病氣にでも罹つたら、家族は何うして暮すだらう！」おのれの心に毎日斯うした憂ひがあれば、人間は決して渾身仕事の人になつて脇眼も振らず働けるものではない。貯蓄のあると云ふことは、人間に非常な強味を與へるものである。おのれが不斷の心掛で、多少共に貯蓄を有つて居るやうな用心深い人であれば、先づ安心して交際して可いものだとしなければならぬ。

(一四〇) 我儘勝手な女

或る一人の青年紳士が、虚榮心に捕はれて貴族の娘を嫁に貰つた。娘と云つても三十近い嫁

期を失した女であつた。

結婚後物一月と経たない内に、女は誠に我儘勝手な性質を露骨に見はして來始めた。夫が口を利いても氣に適らぬ時は返事をせぬ。夫が意見がましい事でも言ふと、

「そんな事は出来ません、私は良人とは身分が違ひます！」

直に斯う言つて遣だめる。客が來ても氣に食はぬ時は、夫が何と言つても挨拶に出ぬ。その爲夫は面目を失する事が往々ある。客のあることが豫め知れた場合には、男は女の機嫌を取る。

「今日は某さんが見えるから、何うかお前挨拶に出て下さいよ」

女は承知する事もある。承知して置いても其の場になつて厭になれば、何と言つても挨拶に出ぬ。また客の前に出て居つても、厭になれば談話中にもひよいと起つて引込んで了ふ。客は驚き、主人は地の中にも入りたく思ふことがある。

主人の留守中に懇意な人が訪ねて來ても、女は決して會はうとはせぬ。

「いやに傲る女だ！」

知人間では誠に評判が宜しくない。夫も實に持餘して居る。餘り我儘をする時には、三度に

一度位は張飛すやうな事もある。女は直に暴れ出して、男と取組合を始める。夫の顔には何時も生爪の痕が絶えぬ。男は堪らず飛出して行くと、女は男の時計を打毀したり衣類を引裂いたりして暴れ廻り狂ひ廻る。召使の者に對しても殘酷で、少し己れの氣に適らぬ事があれば、直に物を取つて叩き付けたりなどする。満一月と此處に居る者はない。

不斷でも夫が何を言付けやうと、氣持よく應じたことは一度もない。左様した場合に夫が顔色を悪くして、何うしろと再び用事を言付けやうものなら立つて直に暴れ出す。サツと障子の紙を引裂いたり床の掛物を引落して揉んだりする。時には脚を上げて夫を蹴たり、又は物を取つて投げたりするので、仕方無しに寄つて集つて押へつけたり、或は手足を縛つて置いたりすることなどもある。

それで御機嫌が治ると馬鹿に又面白がる。夫に甘えて首に巻付いたりなどもする。これは調子が好いなと氣を縱して居ると、一寸した事で又手も付けられぬやうに暴れ出す。そんな時の鎮撫掛に力の強い男が一人雇つてある。散々暴れた後では知らん顔をして女中を呼び、

「旦那さまは何方へ？」

「先刻何方へかお出かけになりました、未だお歸りになりません」

「何方へお出かけに成つたらうね、早く歸つて居らツしやれば好いのに！」

何の因果か斯んな我儘者を女房にした旦那さまこそ好い迷惑だ。それで此の女の生家からは始終金の無心を言つて来る。旁々以て有がたいことだ、離縁せうにも既に子供が生れて了つた。飛んだ女を背負込んだと、其家では大零しに零して居る。

(一四一) 物の冥利を覓んずる人

世には有るに任せて、何でも物を粗末にする人がある。例へば巻煙草を半分喫つて棄てる。まだ中に入つて居る火奴の箱を道に投る位のことには誰も平氣で遣りかねぬことであるが、まだ中には思ひ切つて勿體ないことをする人がある。物の冥利を思はずに、總じて物を粗末にするやうな人間は、今に必ず物に不自由するやうに成つて、己れが過去の行跡の甚だ宜しくなかつたことを思ひ當るものである。假令一本の巻煙草と雖も、直ちに人の口に喫はれるまでになるには、その前に幾人の手を経なければならぬかも知れぬ。また一箱の火奴と雖も、直ちに役に立つまでには、實に驚くべき手数のかゝつたものである。

總て皆斯う云ふやうに、物のなり來つたところを跡ねて見れば一筋の縁、一枚の紙と雖も決

して粗末に出来たものではない。例へば一粒の飯粒に重きを置く人は少ないが、その出所を跡ねて見ると、粃を苗代に蒔て苗を仕立て、それを田に植付けて夏の暑い頃に幾度か草を取り、秋になつて刈つて扱いて乾して挽いて始めて玄米にし、それを精いで研いで炊いて人の食膳に上せるまでには、幾度人の手を勞はして居るかも知れぬ。その勞苦を思つたならば、假令一粒の飯粒と雖も決して粗末に出来たものではない。苟くも物の冥利を思ふ人であれば、假令一粒の飯粒と雖も、おそらく無駄に打棄てるやうなことは出来ぬであらう。

然るに世には物の冥利を思はずに、御飯の中に稗が一粒混つて居たからと云つて、その稗を棄てるがために、稗と一緒に御飯粒を一箸程も棄てて了ふやうな人がある。斯う云ふ人間は物の冥利と云ふ事を思はぬので、總て何でも皆物を粗末にする。例へば汽車に乗つて辨當を買つて見ても、これは不味飯だと思へば、二口三口食べたばかりで、汽車の窓から投つて了ふ。斯んな不心得なことをするやうな人間は、現在に於いては物に不自由な思ひをせず居つても、速からずして必ず窮迫し、日に三度の飯も碌々食へぬやうに自然となつて来るものである。

これに反して、常に物の冥利を思ひ、總ての物を大切に、假令一本の古手拭、又は古下駄古足袋の類に至るまで、何か其の使用法を考へ出してこれを利用して、決して物を無益に棄て

ぬやうな心がけの人であれば、其の人假令現在に於いては物に不自由して居つても、今に必ず遠からずして、自然と有福な身分に我れから成り得るに違ひない。

或る一人の金持の隠居さんが、秋の暖かい日に隱宅の庭に出て、その邊に落ちて居る柿の葉を一枚づゝ拾つては、根氣に串に刺して居つた。丁度其處に一人の男が尋ねて来て、これを見たが不思議で堪らぬ。終に思ひ切つて尋ねて見た。

「御隠居さん、その柿の葉は全體何になさるんです？」

隠居は笑つて、

「この儘棄て、置けば腐つて了ふが、斯うして乾して置けば焚付にでもならうぢやないか」
客は聞いて驚いた。

「へエ、細かいところにお氣がお付きになりますな！」

「物の冥利と云ふことを思へば、假令一枚の木の葉でも、吾には何うも無駄にする事が出来ぬ！」
この心がけがあつたればこそ、隠居は空手で田舎から東京に出て来て、終に今日の巨萬の富を積み得たのであつた。物の冥利を思はずに、有るに任せて物を粗末にする人間と見たならばその人は長く榮えて居らぬ人と見て、先づ以て間違はないものである。

(一四二) 仕事を苦にする女

ウンと仕事を仕やうと云ふには、初めから仕事を怖れて手を出さやうなことでは駄目だ。そんな弱い了簡では何一ツ満足に出来さうな筈はない。たとひ骨の折れる仕事であらうと、「ナニこれ位のことには朝飯前だ」と氣を張つて、初めから仕事を呑んで着手するやうでなくては仕事は果敢取るものでない。一家の主婦ともあらうものは何はにおいても先づ此の呼吸を呑込むことが大切である。我が日々の仕事を苦にするやうな了簡では、満足に主婦の任務の勤まりさうな道理はない。

或る女は馬鹿に仕事を苦にする癖がある。毎日働く時間よりは歎息する時間の方が多し。斯んな癖があつては第一自分も不愉快であらうし、内にも色々差支が生じて来るに違ひない。

「ア、今日は生憎お天氣だなあ困つたものだ、お天氣だと彼の張物をしなければならぬが……」
 天氣が好ければ喜びさうなものだが、この女は朝起きる匆々仕事を苦にして最う零す、斯うした女の居る家に福の神が来るだらうか。門を通つても聲もかけずおそらく避けて通るであらう、斯う云ふ女を主婦にした家の家族は惨なものだ。春は櫻の頃になつても、襟垢の付いた物

を着て居なければならぬ。襟垢位のことならば好いが、悪くすると着物の縫目々に血を分けた御家族が殖えて、身體中がムヅ／＼するから堪らない。春先になると、斯んな家の家族の母指の爪には紅いものが付いて居るだらう。爪紅ならば心にくいが、世は氣任せにそろ／＼と縫目を歩く生物の血では一家の面目を潰して了ふ。

この女は面白い、夕方になると顔を擧めて、「ア、何うしたのか、今夜も亦何かお茶を工夫しなければならぬ。ア、左様々々今夜は屹度ヌタを拵へて置けと言つたやうだ。面倒臭いなあ骨が折れるおまけに今夜は御飯も足りない。この通り頭痛はするし、ほんとに何うしたら好いだらう？アーツ！」と深い溜息を吐いて頭を抱へて時を移して居る。

斯うした時に生憎主人に早く戻つて来られると、家の内には黒煙が上がる。女は表に靴の音を聞いて慌て出しても最う遅い。からりと入口の格子を開け、

「オイ／＼早く一本浸けろ、ヌタは出来たかヌタは、今夜六時の汽車で急に旅行しなければならぬことになつた。急げ／＼何にも要らぬヌタ丈で好い」

女は臺所で逡巡して返事もせぬ。馬鹿に苦にはして居つたが実績が擧つて居ないので、實は返事の仕やうがないのだ。夫は怪しんで臺所を覗いて見ると、女は茫然として立つて居る。

「オイ早く出さんか」

「これから拵へる所でございます」

「馬鹿、何をして居つた。今になつて間に會ふか、間拔め……」

腹を立て、奥に行き、押入の中から鞆を出して見ると埃だらけだ。ブツ／＼言ひながら拂塵で拂ひ、荷作をして惱りながら出て行く。途で腹を拵へて行かうと思つて、その邊に寄つて見たが、内の事を思ひ出すと面白くない。世は今が花の盛りでも此方は一向氣が浮き立たぬ。酒を飲んで見ても甘くない。

「彼の調子ちや俺は全く遣切れぬ！」

頼母しくない女を女房に持つたのが情ない。斯うした女は夫に不自由な思ひをさせるばかりでなく、往々にして男兒の英氣を挫くことがある。

(一四三) 金持の眞似をしたがる人

地道に稼いで稼ぎ出したやうな金持は、決して金持のやうな風は人に見せぬものである。「良賈は深く藏めて空しきが如くす」で、斯う云ふ人は何事にも貧乏人のやうな振をするものであ

る。家も贅澤な家には住まぬ、着物も贅澤な物は着ぬ。食物にしても決して奢るやうなことはせぬ。何事も皆物の冥利を重んじて、極めて質素儉約に暮すので、一寸見た所では貧乏人と變らない。

ところが此の間に大變な相違がある。一方は餘儀なく儉約するのであつて、別にこれと云つて目に見えることはないが、一方は眞に儉約するのであるので、懐具合が益々豊になつて来る。されば金持は貧乏人の眞似をすればする程金持になれるが、これとは反對に貧乏人の癖に世間を偽り身を偽り、うツかり金持の眞似をすると云ふと、程なく自滅しなければ成らぬやうな事になつて来る。

金持の眞似をしたがる貧乏人は、身の程も知らずに、實に危険千萬なことを遣つて居る。金もない癖に遊んで居つて、甘い物を食ひ、綺麗な着物を着、立派な家に住みたがる。酒も好いのを飲めば煙草も金持の喫ふやうな物を選んで喫ふ。

元來、茶屋遊びなど云ふことは、金持でなければ出来る筈のものではないが、金も無い癖にそんなところに入出入して、飲んだり跳ねたり唄つたり、又は飛んでもない巫山戯た眞似を遣つて居る。假令金があらうとも、そんな馬鹿げた眞似をして居れば、終には首でも縊らぬこと

には追ツつかなくなつて来る。ましてや金もない癖に斯う云ふ身分不相應な贅澤を極め込んで居ると、詐欺か泥棒でもせぬことには結末の着きさうな筈はない。

金があつても贅澤をせず、萬事控目にして貧乏人の眞似をして暮す人は、何處までも間違はないが、貧乏人の癖に兎角金持の眞似をしたがつて、例へば自動車に乗つて金借に行くやうな氣恥かしいことをする人間は、程なく首でも縊らぬことには生きて居たくも生きて居られぬやうな始末になる。これは誰に訊いて見るまでもなく分り切つて居る道行であるが何うした譯か此節は何處へ行つても金持の眞似をしたがる貧乏人が誠に多い。その爲一ツは刑務所も繁昌する、世間も至つて物騒である。

おなじく人を使ふにしても、金持の眞似をしたがる貧乏人と見たならば、決して安心して使はぬことである。斯う云ふ氣の浮いた人間は、決して仕事に身を入れて働くものではない、仕事に身を入れぬばかりでなく、帳尻などを胡魔化するのは、得て斯んな人間に多いものである。たゞ友達として交はつても、斯んな人間に引ツかゝると、若干か遣られる、屹度碌なことはな

い。昔から決して衰へたことはないといふ家の家憲を見せて貰つたならば、「我が家の子孫は決

して金持の眞似をすまじき事」と云ふのが、その第一箇條であつたとのことである。人間は貧乏ならば貧乏人らしくして、多く働いて少く使つて暮して居れば、決して長く貧乏はして居らぬ。その中には必ず豊かな身分になれるが、身分不似合な了簡を起して、返す當もない金を借り、衣服を無駄に光らせて見たり、或は手足を休めて見たり、又は飲んだり甘い物を食つたりして、金持の生活の眞似をして居ると、報いは觀面誰も七顛八倒して、この世に居ながら此の世に光の見られぬやうなことになる。

(一四四) 仕事を追つかける女

仕事を苦にする女は仕事に追はれる。言ひ換へて見れば、爲すべき事が何時も手許に溜つて居る。斯う云ふ女は一名「物の間に合はぬ女」とも謂ふ。つまり物の用に足りないからである。斯んな女を女房に持つと、春先の酒の下物にヌタが間に合はぬ位では事が済まぬ。往々おのれの信用や名譽にも關はるやうな大事件が出来せずには居らぬ。必ず左様したことが起つて来る。併し世の中は廣い。世間の女は皆悉く斯うしたものだとは限らない。中にはこれと反對に此方から毎日仕事を追ツかけて行く女が居る。斯う云ふ女を女房に持てば男は助かる。春先に

家族に着せる物は、最う冬の間に整然と準備をして待つて居る。さうして櫻の花の咲く頃には最う白い物を縫つて居る。冬着る物は桐の葉のふはりと庭に落つる頃には、最う悉く縫ひ上げて居る。それは、早いことだ。獨り着類ばかりでない。萬事が斯うした調子に行く。昔から話にもある通り、主人さんが嘘をすれば醫者を呼ぶ。少し熱でも出て枕に就けば早桶を注文する。否、そんな非常識な事は断じて遣る氣遣はないが、明日しても間に合ふ事を今日の中に片付け、來月しても可い事を今月の中に極りを付け、來年まで延せば延されんことはない仕事でも、成るべく今年に繰上げて段落を着けて置く。

これを怠惰者の眼から見た時は無駄なやうに見えるかも知らぬが左様でない。何時も斯う云ふやうに此方から仕事を追ッかけて働らく甲斐には、それ丈何時も時間の上に餘裕を有つて居る。臨時に何時何んなことが起らうと少しもまごつかぬ。

ハの生身には何時如何やうなることが無いとも限らぬ。併し斯う云ふ質の女になると、左様した場合に時間の貯金を有つて居るから少しも狼狽することは無い。家族に何時何んな病人が出來やうと、また外に何んな事故が起らうと、安心して其の方に力を盡すことが出来る。秋口に内に手の外されぬ病人があつたからと言つて、その爲今年はまだ蒲團の洗濯が出來なかつたと

云ふやうな憂ひはない。手廻しの好い女と云ふのは仕事を追ッかける女の別名である。

この種の女には、外に未だ利益な點が數々ある。不斷仕事を苦にして爲すべき事を溜めて居ると、必要已むを得ざる場合が生じて、その事を成し果す爲には、泥棒を見て急に繩を縋ひ始めるやうな形に自然となつて來る。そんな間に合せなことをして結果の好からう筈がない。屹度何處かに手落が出来る。つまりは同じ仕事を二度繰返さなければならぬやうなことにもなるおまけに苦しい、骨の折れること夥しい。二日にすれば樂に出来る仕事を半日若くは一夜の間には非遣上げねばならぬやうなことになるからである。これに反して此方は時間の餘裕があるので、靜かに手堅く遣ることが出来る。一方に比べると結果の好いこと夥しい。斯うした主婦に依つて料理せられる家は萬事整然として、而も内容に富んで居る。

(一四五) 着物ばかり飾りたがる人

何はおいても飲みたがる人、何はおいても食ひたがる人、何はおいても見たがる人、世は十人十色であるが、中には何うかすると、何は差置いても先づ着たがる人がある。

婦人は皆大抵左様であるが、男子にも何うかすると、世には斯うした人間がある。斯う云ふ

人は婦人と同様皮膚を以て生命として生きて居る人で、假令何んな苦しい遺算段をしてまでも、何か一枚肌觸の好い物を着て見ぬことには生き甲斐のないやうに思つて居る。だから斯う云ふ人間は金を得れば、先づ何は差置いても直に着る。丁度酒飲家が金を得れば先づ何は差置いても直に飲むのと同じことである。

斯う云ふやうに衣服を以て生命として居る者は、金を得れば何は差置いても先づ着る。金がなければ借りて着る。借りる方法が附かなければ詐偽や竊盜をしても着る。詐偽や竊盜位は何でもない、身に綺羅を着飾るためには如何なる高價な犠牲を支拂ふことも躊躇せぬ。昔から着道樂と云ふのは、全く此の種の人間の異名で、明けても暮れても何うかして着やうくと唯着ることばかり考へて居る。

何故かと云ふと斯う云ふ人は、食ふよりも飲むよりも着るのが一番愉快である。だから着るためには何んな辛い思ひをすることも厭はない。何うしても思ふ物が着られぬと云ふことになると、己れの名譽や信用や場合に於いては生命を差出してまでも着やうとする。口が二ツに裂けて血が出て、執念深い蛇が物を吞まうとするのと同じことである。

呉服屋の萬引は婦人に多い。婦人は勝れて己れの皮膚を大切に、外見を飾りたがるので、

自然と斯んな淺ましいことも遣るやうになるのである。男子にもこれがある。そんな人間を見ると云ふと、男性よりも女性の方に偏して居つて、身に着物でも着飾りたがるやうな男であれば、その人間は概して柔弱に出来て居るものである。女子のやうに長い着物を着てゾロ／＼して居る者であれば、決して奮闘的人物ではない。

綺麗な着物でも着て居れば、見たところは體裁は好いが、これも矢張金持でないことには出来さうもないことで、碌な稼ぎも出来ぬ人間で、何時見ても領土のない王さまのやうに、着物ばかり光らせて居る人間であれば、内證では何か暗いことをして居るに違ひない。少なくとも呉服屋を泣かせるか、友達を借り倒すか、若くはそれ以上のことも必ず遣つて居るものである。

斯う云ふ質の人間は、男であつて女のやうに、道を歩いて居つても、じろ／＼と、常に人の着物の柄などを屹度見て居るものである。さうして何か己れの氣に適つた物を發見すれば、何とか無理工面をして着て見ぬ事には夜が寝られぬ。實に因果な話であるが、これも有つて生れた業で、自分で自分の慾望を制し切れぬ。その日の飯も食ひかねて居る分際で、いかに衣服ばかり光らせて見たところで、誰も賞讃者はないのであるが、自分一人はこれが愉快で堪らない立つて居ても坐つて居ても自分の皮膚が喜ぶやうで、その愉快さと來ては何とも云へぬ。だか

ら此の慾望を満す爲には、つひ萬引もしかねぬやうになるのである。斯う云ふ人間は一種の精神病者である。決して普通の人間を以て律する譯には行かぬ。だから斯う云ふ人間に接するに、此方も豫め其の積りでかゝらぬと、飛んだ馬鹿を見ることがある。

(一四六) 生涯夫の鹽加減を解せぬ女

女で食物の調理法の下手なのは誠に困る。譬へば男で金儲の道に迂いやうなものだ。少くも女は食物の調理法と裁縫丈には巧者でなければならぬ。

それで女に食物の調理法には皆達して居るかと思ふと左様でない、中には味噌汁一椀加減好く炊き得ないやうな女が居る。鹽味噌一ツ満足に漬け得ないやうな女が居る。斯んな女を女房に持ったが最後、その日の米代も稼ぎ得ないやうな男を亭主に持合せたのと同じことだ。全く以て助からない。

斯うした女を女房に持合せた男は、可哀さうに餘所へ行つて何か食べて見ても皆甘い。「この家は食物に餘程金をかけるな」と首を括る。その實何時も不味物ばかり食つて居る。おのれの家よりは美味物ばかり食べて居る此方の方が遙に安く生活費を上げて居る。其處は其の家

の細君の手腕の如何に依るのである。よしや豆腐の殻に豚の肉の少しばかりも加味した物であつても、鹽加減や火加減の悪い煮魚には遙に勝ることがある。總じて物は遺方亭主の機嫌は取方次第、殊に食物は調理法の如何に依つて一ツは全く美味いものも不味くなるものである。斯んなことは少し心がくれば女は譯もなく手に入れることが出来るものである。ところが不性な細君になると、そんな事などは考へても居らぬ。「不味やうならお廢しなさい」で澄して居るから堪らない。それも一度や二度なら好いが、元日のお雑煮から大晦日の年取飯の菜まで不味物ばかり生涯食はされた日には、男も實際引合はぬ。人間はお互さまに一ツは全く何の爲に働くかと云ふことになる、「ア、自分は五十年の不作に會つた」と歎じたくなるであらう。

或る女の煮炊の下手さ加減と來たらお話にならぬ。男は毎日蠟を嚙まされるやうな心持で三度の膳に向つて箸を取つて居る。それで一方は平氣で居る。今日も一日斷摺廻つて用を足し、夜おそく戻つて見ると、女はお先に失敬して床に入り、子に乳を哺まれて居るのも知らずに最う枕を外しさうになつてグウ／＼鼾をかいて居た。

「オイ戻つたぞ！飯を出さんか」

起して見ても容易に眼を覺すことでない、枕を蹴られて始めて眼を開く。

「飯を出せ、腹が減つて遣切れぬ！」

「其處にお膳がありますから出して食つて下さいな。この兒が乳を離しませんから……」

兒は女の武器である。腹は立つが兒で防がれては遣り切れぬ。お百姓さまの禪よりも汚れた布巾を掛けたお膳を抱へ出して見ると、芋の煮ころがしを見たやうな物がころ／＼して居る。腹が減つて居るので取敢ず一ツ頬張つて見ると、半分は煮えて半分は固い。その上鹽氣が利いて居らぬ。無理に噛めばがじ／＼と音がする。これぢや飯の菜になりさうもない。

「オイ外にや何かないか」

「其處にお汁がありますよ」

鍋の蓋を取つて見れば冷めて居る。自分で暖めるのは面倒臭いので、その儘椀に注いで、一口吸ふて見ると、此方は口の焦爛れる程辛い、まるで醬油を飲むやうだ。

「オ、辛い！斯んな辛い物は吸へんぢやないか。昨夜は水見たやうな物を吸はせるかと思へば今夜は又これだ！」

男は微温い湯を注して、ぶつ／＼言ひながら飯を食ふ。毎日斯んな不味物を無理から腹に入れさせて置いて、人並に働かせやうと註文するのは無理である、斯んな女を一生連添つて居つ

ても、我が夫の口に適つた鹽加減が分らない。實に情ない話である。

「夫に攻入る間道は食道！」

女は此の諺を忘れてはならぬ。

(一四七) 尻の落着かぬ人

世の中には、何を爲せても相當に間に合ふ人間でありながら、一向尻の落着かぬ人がある。氣が多いと云つて好いか、物に飽きツぽいと云つて好いか、斯う云ふ質の人間は、物の一年と同じことはして居らぬ。始終轉び廻つて居る石には苔の生へぬと同じやうに、斯う云ふ風に色々なことに手を出して、少しも尻落着かせぬ人間は何時まで経つても身體に估券は附いて來ぬ。人間は何か一定の仕事に向つて全精力を注いで懸れば、何を遣つても飯の食へぬと云ふことはない。何んなに物の出來る人間でも、餘りに商賣變をしては、いかに骨を折つて見ても、結果は精力の濫用に止まつて、何時まで経つても「何うも困りましたなア！」と言つて居なければならぬ。實にこれ程馬鹿げたことはないが、これは才氣の乏しい人間は餘り遣らぬことで、何を爲せても結構一人前に間に合ふと云ふやうな、何方かと云へば才氣の勝つた人間に、斯う

云ふ質の人が多いのは妙である。

一ツ所に尻の落着かぬやうな人間は、物は出来ても心に着實なところが無い。だから何時も気が浮いて居る。何を遣つても一生懸命に遣る氣になれぬ。その爲勢ひ仕事がぞんざいに陥るので、結果は才氣のない人間にも劣るやうな事になつて來るのである。たとひ小才は走るにしても、また仕事が器用であつても、生涯あぶれ通しにあぶれて暮さなければならぬ。

けれども御當人は平氣で此の放浪生活を遣つて居る。而も得意さうな顔をして髭でも生して一向實行せぬ月賦拂の洋服でも澄して居る。さうして、相手があれば直に飲む、呑氣だか自暴自棄だか氣が知れぬ。斯う云ふ人は一寸合つても、實に調子の好いものである。途中で見かけても、此方は知らん顔をして外さうとしても、向ふは實に目が早い。

「ヤア其處に行くのは酔興君ぢやないか」

目付られては仕方がない。此方も巧く調子を合せる。

「オ、飯田君か、この節何をしてるね？」

「生命保険に入つてる。何うだ君千兩も附けとかうぢやないか」

「御免だよ、そんな餘計な錢は無や！」

「ハ、人間は死んだ後のことも少しや思はにやいかんよ」

「人にする意見を聞けば一人前かね、君が乃公の分も附けとくさ！」
一月後に又會つた。

「ヤア大將……」

「オ、矢張生命保険に居るかね？」

「イヤ最う彼處は廢したよ」

「何してる？」

「廣告取を遣つて居る。何うだい、君の家の商品を少し廣告しやうぢやないか」

「不景氣だからまあ見合せとかう」

「そんなことで商賣が出来るかい！」

十日許り經つと又會つた。

「何うだい、斯う不景氣ぢや餘り廣告も取れまい」

「イヤ最う廢したよ」

「ぢやア何してる？」

「この節は辯護士の所に居る。君の所に何か事件はないかね？」

四五日経つと又會つた。

「ヤアこの節は好く時々會ふね！法律事務所の會計は旨いことがあるだらう」

「イヤ最う廢したよ！」

「ぢやア何してる？」

「君今度斯う云ふ重寶な電球が出来たぜ、早速店に使つてくれ給はんか、君の所は特別に安くしとからう」

世には斯う云ふ人がある。使へさうでも使つて見れば、決して役に立つものではない。

(一四八) 盜癖のある女

或る女は勝れた美貌を有つて生れて居る。その上に辨財天さまのやうに諸藝にも達して居る。字を書いても巧い。料理をさせても一寸黒人筋の庖丁を使ふ。遊藝も一通り心得て居る。殊に長唄が巧い。茶を立てる、花も活ける。それに愛敬があつてお世辭が好いと來て居る。佛事婚禮、その他何か事ある場合に此の女が來て手傳つてくれると、それは一萬事に間に合ふ。

御亭主は誠に好い人で、或る會社に出て月給を百圓近くも取つて居る。内には一人家婢を使つて、氣樂な生活を營つて居る。先づ仕合な身分と云つて可い女であるが、何の因果か可憐な此の女には物を盜む癖がある。

この女は親切で、好く人の世話もする、何か事があると聞けば、此方から進んで其の家に手傳に行く。萬事に間に合ふ女であるので、何處の家でも急場な場合には其の癖のあることを知りながら、つひ手を借りることがある。また相當な家の細君であるので、向ふから手傳つてくれると言ふものを「イエ何うかお歸り下さい」とは言はれぬ義理合もある。併し何處でも此の女に手傳つて貰つた後では後悔する。この女の歸つた後では何か必ず失せて居ることを發見する。

その盜方か又極めて巧者である。併し金目な物ばかり盜む譯ではない。何でも關はぬ一品盗んで行きさへすれば、それで此の女の氣は安まるのである。

不幸にして其の時何か金目な物を持つて行かれた時は、其處では大層高い手間賃を拂つたことになるが、その邊の瀬戸物屋仕入の盃を一ツ持つて行かれた位の場合には太く物の間に合ふ女を貳錢か參錢の手間代で雇つたことになる。斯う云ふ時には此方は實に仕合である。

何んな價の高い物でも、何んな下らない物でも盗む。何うかすると火鉢の火箸がなくなつたり、座蒲團が一杖丈失せて居たりすることがある。或は皿が一枚見えなくなつたとか、會席膳が一膳足りなくなつたと云ふやうなことがある。滑稽なのは、或る家で此女に手傳はれた時何時の間に何うして何處へ運んだものか、その家の女中さんの針箱がなくなつたさうである。針箱丈なら好かつたが、その日お客さまに頂いた御祝儀の一包が其の中に入つて居つた。これも我慢した所で其の前の日に國元から届いた或る男の長い手紙と共に、發信者の寫眞が其の中に入つて居た。女中さんは明るる日その奥さんの家に出かけて行つて泣いて騒ぎ、到頭それを取り返して來たさうである。

或る家では銀瓶が失せた。或る家では主人公の實印を入れてあつた墓口が無くなつた。この時は全く弱つたさうである。すると明るる日變名で向ふから郵便で送つて返して來た。この女が盗をするのは決して慾得の上ではない。たゞ人の物を盗むと云ふことに無限の興味を覺えるのである。つまり一種の病氣ださうだ。

(一四九) 傲慢不遜なる人

世の中には己れの強きを恃んで、人を人とも思はず、傲慢不遜なる態度に出で、好んで人の感情を悪くするやうな極めて愚な人間がある。練香で岩を叩くことは出來ぬので、心の中では惡みながらも、弱い者は仕方なく、表面丈は其の人間に服従して居る。イヤ服従するやうな振をして居る。すると此方は好い氣になつて増長し、牛の糞を見たやうに何處までも太く出る。さうして乃公は徳望が高いなど、惚けて居る。その實人に心服せられるでも何でもなく、世に云ふ恐持に持てゝ居るのである。己れに恃むところのある間はそれでも好いが、何うかした機勢にこれまでの足場を失つたが、後、斯んな人間は直に袋叩に會ふから堪らない。游泳術を心得ぬ者がブク／＼深みに沈み始めたやうに、到底助かる氣遣はない。それこそ實に見じめなものである。傲慢不遜なる人は大抵斯んな風になつて自滅するものである。

世に傑出した人物でも、傲慢不遜なる人間は衆人の分怒に觸れて、大抵その末路は袋叩きに會つて滅んで居る。世界歴史に名を留めた程の人物でさへも左様である。況んや凡骨の能も藝もない奴で、何かの機會で僥倖に出會し、ソレ／＼と云ふ間に消える虹よりも脆い地位を得た爲に、鬼の首でも取つたやうな氣になり、乃公は勝いぞなどと買ひ被つて、弱者いちめんの暴横、人の人たる禮儀を無視し、春の日に浮かれた雲雀のやうに、高く高く上らうとすると、

危い飛んだことになつて、最う人中には二度と再び顔の出されないやうな始末になる。

傲慢不遜の人間と見たならば、これを利用して遣るには、先生、大將、閣下、御前で煽て上げるのも一つの工夫である。斯んな奴に限つて、膝と膝とを突合せての相談では、一文半銭出さん奴でも、衆人會合の席上、望むらくは其奴の前に藝者などの集まつて居るやうな時を見

て突進し、

「先生！」

「何だ？」

「また何うか少々許り願ひます！」

これまでに三文出したこともない癖に、

「煩く強請る奴だなア！幾ら入る？」

「今夜はホンの少々ばかり……拾圓……」

悠然として一物を取り出し、

「情ない奴だなア！たつたそれツばかりで宜いのか」

「ぢやア先生何うか最う一枚丈……」

「ソレ！」

「何うも相済みません！」

何うかすると、これ位な煽動は利くこともある。併し人格を重んずる人間には斯んな幫間的行爲は出来ぬ。この節は、何れの社會でも職を得ることが容易でないで、人は自然活氣に缺乏して来て、腹の中では喰ひ付きたいやうに思つても、妻子の爲に制せられて、怨みを呑んで胸を擦り、斯んな人間の前にも泣々叩頭をする者が多くなつたが、中には又氣骨のある男兒が偶にはないでない。己れの強きを恃んで人に對し、餘りに傲慢不遜な態度に出ると、弱いと見くびつて居つた人間から何うだと生命に止めを刺されるやうなことが屹度ある。例を擧ぐれば或る一人の傲慢不遜なる男が、或る時己れの許に落合ふた部下の者に此の日は何うした風の吹廻しであつたか、一杯出さうとして居るところに、或る用務を帯びて又部下の一人が來た。その男は用談が済むと共に歸らうとすると、主人は傲然として、

「オイ待て、貴様にも今夜は飯を一杯食はせて遣らう」

「有がたうございます！」

言ふかと思ひの外、開き直つて睨みつけ、

「イヤ飯が食ひたければ自分で何時でも勝手に食ふ！」

憤然として起ち上り、咄嗟の間に決心して、

「その好意に酬いるは、今日は一番おれの方から御馳走をして遣らう！」

言ひも終らず足を揚げたと見る間に突然相手の向面を充分蹴つて後方に蹴倒し頭に唾を吐ツかけて悠々と立去つたが、一同事の意外に驚き、誰一人手を出す者も無かつたとの事である。己れの地位が高ければ高い程謙讓の徳を守り、好んで自ら敵は作らぬ事である。

(一五〇) 貞操を無視する女

昔日の日本婦人は貞操を以て婦女の生命として居つたが、現代の婦人には概して此の觀念が薄らいで來たらしい。離婚統計表の示す數字を見たならば、何人も恐らく驚かすには居られない。勿論これは女ばかりの罪ではあるまい。また昔日とは世の中の状態が變つて來たので、生活上の問題を眞先にして、他にも色々餘儀ない事情があるとしても、一ツは全く今日の婦人に概して此の道念の薄らいで來たのが、其處にも離婚にも離婚の數を増させる最も重大なる原因の一つとなつて來たに違ひない、歎かばしいことだ。

中には太い女が居る。而も其の女は高等教育を受けて、横文字であらうと縦文字であらうと讀む丈ならば讀めるさうだ。但し何にも實行は出來ん女で、その不身持さ加減と來てはお話にならぬ。一人娘で増長させた所爲か、親も今日では手を付けかねて飛んだ娘を持つて世間に顔出しが出來ん！」と零して居るさうだ。

娘が我儘物だからと云ふので、養子には成るたけ人の善さうな男を選んだ。さて鹽加減の六ツかしいのは獨り食物ばかりでない。親が加減して貰つた養子が少し甘過ぎた所から、娘は夫を尻に敷いてグウの音も出させず、勝手な眞似ばかりして巫山戯たい程巫山戯散らし跳ね散らすので、近所の人は目引き鼻引き、「養子さんこそ好い面の皮だ！」と言つて居る。

女は何んなことをする。それからそれと矢鱈に道ならぬ男を家に近附けたり、また此方から勝手に出かけて行つたりして、不義淫行ばかりして居る。それでも養子は怖い顔もして見せず女のするが儘に任せて居る。イヤ左様ばかりでもない。或る時のことにお心好しの養子殿でさへ見かねたことがあつて慍り、女に小言を言はうとすると諍もなく遣込められて此方は二の句が次げなくなつた。養子が口惜がつて手を振上げて打たうとすると反對に擲られて眼を痛め、白い切れで片目縛つて、一月ばかりも醫者通ひに日を送つたさうだ。

子が可愛々々の父親さんも到頭勘忍仕切れなくなつて、「これぢや何とか方法を付けねばならぬ！何うしたらいいだらう！」と切に心を痛めて居つた。

母親はこれを聞いて床に就くまで心配し、色々意見もしては見たが、そんな事は百も承知の娘は改心せうともせず、その行状はいやが上にも荒んで行つた。

折から父親さんは奥に一枚残つて居つた歯が連りに痛み出して、餅網の上で炙られた田舎のお饅頭のやうに膨れ上つた。或る夜痛んで寝られぬので、庭に出て櫻の花の下に立ち、朦朧夜の深け行く月を眺めて居た。人ありそつと近付いて、

「彼程堅く約束して置きながら昨夜は何故來なかつた？」

言ふが早いか痛い方の頬片をいやと云ふ程抓られたんで老爺さんは堪つたものでない、忽ち悲鳴を上げて、

「アイタ／＼／＼何しやがるんだ？」

娘は人違して腰を脱し、「ア、お父さんでしたか御免なさい！」とも言はず、その儘内に逃込んで急いで蒲團を被つたさうだ。

(一五二) 温乎として玉の如き人

一方に於いて、擲るか蹴るかしてくれたいやうに傲慢不遜な人間があるかと思へば、一方にはまた温乎として實に玉のやうな人もある。

處世の上から云ふも、剛を以て人を制しやうとするよりは柔を以て世に立つ方が安全で、而も此方が人を心服せしめることが出来る。但しこゝに注意すべきことは、心の中は至誠が無く何等の血税もかゝらぬ猫撫聲で物を言ひ、それで人を心服させやうとすると、これはまた飛んだ心得違である。それよりか寧ろ男兒らしく、強ければ強いで押通した方が却つて人に重んぜられるものである。

人は剛よりも柔が好いからと云つても、偽りではいかん、偽は虚である。究彈を放つて物の撃てる氣遣は無い。或る物を撃たうとするには、何うしても實彈が無ければいかん。誠意の籠つた柔でなければ、所謂猫撫聲になつて、「彼奴は實に陰險だ！」と人に腹の奥底を忽ち見抜かれて卑しまれる。

至誠の籠つた柔にして、人は始めて温乎として玉のやうな人に見えるものである。

澤田氏は大勢の人を使用して、或る有益な事業を遺つて居られるが、嘗て使用人の何人をも暴い聲で叱つたことのない人である。若し使用人の中に心得違ひをして居る者があれば、そつと自分の部屋に呼んで、その者の好く無い廉を諄々として親切に言つて聞せる。さうして其の後では此方から手を下げるやうにして、「何うか左様して下さい！ 今後さう云ふ風にして頂けば、貴方も宜ければ私もお蔭で助かります」と言ふ。而もそれは人を悪く煽動てあげるのでも無ければ、また世間に好くある猫撫聲でもない。親が我が子に諭すと同様の温味が籠つて居るので、數多の使用人中誰一人として、この人に反く者はない。

澤田氏は例令自分の使用人と雖も、皆各自に人格を重んじて、小使の末に至るまで決して人を呼棄などにはせぬ。必ず「何さん」または「誰さん」と正しく呼ぶ。若し使用人から何か相談でも受けるやうなことがあれば、手すきな時に、その人を別室に呼んで、十分に事情を尋ねそれは斯うしたが宜からうと私は思ひます。そんなことには如何でございませうか、左様致さうではありませんか」と云ふやうに説いて聞せて、およぶ丈は其の人の爲に便宜を計つて遣る。たゞ口先ばかりで無く、一々實行して遣るので、皆有がたがつて、まるで親のやうに思つて居る。

事業から上つて來る利益をも決して自分一人で獨占はせぬ。使用者に必ず利益を配當して、それは一々此方に預かつて置いて貯蓄させ、その人の身に取つて必要缺くべからざる場合と見れば、何時でも快く渡して遣る。だから皆淺ましい奉公人根性を出さずに、氏の事業を皆各自の事業と心得て居る。

再三年前のことに、澤田氏が大病に罹つて病院に入院し、何うも容體が思はしくないと云ふと、二百名以上の使用者が男女職工の末に至るまで、皆おもひ／＼に心願をかけて、氏の病氣本復を神に佛に祈つたとのことである。その後氏の病は段々快方に向つて、二ヶ月の後に退院して見ると、氏が不在中の事業の成績は、不斷の成績よりも五割方増加して居つたと云ふことである。大きな聲をして其の使用者を恣まゝに罵倒する世の事業家は、この温乎として玉の如き澤田氏に、切めては幾分なりとも學ぶやうにしたならば、おのれの苦痛も必ずや減じて生命が延びるであらう。

(一五二) 馬鹿に騒ぐ女

女は靜に事を處するに越したことはない。女は萬事に閑雅でなくてはいかん。濫りに騒ぎ立

てる女は長屋住居の内儀さんめいて重みがない。たとひ眼前にスツと白刃を突付けられやうと騒がぬ所に女性の優しさは生きて居る。

この落着があらうなら、確に男の片腕になれる、女は總て斯うありたいものであるが、昔と違ひ今日の女には此の修養がない。中には身分ある人の妻女で、下らぬことにも奇聲を發して騒ぎ立てる女が居る。實に不遠慮千萬な話だ。

或る女に此の癖がある。

「アレー良人早く来て頂戴！」

何事が起つたかと、男は部屋に飛んで行き、

「何うした？」

女は眞青になつて居る。

「何うした？」

胸を撫でく、

「只今こゝに鼠が出ましたの！」

「何だ！」

或る夜お客さまが見えた。主人は會つて大事な話をして居ると、女中が飛んで来て、

「旦那さまお早く入らつて下さい大變でございます！」

客は話を止める。

「何うした？」

主人も氣を奪られる。女中は胸を擦りく、

「奥さまが氣絶なさいました！」

氣絶したと聞いては容易でない。ソレと客も一緒に飛んで行つて見ると、成程便所の入口に細君が倒れて居る。それが又體量の十五六貫もある女であるので、主人公一人では抱いて來る譯に行かぬ。客と二人がよりで部屋に抱へ込む。

書生さんが電話をかけてお醫者さまを呼ぶ。内は忽ち大混雜、途中で逃げる譯には行かず、今夜こゝに來合せた客は大迷惑。主人公は青くなり、顔に水を吹つかれたり、耳に口を付けて呼んだりする。

「ア、、、」

細君は息を吹返して眼を開いた。

「コレ氣を確に持て……乃公が此處に居るぞ！」

「アナタ！」

「何うした？」

「私、今、御不淨に行かうと思つたらね……」

「ウン！」

「居たわよ」

「何が居た？」

「電燈の傍にチイサナ蜘蛛の子が居りましたの。マア何なに悔りしたでせう！」

「何だ、馬鹿々々しい！人に斯んな騒ぎをさせて……」

この女は先づ斯う言つたやうな調子である。斯んな女に留守を頼んで何で男が外で存分働けやう。實に困つたものである。

(一五三) 眼と氣と手の一時に働く人

人間は眼と氣と手とが三拍子揃つて一時に働く者で無ければ駄目だ。この中の一ツを缺いて

も人に後れを取らねばならぬことになる。然るに眼と氣と手との三拍子が巧く揃つて面白いやうに働ける人は、世の中に誠に少ないものゝやうである。

眼丈利く人は、「ハア彼處にあんな仕事があるな」と直に發見する。併し眼は利いても氣が利かぬことには、その仕事を何う云ふ風にして遣れば宜いか一向分らぬ。その爲折角好い仕事を發見しても、たゞ發見した丈で何にもならぬ。また眼と氣は十分利いて、仕事を發見すると同時に、それを實行する方法は案じ出すことは出来ても、その人間が不性者で、手を使つて仕事をすることを好まぬやうな怠惰漢であつた日には、眼と氣の能力丈では何にもならぬ、矢張仕事が逃げて了ふと云つたやうな理窟になる。

されば何うしても世の中に立つて遺憾なく働いて、一々仕事の實績を擧げて利を己れの手に納めやうと云ふには、眼と氣と手との三拍子が皆く調和して働かなければ結果は何事も巧く行くものでない。世には目ばかり利く人もある。氣ばかり利く人もある。また手ばかり利く人もある。併し此の三ツが孤立して聯絡が絶えて居つては、何うしても己れ一人で仕事が出来ないのでない。けれども此の三ツの物が皆く揃つて、何か見つける、斯うすれば宜いと氣が付く、手は待ちかねて直に其の仕事に取りかゝると云ふやうな敏捷な人であれば、何を遣つても屹度

うまく遣り果せるに違ひない。

「何と手塚君は勝いちやないか、今朝前の山で大きな猪を一頭撃つたとさ！彼の男は何うして猪の居ることを知つただらう？」

「何に前の山に猪の居ることは乃公の方が先に知つて居つたよ」

「ぢやア何故彼の男より先にお前は自分の物にしなかつた」

「だつて何うして捕まへて宜いか分らなかつたからよ」

これは單に眼ばかり利く人の答である。また一人の男が遊びに来たので、前の人は手塚君の手柄話をして聞かせた。

「何と手塚君は勝いちやないか、今朝前の山で大きな猪を一頭撃つたとさ！彼の男とは何うして猪の居ることを知つただらう？また何處から鐵砲を持つて來ただらう？」

「何に近頃前の山に猪の出ることは乃公の方が先に足跡を見て知つて居つた。また隣村まで行けば鐵砲を借りて來られることを知つて居つたが……」

「ぢやア何故お前は彼の男より先に其の猪を撃たなかつたんだよ」

「だつて此節の大雪に隣村まで鐵砲を借りに行くのも厄介だし、第一此節の寒いのに朝早く起

きて山に出かけるのは骨だからよしたんだよ」

これは單に眼と氣丈の人である。然るに猪を撃止めた手塚君丈は、眼と氣と手との三拍子が好く揃つて一齊に働き動く人であつた。雪に猪の足跡を見止める、鐵砲の必要を思ひ當る、直隣村の某方へ飛んで行つて借りて來て置き、翌朝早く雪を踏んで前の山に登つて行き、獵犬に追ひ出させてズドンと撃つたので、猪は自分の所有に歸した。前の二人は指を啣へて、

「成程彼の足跡の様子では、猪の大きさは、多分斯なものだらうと思つたよ」

既に人の物になつた後で、何と講釋を言つて見ても、只では肉の半斤も此方に寄來す人はない。人間は眼と氣と手とを一齊に使つて、何でも好い仕事を見つけた時は、發見、手段、實行の三ツで直に攻めねば嘘だ。たゞ見つけたばかりで逡巡して居ると、何時の間にか猪は何處へか行つて、他人の所有に歸して了ふものである。

(一五四) 至つて落着いた女

其處に行くと昔の日本婦人は勝かつた。電燈の傍に居た小さな蜘蛛を見た位で眼を眩すやうなことはなかつた。勿論昔は電燈は無かつたが、有つたにしても斷じてそんな事はない。それ

はく、氣の落着いたものであつた。女子としての修養が積んで居つた。

酒井忠直の夫人は松平貞頼の女であつた。夫人は江戸牛込の邸に居つた。一夜隣邸から火事が出て、見る間に煙や焔が酒井邸を包んで了つた。皆大騒ぎして逃げ出さうとする中に夫人は悠然として驚かず、仕女の一人が病氣に罹つて寝て居ると聞き、辭も色も閑雅に、「急場のこと故轎の用意をする暇はない。病人を大きな櫃に入れ、被褥で覆うて走らせるやうに」と左右の者に言ひつけた。斯うした混雑の中に其の落着き拂つた態度には男子も舌を卷いたさうだ。蜘蛛を見て膽を潰すやうな女には、斯う云ふ立派な態度は到底望まれない。

併し頼母しい、現代の婦人にも落着いた女は幾らも居る。皆蜘蛛を見て目を眩すやうな女ばかりなら實に心細い次第であるが、中には今でも酒井夫人に劣らぬ女性も數多く居る。いかなる場合に臨んでも動ぜぬ女が少なくない。良家の夫人には勿論のこと、間口二間幅位の商家の内儀さんにしても蜘蛛を見て目を眩すやうな女ばかりは居ない。

或る商人の妻が死んだ、未だ新世帯であつたので其の家には佛壇も無かつた。夫で急に佛壇を買つて、我が亡妻の位牌を祀つた。すると不思議なことには其の位牌が、何時となく少しづつ動いて、夕方佛壇を開けて見ると毎日後向になつて居た。

これが近所の評判になると、誰も後妻に来る者がなかつた。奉公人も慄へて逃出すと云ふ鹽梅で、主人は其の日に差支へた。親類でやつと一人の女を捜して後妻を持たせられた。女はそんな事とは知らずに来た。

黙つて居れば好いのに、兎角女は何處でも口が多過ぎる。或る一人の饒舌の女があつて、後妻に位牌のくるく廻る話をして、「貴女の家では毎夜先の内儀さんが姿を見せなさるさうでございませぬね！」と附加へて言つた。

後妻は「きやッ！」と叫んで氣絶した。イヤ氣絶したら大變だつたが、この女は物に馬鹿騒ぎせぬ賢で、「オヤ左様でございませぬか。私は未だ一度も見ませんが、御近所ではそんな噂がございませぬか」と言つて笑つて居た。

或る時夫に糺いて見ると、「イヤ姿を見せると言ふのは嘘だが、位牌のくるく廻るのは全くだ！實はお前が驚くだらうと思つて隠して居つたが、何うした譯か私も全く合點が行かぬ？」と言つた。

「變な話だ？」と後妻は毎日氣を付けて居た。成程廻る。朝整然と前向にして置いても、夕方は必ず後向になつて居る。

「怪しいな」

後妻は一日佛壇の前に坐つて針仕事をしながら氣を付けて居ると、何時となく少しづゝ動く
「ア、左様だ、こりや動く筈だ！」

隣に米屋があつて、ドシ／＼と米を搗く。その音が此方に響く度に、先妻の位牌が僅かづゝ動いて廻るのだと云ふことが明らかに分つた。何よりの證據には、隣で商賣を休む日に限つて此方の位牌も運動を休めた。この事が後妻の心の落着に依つて發見されると、「ア、左様か！と夫も安心し、近所でも大笑になつた。これが若し物に馬鹿騒をする女であつたら何うだらう。早速逃出して行つたに違ひあるまい。」

(一五五) 怒りつばい人

世には何うかすると馬鹿に怒りつばい人がある。怒るべき理由があつて怒るのなら、何も別に不思議はないが、斯う云ふ人間は下らんことにも眼口を引つ張つて怒り出すので始末が悪い。額に青蚯蚓のやうな筋を出したり、たゞ眼口を引つ張つて騒いだりする丈ならば未だ可いが、斯んな人間は突然人の横ツ面も擲りかねぬので、此方は甚だ迷惑することがある。

斯んな狂人じみた人間と見たならば、決して相手にせぬことである。斯んな質の人間に虚然然申談の一ツも言ふと、飛んだ馬鹿げた目に遭はねば成らぬやうなことが出来る。

「君の鼻は大きいね」

「何だ、こん畜生！」

「あいたツ！」

「乃公の鼻が何うあらうと貴様の世話になるか」

一寸申談に言つたのに向ふは直に本氣になり、突然此方の鼻を拳で打擲つたので、直に鼻血がタラ／＼出て、何だか氣持が妙になつた。怒りつばい人間に向つて、偶に申談の一ツも言ふと、斯んな馬鹿げた目を見なければならぬ。

「怒る者は愚人なり、怒り能はざる者も亦愚人なり」と云ふからには、怒るべき所を怒らねば自然男兒の估券にも關はる譯であるが、さればと云つて下らんことにも餘り無暗に怒りちらすと云ふと、彼奴は馬鹿だ狂人だと人に云はれて、何處に行つても人が相手にしなくなる。

併し人の性癖は妙なもので、これは悪いと自分でも感付きながら、持つて生れた癩癩は容易に治るものでない。慎しまねばならぬ。善くないことだと後悔しながら下らんことに直に又怒

る。斯んな厄介な人間は、何かことあれかし、忿らう忿らうと待つて居る。それを知らずに此方であつたり、

「立てば芍薬座れば牡丹……」

「何だところん畜生！」

此方は平気で、

「歩く姿は百合の花かね！」

すぐに顔の血相を變へて、

「この野郎人を侮辱しやがるか」

「何だ此の狂人、唄つてらんぢやないか」

「逃げるな、貴様は己に痔があるんで、座れば牡丹と言つたんだらう！」

「貴様の肛門に痔があるか田があるか山があるか畑があるか己が知るか」

「何だ此の野郎！」

憤然として飛びかゝり、突然頭をボカ／＼擲る。斯う云ふ人間は、決して常識を以て律する譯には行かぬ。人間は人に申談の一ツも言はれてこそ此の世は面白く送られるものであるが、

斯んな忿りつばい人間には、誰も自然口を控へるやうになる。その爲實際の範圍も段々狭くなつて、此方の身に何んな事があるやうとも世間の人が寄附かぬ。餘儀なく孤獨の人になつて、何んな辛い事が出来やうとも何處へ行つて訴へる先も無くなつて来る。そんな事はまあ何うでも好いとして、人間は餘り忿りつばいと云ふと、一寸としたことでも、直に身體中が火になつて了ふので、自分で自分の生命を焼き棄てるやうな事になる。人は長壽したいと思ふならば、心も體も胖に有つて、何時もニコ／＼笑つて居る事である。腹の立つ時は濫りに人に向つて忿らずに、鏡に向つて忿るが宜しい。さうして自分の忿つた顔を凝然と眺めて居たならば、何か思ひ當る事があつて、或は忿らぬやうになるかも知れぬ。兎角物に忿りつばい癖のある人は、腹の立つ時には必ず鏡に向つて己れの顔を寫して見ることである。

(一五六) 力の強い女

女は皆撫肩の柳腰、手足も細りしたものだとのみ思つて居ると當が違ふ。中には随分骨格の頑丈に出来た現代の柄や板額も居る。

或る人の細君は實に見事な體格をして居る。道を歩いて居るのを見ると、知らぬ人は驚いて

「オヤ／＼これは奈良の大佛さまが庇髪に結つて歩き出したのぢやあるまいか」と思ふ。奈良の大佛さまは餘り大袈裟だとしても、相當な力士さんが庇髪の假髪を被つて假装して居るのではあるまいかと疑はれる。

身丈五尺六寸三分體重十九貫二百匁、それで年齢は今年二十七歳ださうだ。併し一寸見た所では何うしても三十二三位には見える。一ツは全く身體の大振に出来て居る爲かも知れぬ。それで名前は「おちさ」と云ふさうだ。串談ぢやない「おふと」さんぢや。

「大男總身に智慧がまはりかね」

此方は女であるが、何うも矢張その氣味合があるらしい。時々間の抜けたことをしては御亭主に太く叱られる。叱られた位では驚かぬ。何處を風が吹くかと云ふやうな顔をして居る。男は小柄で馬鹿に又聲が小さい。女は其の反對と来て居るので、萬事が總て不調和不釣合に見える。

男が小さい聲で「オイおちさ／＼」と呼べば、「ワア！」と答へて大きな身體が見はれる、男が何か愚圖々々言へば、女は大きな太い手を伸して引摺み、譯もなく懐に挿込みさうに思はれる。斯んな大女を女房に持つては小男では幅が利かぬ。その所爲か男は猶々小さくなつて居る。

る。

男は小さい癖に酒が好きだ、その上馬鹿に酒癖が悪い。力の弱い癖に飲めば直に人に喧嘩を吹つかける。内に戻つて来て暴れ廻る。身體が細君と反對だつたら全く始末に困るだらう。

この女の力の強さと來たら人に舌を振はせる。或る時のことに伊豆石を車に充分積んだ牛が近所の坂を登り惱んで道を塞いで居た。牛方も通行人も困つて居ると、其處に此の女が通りかゝつた。

「サア遣んなさい。斯んな所に置いちや邪魔だ！」

牛方を勵まして、後からグ／＼押して登つた其の力は、まるで機關車のやうだつた。

「ヤア強いなあ！彼の女の力は何馬力位あるだらう？」

見て居つた人達が、皆斯う言つたさうである。男が餘所へ行つて酒を飲み、管を巻くか喧嘩をするかして居ると、女はその／＼出かけて行つて、丁度母親が子供を抱いたやうな鹽梅式に引抱へて來る。抱へられたらヂタバタしても最う敵はぬ。男は諦めて抱かれた儘途中で眠つて了ふことがある。家に歸ると手荒く座敷に追投り出し、

「眞個に仕やうのない人だよ。サア序に小便をしてお休みなさい！」

男が四の五の言ふと面倒臭がり、手荒く尻を引捲り、毛だらけの太股を後方から両手に軽々と引抱へて縁先に連れて行き、敷石の向ふに差出して口笛を吹く。

「シイ／＼シイ……」

男は子供のやうに女の腕に首を持って半分眠りながら酒臭い小便をする。後で二三度男の身体を打振つて床の中に投げ込む。其儘おとなしく眠れば好し、文句を言つたり暴れさうに仕出したりすると女は睨みつけて、

「又ですか……此間の事を忘れませんか」

斯う言はれると、男は直におとなしく寝て了ふ。女の如の良い爲か、子供が既に三四人居る。或る夜女はこれから寝やうと云ふ時になつて、一人づゝ子供を抱へて小便を遣つて居た。その中男を子供と間違へて便器の傍に抱へて行つた。男は此の夜白面であつたのだ驚いた。

「馬鹿乃公だ／＼」

女は男の頬片をウンと打擲り、

「おれも糞もあるか早くしろ！母ちゃんか眠いぢやないか」

男はおとなしく便器にシャ／＼筒の口を放したさうだ。

(一五七) 無暗に事を氣にする人

世の中には馬鹿か呑氣か方圖の分らぬ程物に無頓着極まる人間があるかと思ふと、他の一方には又馬鹿に神経が過敏で無暗に事を氣に懸けて、その爲常に餘計な苦勞をして、言はゞ自分から求めて下らん苦勞をして居るやうな人もある。斯う云ふ人はまあ病的だと言つても可いがその人の爲には實に損なことである。斯う云ふ氣風の人は、何とか早く工夫して改めぬことは、その爲に病氣もし、また一生の間に於いては、何程損失を被らなければ成らぬかも知れぬ。斯う云ふ人は、人にも餘程妙に見られた妙に思はれることが多いが、自分では少しも氣が附かずに、何時も下らん事に己れの神経を悩まして苦しんで居る。斯う云ふ人の前で、何か他の事でもうっかり笑ひでもせうものならば大變、向ふは直に氣を廻して、「今彼の男が自分の顔を見て笑つたが、全體何を笑つたらう別に彼の男に笑はれるやうな事をした覚えはないが彼の男は何う思つて何を笑つたらう？」

斯う云ふ飛んでもない苦勞を求めて、下らん事を二日も三日も考へて自分で苦しむ。さうして何か飛んでもない事を考へ出して、

「ハアそれで彼の男は笑つたのだ！怪しからん、己れ覺えて居れ、今に屹度この復讐はして見せる。

睨まれた方こそ好い面の皮だ、併しそんな人の前でうツかり笑つたと云ふことが、無理なやうではあるが此方の不注意である。斯う云ふ氣の小さい神經質の人と見たならば、善々注意せんことには、何んな詰らない目に合はぬとも限らない。

斯う云ふ神經質の人は實に氣味の悪いもので、餘程此方が其の人に對する言語動作を慎しまぬと、直に向ふに氣を揉ませるやうな事になる。斯んな氣の小さい人間の前で、大きな嘘の一ツもすると、向ふは直に悔りして飛び上り、忽ち顔の色を變へて、この男は俺を侮辱するなと憤つて直に含むから堪らない。

斯んな神經家のことに就いて、何か人に噂でもしたと云ふやうな事を御當人が聞くと大變な騒になつて来る。直に氣にして其の人の所に訊きに行かすには居たゝまらぬ。早速出かけて行って、「君彼の男は俺の事を何と云つた？差支のない限り何うか話してくれ給へ！」此方は實に意外なやうな話だ。

「イヤ君のことなど別に何とも言ひはしなかつたよ」

「イヤ然うではあるまい！現在俺の事を何か彼の男が君に話して居たと言つた人がある。話してくれても宜いぢやないか」

「アハ、、然う言へば思ひ當ることが全くない譯ではないよ」

「君何と言つたね？」

「君が何時か若い女と道を歩いて居たと言つたよ」

「そりや君、僕の妻の妹だよ」

「ぢやアそれを見たんだらうよ」

「君外にまだ何とか言つたらう？」

「イヤ唯それ丈の話だつたよ」

凝然と考へ込んで眉をビリ／＼させる。

「何も君そんなに氣にせんでも可いぢやないか、そんなに氣にする所を見ると何だか大將可怪ズ！」

うツかり串談の一ツも言ふとさあ大變！それから／＼と氣に懸けて、三年三月位は忘れ切らぬ。世には何時も斯うして下らんことを氣に懸けて、自分で苦しんで居る人がある。斯う云ふ

質の人間と見たならば此方も其の氣で附合つて居らぬと云ふと、實に飛んでもない災難を被らねば成らぬやうなことになる。

(一五八) 夫を散々な目に遭せる女

おなじく女房を持つても、良い妻に添ひ合せたものと、精神の不具者に添ひ合せたものでは實に天地の相違がある。

或る一人の男は至つて善良な人であるが、氣の毒なことには妻女の撰擇を甚だしく過つた。その爲人の知らぬ苦勞をして泣いて居るのは如何にも慘だ。

男の親戚や友達は皆口惜がつて、

「何故早く彼の婢を叩き出さぬ？何處が好くて彼んな我儘な女と一緒に居る？」

「見かね聞きかね寄つて集つて忠告すれば、男は凝と眼を閉り、何にも言はずに涙をハラ／＼流して居る。男は女の我儘なのを一途に身體の加減が悪いのだと思つて不憫を加へる。すると却つて恩が仇になつて女は益々増長し男を尻に敷きたい程敷く。それでも男は小言も言はず、女の機嫌を取るやうに取るやうにと勵めて居る。

女は益々好い氣になつて、仕たい放題な事をし、言ひたい放題な事を言ふ。その我儘さ加減と來ては見て居られぬ。全く以つて困りものである。近所の人達まで、齒痒がつて「何故打擲らんのだらう？」と言つて居る。男は擲る所の話ではない何時も腫物に觸るやうにして、何を言つても「オ、好い／＼！」と言つて居る。斯んな氣の長い男は世間に稀だ。

女は有がたいとも思はずに、男を憎み男を嫌ひ、顔を見ても聲を聞いても不快な念が起るさうだ。男が何か一言いふと、直に大きな聲をして怒鳴り付ける。怖ろしい眼をして睨む。まるで見て居られない。

怒鳴つたり睨んだりする位なら未だ可いが、何か己れの氣に適らぬ事があると、男を打つ、蹴る、引搔く、抓める、喰ひ付くなどは稀でない。そんな時には相手にせず、男は何處へか逃げて行く。實に見られたさまでない。

男は相當に名前を知られた畫工である。女は何か意に満たぬ事があると、男が幾日もかゝつて苦心した下畫を寸断々に引破き、色料皿などを取つて庭の敷石に叩き付けることなどがあつた。それでも男は相手にせず、獨りでポロ／＼涙を流して辛抱して居る。

或る時男が濃美地方の風景を寫生に出かけることになつた。何か留守中の注意を言ひ置かう

とすると、女はそれを聞かうともせず、

「そんな事は聞かなくても分つて居りますよ」

一言の下に怒鳴り付けて了つた。大切な事であつたので、今度は門生に言ひ付けて置かうとする、女は狂ひ立つて其處に在つた茶碗を取つて男の顔に叩き付けた。それが男の顔に當つて血がタラ／＼と鼻に流れた。疵が浅くなかつたので、男は旅行を中止したさうである。

斯んな女の末路は何うなるであらう。今に夫の罰が當つて末は悲しい事になり、屹度後悔する時節があるに違ひない。今に屹度おもひ當つて、我れと我が身を怨む時節が来るに違ひない。屹度来る。必らず来る。その身に試して見るが好い。

(一五九) 好んで人の中口を利く人

世には好んで人の間に立つて中口を利く人がある。實に宜しくない癖である。中口を利くと云ふのは、雙方の間に立つて相互の交情を害するやうな言語を發することである。言ひ換へて見れば、彼方には好いやうに言ひ、此方には好いやうに言つて、相方の間を搔き掻いて何方にも腹を立てさせ、互ひに交情を悪くさせ合ふやうなことを言ふのである。世の中にこれ程罪なこ

とはない。若し友人間に於いて、何か感情の行違ひから互ひに交情の悪くなつて居るやうな者でもあれば、此方が其の間に立つて相方の中を調和し、互ひに交情睦くさせてこそ然るべきであるのに、此方が餘計な中口を利いて、互ひに親密にして居る友達同志の間を裂くなどは、實に怪しからん話である。

然るに世の中には好んで斯う云ふ卑劣な事を遣る人間がある。甲の許に行つては乙のことを悪ざまに言ひ、乙の許に廻つては又直ちに甲のことを悪ざまに言つて、好んで人の間を裂き、それで自分は得たり賢しで居る。然らばそれで此方は何か得る所があるかと云ふと、他には害を及ぼして、己れは何等の得る所もない、それでは何の爲に斯う云ふ餘計なことをするかと云ふと、それは徒一時の出来心で、多くの場合に於いては、別に深い了簡があつてする譯ではない、言はゞ一種の病的で、實に厄介千萬な次第である。

それで無くても、人二人集まれば、人間は兎角人の噂をしたがるものである。その上に自ら好んで人を是非批難するやうな癖があつては、何んなことを喋り出さぬとも限らない。「口は禍の門」で、餘り餘計な口を叩き過ぎると云ふと、己れの口故に身の置場のないやうなことも往々出来る。若し自分には斯う云ふ善くない癖があると云ふことに氣が着いたならば、

速かに此の悪癖を矯正しないと云ふと、人が自然と己れを相手にせぬやうになつて来る。人の中口などを利いて、それが何時までも人に知れずに居ると思つて居ると、實に飛んだ間違ひである。今日は無事に済んでも翌日は直に分る。假令翌日は知れぬにしても、何時か吃度相方の間に知れるものである。斯う云ふ事が段々と度重なる人は許さぬ。

「彼奴は實に怪しからん奴だ、何時も人の中口ばかり利いて、中を裂くやうなことがかりする。断じて近付けてはならぬ」と人に睨まれるやうになる。人間が斯うなつたが最後、何處へ行つても鼻を撮まれて、人に憎まれ卑しまれ、同時に遠ざけられるやうになる。世には口故此處に落ちて来て、友は失ひ職には離れ、我れから世間を狭くして困り切つて居るやうな人間が時々ある。

斯う云ふ悪癖のある人間と見たならば、なるべく接近せぬ方法を取つたが宜しい。已むを得ず接近する場合には、斯う云ふ人間に向つて虚然人の噂などはせぬことである。斯う云ふ卑劣な人間に向つて、虚然人の噂でもすると云ふと、向ふは得たり賢しで、直に先方へ斯附けて耳打するものである。また向ふの事を此方に通ずる者であれば、その人間に決して油断をしてはならぬ。向ふの事を此方に通ずる者であれば、向ふに行つては又此方の事を必らず通ずる人間

に相違ない。斯う云ふ人間は何處へ行つても、断じて人には愛せられぬ。「ソレ彼奴が来た。何にも言ふな」と人に手を振られるやうになる。人間が斯うなつたら、最う何處へ行つても了ひである。

(一六〇) 夫を大切にする女

十人十色人さまざま、男は男に依つて違ひ、女は女に依つて異なる。男の類に茶碗を叩き付けるやうな女があるかと思ふと、一方には又男に踏まれ蹴られしても凝と女の道を守つて貞操の犠牲となる婦人も居る。

或る人の妻は實に貞操な婦人である。男は中々活動家であるが、大酒家で癪癪持で、おまけに女好きと来て居る。酒に酔つたと言つては細君を酷い目に遭はせる。何か一寸氣に食はぬ事があつたと言つては蹴たり踏んだり、髪を掴んで引摺り廻したりする。それで何か仕事があつて金が手に入つたとなると、妾どもにはウンと着物を拵へて遣つたり金を呉れたりするが、肝腎な本妻には手拭一本買つて遣るでもない。

世間普通の女ならば何とか言つて怨むであらう騒ぐであらう。狂人にも成りかねまいが、こ

の細君は悟つて居るのか諦めて居るのか、男を怨む様子もなく、騒ぐ気色も全く見えぬ。凝と内を守つて一家の面目秩序を保ち、断じて醜聲を外に漏さぬ。

それで舅姑に對しては孝養至らざる所なく、子を慈しみ奴婢を愛し、親類朋友の交際にも何一ツ缺けた事がない。夫は多く妾宅に寢起して宅には偶にしか戻つて來ぬ。至誠の致す所であらうか、イヤ全く左様である。女は夫の歸る日を豫め知つて居る。

「今日は旦那様が、お歸りになりますよ」

女中に向つて斯う言つた日には、必ず主人が戻つて來る。細君は满面春風、温かい情を以て夫を迎へる。兩親初め子供も皆無事で暮して居ることを先づ知らせる。さうして夫の近狀を問ふ。

「良人別にお變りもなく居らつしやいますか」

これが虚偽でない。形式でない。至誠を以て迫まるので、これには夫も王手が出来ぬ。それらしい口頭のお世辭とは違ふので、一寸切込む餘地がない。そんな時には男は黙つて考へ込んで居る。良心に責められるのだ。夜食の膳は女中達にも出させず、細君自身で必ず出す。夫は膳の上を見ると、何から何まで自分の好む物ばかり、煮方鹽の加減から皆一々口に適ひ、酒

の燭の浸き加減まで寸分申分がない。人の妾手掛でもするやうな女の調へた食物とは何を口にしても味が違ふ。

男は機嫌よく飲む。飲むと又言ひたい放題なことを言ふ。

「お前は乃公が斯んなに道樂をしても何とも思はぬか」

「結構なことだと思ひます！」

「ナニ結構だ？その理由は？」

「一方に勝れた能力があまりなさればこそ一方にお好きな事もお出来になるぢやございませんか。世には能力も無ければ快樂も亦無いと云ふやうなお仁も多いぢやありませんか。それを思ふと良人が何と遊ばさうと、私に何う思ひやうが有ませう。ア、私は仕合者だ、結構なことだと朝夕神さまや佛さまに深く感謝致して居ります！」

嫁の手前を氣の毒に思ひ、斯うした時に舅なり、姑なりが苦い顔をして出て來ると、細君は機轉を利かして、愉快な話ばかりして夫を笑はせ老人を喜ばせ、そんな話を仕出す機會を外させて了ふ。この細君は我が身邊の不和、不満、怨恨、憂愁、煩悶、嫉妬に生きずして、平和、満足、幸福、歡樂、愛情、感謝に生きやうとする婦人である。

櫻花咲けるもあるを餘所にして

すゞ茶に狂ふ蝶もありけり

男は此の妻の愛を餘所にして、矢張妾手掛に狂つて居つたが、或る時大金を儲けると、それで早速一臺の自動車を買つた。また妾共を乗せて何處を乗廻すことかと思つて居ると、今度は本妻と合乗で春風に吹かれながら箱根に出かけた。その夜塔の澤で相變らず飲んで居つたが、男は酔に乗じて細君に問ふた。

「何うだ、お前嬉しいか」

細君は黙つて居つたが、ハラ／＼と涙を流した。夫は其の涙に何う感じたものか、明くる日歸つて妾に残らず暇を遣り、その夜から平和な家庭の主人になつて女狂などはパツタリと廢めて了つた。同時に今日までの危い商賣も亦おもひ切よく廢めて了つた。至誠の力は強いものだ。

(一六一) 何だか薄氣味の悪い人

會つて見て何となく氣持の快い人もあれば、また何だか薄氣味の悪いやうな人もある。前者

は得であるが、後者は非常に損である。前者は得な人だけに此の人の性行に何處か必ず美點のあるものであるが、これと反對に後者は又、人から薄氣味悪く思はれる丈に、何處かに必ず、陰險な所のあるものである。

斯う云ふ人は一寸會つて見ても、如何にも陰險さうな眼付をして、じろ／＼此方の顔を見る口を利くにも判然と物を言はずに、低い聲で、何だか氣味の悪い口の利き方をする。さうして終始此方の氣を引くやうな様子が見える。

斯う云ふ人は、何を訊いても判然言はぬ。返事が極めて曖昧である。

「ちやア左様云ふ事に願はれませうか」

「左様でございますな、宜しうございませうよ」

一寸斯う云つたやうな風である。

斯う云ふ人間の内幕は少しも分らぬ。萬事秘密々々と出かける。自分の内情を努めて人に知らせまいとする。外から見ると何をして居るか分からぬが、何だか内證で胡鼠々と遣つて居るやうな様子が見える。その氣味の悪さと云つたらぬ。不遠慮な人間になると、大きな聲で關はず訊いて見るやうなことがある。

「貴方は近來何う云ふ事をなさつてお居でますか」

「いゝ別々に……」

言はぬ。抑うつて見る。

「内證で金貨を遣つて居るやうな事を伺ひましたが……」

「いゝえ何う致しまして！」

「ハ、そんなにお隠しなさらんでも好いでせう！何うです少し借して貰ひたいもんですな。早速ながら利息は何んなものです。矢張り歩貳拾四五錢位のところですか」

苦笑して、

「借すどころの話ぢやありません、借りる方でございます」

「ぢやア如何です、一番連帯で借りやうぢやありませんか、日歩拾四五錢も拂へば參千と五千は出すところがありますか……」

「何う致しまして！」

逃げる。斯う云ふ人間は、用のない人にはなるべく會はぬやうにする。また人と談話をすることも避ける。道を行くにも罪人のやうに俯向いて行く、鼯鼠ぢやないが光線を恐れる傾きが

ある。何事も内證々々で、親が死んでも子が生れても人に隠したがる。一切が秘密づくめで、伏魔殿の御主人然として居る。その陰氣さと來ては、岩清水のボタ／＼垂れる暗い岩窟の内にでも入つたやうである。途中で會ふ。

「何方へお出でます？」

「ハイ、いえ、一寸その邊まで……」

決して何でも人に明すことを喜ばぬ。娘が嫁に行つた。途中で會つた人が親切に、

「まだつひお悦にも出ませんでしたか、何うやらお宅さまには近頃お悦がありました御様子で、まあお目出たうございます！」

黙つて頭を下げる。此方は進んで、

「何方へお嫁ぎになりましたな？」

「イエ最う……」

決して言はぬ。さうして内證では、何だか胡鼠々々運動して居る。斯んな人間は誰にも厭がられる。つまりは孤立しなければならぬやうなことになる。

男でも女でも人は卑く出るに限る。殊に女の尊大に構へるのは醜いものである。總じて成上者は人に威張つて見たがるものだが、此位人に不快な感じを與へるものはない。勝くなれば威張らんでも人が自然に此方を立てる。人は勝く成ればなる程卑く出るのが伶俐である。ところが浅智慧な者になると、矢鱈無性に威張つて見たがるので、「彼の成上者奴が」と人に言はれる。苦々しい話である。

或る女は長い間貧乏して居た。夫の友達の家を借り歩いて、到る處でお世辭を言つたりお叩頭をしたり、躰の好い乞食を見たやうな事をして居た。彼此の世話になつて日を送り中には随分迷惑をかけて居る家も少なくなかつた。

その中男が何うか斯うか辯護士になれた。成るはなつたが事件がなくて人の家に看板を出させて貰ひ、夫婦は其の家の一間を借りて住んで居た。

友達は何うかして世間に出して遣りたいと言つて、何か事件があれば其の男に遣らせるやうにして居た。謂はゞ人の同情に依つて立ち、何うにか口を濡して居た。

その中に一人の友達が自分の關係して居る會社の法律顧問に骨を折つてして遣つた。これが抑もの取附で、それから次第に事件の數も殖えて來た。一二年も辛抱して居る間に若干か金が

出來て、別に一戸借りて事務所を開き、書生の一人も置くやうになつた。

夫婦は矢張友達の家を交るゝ廻つて機嫌を尋ね、お蔭さまでお蔭さまでを繰返し、相變らずお世辭も言へばお叩頭もして居た。「世話の仕甲斐があつた」と言つて、友達は皆可愛がつて居た。女は大層口まめな質で、自分の家に男の友達が見えると、直に出してお世辭を列べながら下にも置かぬやうに待遇して居た。

友達は益々世話をして居ると、男は段々仕合せが好くなつて、四五年の内にバタ／＼金を拵へた。事務所も相應に繁昌して來て、書生も二三人居るやうになつた。夫婦は立派な家を買つて引越し、門戸を張つて女中の二三人づゝも使ふやうな身分になつた。

女は態度を一變して、急に奥さまになつて了つた。以前人の厄介になつて居た時の事は忘れて了つて腹からの貴婦人を氣取り、前に色々力を添へてくれた友達が來ても、馬鹿に容體振つて容には顔も見せぬやうになつた。友達の細君連中が訪ねて來ても其の通り、馬鹿に大きな顔をして昔の好みを蹂躪し、人を見下げたやうな事をするので、誰も心持を悪くして「彼の恩知らずが」と蔭では譏り、誰一人足向をする者も無くなつた。

昔の縁の絶えたのを女は結局好い事に思つて居たが、その中男が失敗した。買った家も賣

拂つて、今まで繁昌して居つた事務所は至つて狹隘な所に引移つた。女は又以前の態度に立返つて、急にお世辭を言つたりお叩頭をしたりして友達の家を廻り始めて見たが、何處へ行つても相手にしてくれぬので、夫婦とも目下大きに弱つて居るさうだ。

(一六三) 調子に乗つて物を言ふ人

世の中には調子に乗つて物を言ふ人がある。一人人の尻馬に騎るとも云ふ。つまりは何方も馬鹿の異名と云ふことになるのであるが、人が何か一言話をするとすぐに其の後に付けて得たり賢しで無闇に喋る。世間では斯う云ふ人のことを「御調子もの」と云ふやうである。調子に乗つて餘計なことを口走るなど云ふ事は多少考へのある人は、斷じて遣らぬことである。

甲と乙とが話を始めた。

「君は彼の權藤と云ふ男を知つてるかね？」

乙は答へて、

「ア、知つてる」

「何だか愉快さうな人だね？」

「實に愉快な男さ！」

お調子者の丙は黙つて居られない。すぐに話の尻馬に騎つて、

「僕も知つてるよ彼の男は」

態々仕事を止めて来て、

「彼の男の郷里は肥前の佐賀さ、年齢は今年四十三で、子供が澤山ある。最う長い間彼の會社に居て、近頃は金も大部出来た様子だ。飲むことは素敵に飲むが世渡は中々巧いね、先月あたりは淋病で大將大分困つて居つたが何うしたか知ら」

實に餘計なことを言ふ、言つても誰も褒める者はない。二人は煩いので話頭を轉ずる。甲が先に口を切つて、

「君近頃吉松に會つたかね？」

「イヤ暫く會はんね、彼の男は何うしてるんだらう？」

「好い男だが、何うして何時でも彼んなに窮してばかり居るんだらう、眞個に氣の毒なもんだね！」

丙は側から直に又他の話に口を出す。

「イヤ彼の男は困る譯だよ。初中高利の金ばかり使つて居るからね！日歩貳拾五錢位な金は平氣で借りるさうだ。そんな利息の高い金を使つて君、何うして商賈人が立行くものか。大將の節は青くなつて居ると云ふぢやないか」

二人は相手にせず、すぐに又話を轉へる。

今度は乙が甲に向つて、

「君明日の日曜は何うする？」

別に斯うと云ふ名案もないね。明日は事に依ると雨かも知れんよ。若し雨だつたら本田の所に行つて碁でも打つて、また奴を一番負して遣るかね、ハ、ハ、ハ、」

「彼位碁の好きな男はないね！」

丙は又態々自分の椅子を離れて出て来る。

「彼の男は碁も弱いが喧嘩も弱いね、二三日前の夜、何か子供のことから隣家の寡婦さんと喧嘩をおツ始めたは好いが、大將散々に寡婦さんに談じつけられて、両手を下げて平に御免候へは生地がなかつたね！その後で又細君に散々叱られてこれにも同じくはチト恐縮するね！」

甲は驚いて、

「君は色々なことを知つてるね！何うだ官吏などしてるよりは興信所にでも入つて見ては？」

「興信所と云へば、近頃方々に怪しい奴が出来るね！去年此處で首になつた和田崎なども、近頃何處かの興信所に首を突込んで、内々強請つてると云ふぢやないか。勿論彼の男は質は好くなかつたね！」

乙は凝然と顔を見て、

「マア君位のもんだつたらうよ」

言り得たりと甲は笑つて、

「最う徐々時間になつたね片付けやうぢやないか。何うしたんだらう。今日は一日課長は一度も顔を出さんだつたね」

散々侮辱されながら丙は又口を出す。

「君達は知らんかね？課長の妾は昨日婦人科病院に入院して大手術を受けたと云ふぢやないか」

世には斯う云ふ厄介な人間もある。

(一六四) 禮儀作法を心得ぬ女

男子には男子の禮儀作法があり、女子には女子の禮儀作法がある。男子で男子の禮儀作法を心得ぬのも醜いが、女子で女子の禮儀作法を心得ぬのは、更にそれ以上である。或る女の不法法さと来てはお話にならぬ。人が訪ねて行つても女だてら立つて居つて口を利く。それ位は何でも無いが、客が来て夫と何か話をして居ると、用もないのに座敷に出て来て餘計な馬鹿口を利きながら大口を一杯開いて笑ふ。その騒がしいこと夥だしい。男の友達で此の女を煩がらぬ者はない。

何うかすると客の前に膝行寄つて、馬鹿口を利いて一人ワイ／＼騒ぎながら黙つて客の煙草を引抜いて勝手に吹すことなどもある。男が何と言はうと平氣だ。時に依ると客の前で大きな口を開いて欠伸をすることもある。この様子では客の前で尻を浮して一發位は放し兼ねまい。或る時この家で客に酒を出した時は面白かつた。二人前その邊の仕出屋から物を取寄せて酒を始めると、細君が早速座敷に押し出して來た。男は未だ客と餘り懇意な間でなかつたので、若し又無禮な事があつてはならぬと警戒し、

「少しお話があるからお前は彼方へ行つてお出で……」

「イエ奥さん何うかまあ此方へ！」

客は愛想に斯う云つた。女はこれを好い幸ひにして座り込んだ。お酌をしたは好いが、直に男の盃を失敬して飲み始めた。

「オイ彼方へ行つてお出で！」

男は女の袖を引いた。

「好いちやありませんか、私が居たつて！」

男を横目に睨みつけた。客の前で争ふのは體裁が悪いので、男は我慢して居つた。女は座敷にお釜を据ゑて連りに飲み酒が竭きると反對に、

「良人、一寸お銚子を浸けて入らつしやい！」

何方が亭主か分らない。客は全く手持不沙汰であつた。

「早く浸けて來い！」

「良人浸けて入らつしやいよ、お酒のお相手は女がするもんですよ！」

「汝のやうな奴にお相手をされてはお客さまがお困りだ！」

「無性な人ですね、良人見たやうな人はないわよ」

不性無性立つて銚子を浸けて來たは好いが飲むこと飲むこと、客も主人も其處退にして、お

のれの爲にした御馳走のやうにして飲む。飲む丈ならば未だ好いが男が客と話して居る間に其の膳を自分の前に引寄せて、片端から平けて了つた。

客は驚いて見て居ると、今度は此方の膳に向つて箸を出した。

「これえ！」

男は見かねて袖を引いた。

「好いわよ、お客さまは何うせ召食らないんですもの、冷めない中に食べた方がおいしいわー」
客は興を覺した居た。

(一六五) 賑かな人

世の中には誠に陰氣な人がある。斯う云ふ人は何時も寒夜の水瓶のやうに冷え切つて、顔付形振からして悄々して居る。斯う云ふ陰氣な人に會ふと、幽霊の姿でも見たやうに、何だか此方が竦然とする。斯う云ふ人は初日の光を拜んでも、天外萬里の旅に在つて、秋の月でも眺めるやうに淋しがるものである。つまり我れから世の萬物を悲觀する。實に損な性質である。斯う云ふ人は櫻の花の下で盃を抱へて居つても、何か凝然と考へ込んで居る。自分一人が淋しが

り悲しがるばかりでなく、人にまで飛んだ御相伴をさせるので遣り切れぬ。

「良人、お隣家に男のお子さんが生れたさうですよ」

細君が飛んで歸つて報告しても、「左様かい、それは芽出たいわね！」とは決して言はぬ。大將情々して、

「左様かい、何うか今度は無事に育てば宜いがな！」

「いやなことを仰しやい。隣家でそんなことを聞くと慍りますよ」

「南無阿彌陀佛、老少不定當にやならん！」

斯う云ふ陰氣な人に會ふと、四邊近所まで迷惑する。天の配劑は誠に巧く出来て居るもので斯う云ふ人の細君は、概して陽性な婦人である。さも無いことには夫婦して、毎日ベソく泣いて居るからである。

「良人ちよいと出て御覽なさい、今この先の油屋さんにお嫁さんが見えますよ」

「何うか初産に怪我がなければ好いがね」

程なく此方も婚禮の披露に呼ばれた。一座は酒で大騒動、踊る者もある跳ねる者もある。

「何うです今夜は少し陽氣に願ひたいですな！」

袖を引かれても気が付かぬ。裸體にされて雪の中に突出された襦子のやうに凜然と思案に暮れて居る。

「大將ツ！」

突然呼ばれて、

「オ、、！」

悔りして顔へ上る。此方は笑つて、

「何うだ一杯飲み給へ！何でそんなに悄々して居るんだい？」

「人間一生の道行は極つてるもんで、婚禮の次は葬式だはなア！」

實に興が覺めて了ふ。斯んな人間は人の勇氣に何程打撃を與へるかも知れぬ。斯う云ふ淋しい人間ばかりだと遣り切れぬが、一方には又馬鹿に賑かな人間がある。前のと反對に、陽性な人の細君は、概して陰氣なものである。

「良人、お隣家の小さいのが亡くなりましたとさ、可哀さうにねえ！」

「何を泣くんだ、また直に生れるさ！ハ、ハ、ハ、」

「良人早くお悔みに入らつしやい、角の酒屋さんの旦那が今亡つたさうですよ！」

「ハ、左様か、其奴は面白いな！」

「良人何が面白いんですよ！」

人間が生きてるのは何も不思議はないが、死んだとなると面白いよ！」
斯う云ふ人には何でも面白い。夜は早速夜伽に出かけた。皆悄々として居る中に、此方は獨りで賑かに騒いで居た。一座の人々は兼て其の氣風を知つて居るので、別に不思議がりもせず、一同堪らず幾度か哄然と笑はされた。

町内の寄合にも此の男が顔を出さんと何だか淋しい。或る家の一人息子が洋行する時に、此の男も一緒に船まで見送つた。船が棧橋を離れて段々沖の方に出始めると、皆別れを惜んでシクシク泣き出した。この男はいきなり越中禪を外して紐をステッキの先に結付け、旗の代りに振廻し振廻し聲を上げ「萬歳々々」と連りに呼んだ。一同これに憂ひを忘れて笑つて居る中に船は沖に出て了つた。斯う云ふ賑かな人間は外に取得はないにしても、悲しい席や哀れな席には音楽隊の代用になつて、大きに人の氣を引立てるもので、淋しい陰氣な人間に比べると、賑かに暮した方が己れも得、他に自然と勇氣を與へるものである。

(一六六) 誠に親切な女

男にしろ女にしろ親切な人は誠に少ないものだ。疑ふ人は誰とでも交際つて見れば直に分る。「この人は誠に親切な人だ！」と身に沁みて感ずるやうな人は全く世間に少ないものである。併し人間は親切で無ければならぬ。殊に女は左様である。男の薄情なのは未だ幾らか我慢が出来るが、女の薄情者と來ては全く以て愛敬がない。女は優しい所が値打だ。情に厚い所が生命だ。

或一人の女は誰にでも愛せられる。別に學問が出来る譯でもない。藝に達して居る爲でもない。顔の美しい所爲でもない。然り而して此の女の人に愛せられる原因は、一に全く其の心情の濶かい點にある。或る一人の男が其の家に行く途中で足駄の鼻緒を切つた。これが至つて手先の不器用な男で、半巾を裂いて拙い手細工を遣つて、片足を引摺り引摺りやつと其の家まで行くは行つた。

主人に會つて用談を果し、告別をして前の足駄を穿いて見ると、何時の間にか鼻緒が整然と立直してあつた。夜中のこと、若し此の家のと身換へたのではあるまいかと、男は氣にして不思議さうに見て居ると、其家の細君は嫣然笑つて、

「誠に不手際でお穿きにくいでございますが、只今一寸私が立直して置きましてござ

います。マア何んなにかお困りでございましたでせう！」

「イヤこれは何うも恐縮致しました！」

一寸したことではあるが「親切な人だ！」と其の男は深く感謝しながら歸つて行つた。この女には斯うしたことが度々ある。或る時何處の者とも知らぬ一人の男が、この女の家の前で急に氣持が悪くなつて困つて居た。世間普通の女であつたら、後の掛合を怖れて知らん顔をして居たであらうが、この女には人の難儀を餘所に見て居ることが出来なかつた。直に出て行つて「貴方お氣分でもお悪うございますか」と尋ねた。「ハイ病後でございます所爲か、此處まで参りますと、急に眩暈が致しまして……」と言つた。

「ぢやアまあ此方へお入りになつて、少しお休みなさいまし！」

「有がたうございます！」

男は杖に縋つて内に入つて來た。女は蒲團を出して靜に寝して遣り、大病の後だと聞いたので、多分腦貧血でも起したのであらうと思つて、枕を低くして遣つて足を温め、幸ひ葡萄酒があつたんで飲せて遣り、暫く靜に眠らせて見た。一二時間も経つと男は悉皆氣分が治つた。厚く禮を言つて歸つて行つたが、明るる日夫婦連で禮に來た。これが縁になつて、主人同士が今

では互に親しく往復をして居るさうだ。

この女は誰に對しても此の通り親切である。その家には自然と人が集まるやうになつて、今日では相當な生活を營つて居るさうだ。

(一六七) 至つて呑氣な人

世には物事に焦燥して、何時も眉に火の付いたやうに慌て返り、自分で自分の心を苦しめて居る者があるかと思ふと、他の一方には呆れる程呑氣な人も居る。笹谷君は畫工であるが、この人は至つて呑氣な質の人で、頭の上に岩が落ちかゝつて來ても、滅多に動く人でない。或る時火事に遭つたことがあるが、自分の家の家根に火の付くまでは平氣で寢て居つたさうである。

この人が細君を貰つた時の話が頗る面白い。未だ今日のやうな大家に成られぬ頃、場末の或る町に長屋住居をして、男世帯で暮して居つた。或る時一人の友人が訪ねて來て、

「何うだ君も一人ぢや困るだらう、細君を貰つちや何うだね？」

「ウン貰つても宜いな」

「ぢやア僕が媒妁人になつて遣るから見合をし給へ、君の都合は何時が宜いね？」

「ナニ今日だつて驟はんが、そんな面倒臭いことをするには及ばんよ、好いのがあつたら連れて來給へ」

「ぢやア此方に一任するかね？」

「宜からうよ」

「ヨシ承知した！ぢやア何時連れて來ることにしやう？」

「ナニ何時でも宜いよ」

「ぢやアこの月の十五日に爲やうぢやないか」

「十五日は悪くないね」

「ぢやア十五日の夕方に連れて來ることにせう。併し最う日がないよ。今日は早十日だからね君それまでに準備が出来るかね？」

「五日あれば君大丈夫よ？」

早速話が出来たので、友達は急いで歸つて行つた。忽ち五日の日數が経過して今日は早約束の十五日に相成つた。所が此方は有名な呑氣屋さんであるので、今日は幾日であるかを頓と考

へずに居つた。朝飯も平気で食ひ、晝飯も平気で食つて、或る友達の所に遊びに出かけた。ゆつくり話し込んで居る中に、今日は十五日だと云ふ話が出た。此方は初めて気が附いて、

「イヤそれぢや今日は斯うして居られん！」

生別も匆々に、慌てゝ家に飛んで歸つたのは最早その日の三時過ぎであつた。何しろ家が汚いので、先づ掃除をせねばならぬと云ふので、諸道具を戸外に運び出して、塵拂で今バタ／＼と障子を拂きかけた所に、媒灼人の方では早お嫁さんを連れて來た。連れて來て見るとお婿さんは頬被をして手に塵拂を取り、今掃除に懸つたばかりの所であるので驚いた。此方は更に驚いて、

「君餘り早いぢやないか」

「だつて最う約束の時刻ぢやないか」

「掃除も出來ん先に來られぢや弱つたね！」

「でも來たものは仕方がないよ、歸る譯には行かんぢやないか、何うする？」

「何うしやう！」

「弱つたな！」

「困つたね！」

何方もハタと當惑したが、さて何と仕方もない、仍でお聲さんの言ふ事には、

「ぢやアまあ手傳つて掃除をしてくれ給へ！」

「仕方がない、遣らうよ」

媒灼人は羽織袴を脱ぐ。お嫁さんもそれに倣つて小紋縮緬の二枚重を脱ぎ、不斷着に着更へて襦袢の姐さん被り、三人がよりで遣つたので、掃除は濟んだが日が暮れた。媒灼人は尻を下して袖の埃を叩き、

「サアそれぢや君、三々九度を始めやうぢやないか」

「ところが君、未だ何の用意もしてないが何うしやう！」

「其奴は困るたア」

「蕎麥でも取らうか」

「何うも仕方がないた！」

「お待ち遠さま」

蕎麥は來たが酒がなかつた。

「君蕎麥丈ぢやいかんぢやないか」

「ヨシ来た酒を買つて来う」

お聲さん自身で貧乏徳利を提げて来た。盃をして蕎麥を食ひかけて見たが何だか淋しい、何だか婚禮らしくない。お聲さんも媒妁人も石下戸と来て居るのでまるで、葬式の出た跡のやうだ。トドの納りは隣家の疊屋の主人を呼んで来て、これはウンと酒を飲せて唄はせた。こんなことで景氣を付け、芽出たい芽出たいでお開きにした。晝伯夫婦の婚禮は、それ斯くの如く簡にして單なりけりであつたが、妹背の中は水も漏らさず、今日では既に男女五人の子をなして家運長久、子孫繁昌、誠に幸福なことであるさうな。

(一六八) 生涯夫を泣せる女

女としては男を選ばねばならぬと同じやうに、男としては連添ふ女を選ばねとおのれの娘故に生涯泣かねばならぬやうなことになる。

こゝに好い手本がある。或る男が質の好くない人の媒妁で、碌に身元も知れぬ女を女房に貰つた。ちよつと顔の濫皮の剝けた所を男はお手輕にオイそれで買つたのださうだ。

さて貰つて見ると香しくなかつた。朝寝はする、口には旨い物を入れたがる。女だてら酒は呷る烟草は吹す、仕事は何一ツ出来んと来て居るので、男は少々當が外れた。イヤ少々位のことでは済まぬ。媒妁口とはまるで代物が違ふので男は窃に頭を掻いた。女は平氣で好きな眞似をして居つた。

男が収入でも多ければ、そんなに頭を痛めることも無かつたか知らぬが、月給はかつきり貳拾圓、暮の賞與が僅か一ヶ月分の薄給取では、斯んな女を女房にしては、毎月少なからず懐に響いて来るやうになつた。

男は内職に千枚八錢の状袋を張り始めた。

「お前もこれを内職に遣つて、切めては自分の煙草代丈でも取れ」と言へば、「わたたいそんな事は面倒臭くて出来やしない」と言ふ。

「出来んことがあるか、乃公でさへ毎夜斯うして遣つてるのに」と言へば、「お前さんそんな事をしたら肩が凝りはしないの？」と言ふ。

冬は炬燵にばかり潜つて居り、夏はころり／＼、轉げて寝る。寝てる丈ならば未だ好いが、男が汗水垂した金で、毎日缺かさず敷島を一袋、外に白梅の小袋を一袋づゝ吹す。これで煙草

錢丈が月に六圓づゝかゝる。その上偶には酒も飲み、外にいやし食もすると来ては、男は此の女を養ふ爲に、毎日テク／＼役所通をするやうなものである。全く以て生涯頭の upper やうはない。

「あんな女は早く叩き出してしまへ！」と言つても何の因果か未練がある。男が骨を折つて着物の一枚も拵へて遣れば、直に賣つたり典いたりして食つて了ふ。おのれの物を無くして了ふ丈なら好いが、男の物を留守の間に片端から飛して了ふ。家賃は溜る。米屋は持つて来なくなる。男は法が付かなくなつた。到頭分れ話にして世帯を盡み、男は今度間借をして又元々と稼ぎ出した。貯金が少し出来たと思ふ頃になると、女は何時の間にか又元の古巢に房つて来て男を圓め、僅か一月か二月の間に又何にも無いやうにして了つて今度は此方から姿を隠す。

男は零し／＼又稼ぎ溜める。溜つた頃になると又入り込んで来る。男は逐出しも仕切らずに居ると、また亭主を圓裸にして何處へか行つて了ふ。男も遂に懲りたと見えて、居所を昏まして居ると、何處を何う捜すものか、幾らか物の出来た頃には又遣つて来て男を圓裸にする。この女は元田舎の茶屋廻をして居つた白首の上りださうだ。斯うした女に附纏はれては、男は何んなに稼いで見ても、到底身の立つ時はあるまい。

(一六九) 法螺ばかり吹いて居る人

法螺を吹いて飯の食へたのは、山伏の繁昌した昔の話で、何事をするにも實力を要するやうになつて来た今日の世の中に於いては、如何に上手に吹いて見ても法螺では飯が食へなくなつた。

然るに世の中には未だ何うかすると、働くことを厭がつて吹いて食はうとするやうな横着者がある。イヤ横着者と云ふよりも、斯う云ふ人間は前世紀の残物、又は時勢おくれの人間と云つた方が適當であらう。兎に角おのれの實力で飯を食はずに、法螺で巧く世を渡らうとする人間ほど、世に不真面目なものはない。不真面目な人間が世に容れられることになると、誰も汗水垂らしい眞面目に働く者はないが、自然の理法は確かなもので、何處までも手堅く眞面目に働く人間でなければ、最早今日の世の中には容れられぬことになつた。だから法螺で巧く世を渡らうなどと思つて居る前世紀の残物は、何れの土地の何人であらうとも、決して幸福な生活はして居らぬに相違ない。彼等はあらゆる危険を冒して、有らゆる手段を以て吹きつゝあるが何うして此節は人が伶俐になつて来たので、容易に其の手に乗る氣遣はない。

眞に能く努力する人は、他の一面に於いては實に諦めの好いものであるが、懶惰漢に限つて實に思ひ切りの悪いものである。最う今日は法螺では食へぬなと思ひながら、翻然として正しい道に就く勇氣がなく、矢張何か種子にして吹いて、巧く一吹き吹き當てやうと思つて居る。併し空弾に目を眩して己れの温かい肉を人に提供するやうな鳥は一羽も今日の中には居らぬ。論より證據法螺の音に驚いて、うまく此方の思ひ通りになる玉は殆んど見當らぬに相違ない。けれども此の種の間人は、狛萬一を僥倖して吹いて居る。實に哀れむべく嘆ふべく更に卑しむべく惡むべき次第である。

此處にも一人斯う云ふ質の男が居る。姓は貝口、名は彌馬喜と云つて、相當に手腕のある鑄金師であるが、自ら手を下して働くことが嫌ひで、何時も法螺ばかり吹いて、人に金を出させやうと計畫んで居る、今日も素破らしい服装をして自動車に乗り、華族さまの門札ほどある名刺を持つて、所謂現代富豪の邸宅に乗込んで、去る人の紹介で主人の長者殿に面會し、初對面の挨拶が終ると直に、

「エ、私は今巨瀬戸内海中の一島に建てる弘法大師の銅像を引受けました。これは高野山からの依頼であります、その経費は三百萬圓、これ眞言宗の信者の淨財……。銅像の丈は約

六百尺で、これが私の手に依つて愈々出来上りましたならば、恐らく世界一の物であらうと思ひます。夜間は弘法さまの眼に光が點れますので、燈臺の代りにもなります。御案内の通り近年は、外國人も大分日本の觀光に出て参りますが、瀬戸内海も單に風景では物足りません……。エ、旁々私も國家的觀念を有つて、この世界無比の大銅像を鑄造いたす積りでござります」

「誠に結構な思召で……」

「おもひ切つて遣る積りには致しましたが、何分にも工場の設備に金が懸りまして……」

「成程」

「併し斯様なことは、貴下さまのやうな國家的觀念のお強いお仁でなくては御相談も出来ませぬが、如何でございませう、高野の方から金の参るまで五萬圓許暫時拜借は願はれますまいか」

「左やうでございませぬ、誠に結構な思召ではありますが、私も昨今色々な事業に廣く關係致して居りますので、その邊のことまでは手廻り兼ねます。それは銅像他の有力者に御相談を願ひます。本日は「急ぎますので、これで御免を被ります」

「吹いて見たが此處でも外れた、世には毎日斯んな事をして萬一を僥倖し、極めて不生産的に

貴重な光陰を濫用徒費して居る愚かなる人間もある。

(一七〇) 商賣氣のある女

一口に女と言つても、夫の手足纏になるものあれば、いざと云ふ場合に臨んで、好い智慧を出して男を助けるやうな女も居る。

或る役所に勤めて居つた男が行政整理の際突然首になつて了つた。子供は三四人もあるし、年齢は五十近くになつたし、貯金はないと來たので前途を悲觀し、毎日凝と考へ込んで、悒鬱症にも罹りかねない状態にあつた。

十歳年下の細君は至つて快活な女であつた。夫は正直一途の人で、最う生命に止めでも刺されたやうに悄氣返り、「この先は何うしたものか！」と毎日溜息ばかり吐いて居るのを氣の毒に思つて、「何か夫に元氣を出させる法はあるまいか」と考へた。

「良人毎日そんなに鬱ぎ込んでばかり居らしても仕方がないぢやありませんか。世の中は廣いですよ。探せば何處へか口のなことはありますまい。年が明けたら何とか運動して御覽なさい！」

細君が勸めても男は少しも氣が浮かず、

「此節は若い物で學問のあるのが安くて幾らもあるからな、俺を見たやうな老朽は最う何處を探して見ても口はありさうに思はれぬ！ア、困つたことになつたわ！」

「氣の弱い事をおツしやるな！今に又何うか道が開いて参りますよ。人間が食はずに居られるものですか！」

「食はずにや居られんから心配するんだよ」

「心配ばかり成すつても仕方がないぢやありませんか。おなじく心配なさるやうなら、何かお金でも儲かる心配を成さないな！」

「金の儲かる事がありや心配はせぬが、商賣の道は知らぬし、何と仕やうも無いでは無いか」「だつて遊んで居ちや百が貳百のお金は直に食べて了ひますよ。何か商賣でも始めやうぢやありませんか。些と元氣をお出しなさいな」

「出したくも出ないから困るぢやないか」

「良人が左様して縮んで居らつしやる上に私まで其のお供をしちや仕方がない。ぢやア私が何か商賣を始めますから彼のお金は私が資本に頂きますよ」

「廢せく損したら何うする？」
 「人間がそんなに先から先の事まで氣にした日にや生きちや居られませんかよ。マア見て居らつしやいよ」

その日直と問屋に出かけて、二三十反々物を仕入れた。併し迂濶には仕入れなかつた。これは彼の家の誰の着物に屹度向くといふ物を選んだ。五日許の間に有ゆる知人の家を廻つて巧く賣込んで了つた。好い物を安く賣つた。おもひ切つて安く賣つた。何處でも買はずと居られなくなつた。それでも五六圓儲かつた。

「何でもお入用の物がお有りでしたらこれから何うか私に左様おツしやつて下さい！好い物をお安く持つて参りますよ」

實際他の商人よりは好い物を安く持つて來るので、この女の商賣は繁昌して來た。華客もそれからそれと段々に殖えて行つた。男はこれまで月給を參拾圓しか取つて居なかつたが、女は月々それよりも多く儲けるやうになつた。

この女の商賣の上手なこと、來ては黒人が敵はなかつた。この女の商賣の繁昌する第一の原因は、慾張らずに思ひ切つて安く賣ること、次には品物の確實なこと、今一ツは其の家その家

に必要な物を時候に應じて見計つて持つて行くことであつた。これは普通の出入商人も常に遣ることであるが、外に他の商人の及ばぬ所があつた。華客に對して親切で、好く其の家その家の經濟状態から物の好みを呑込んで最も適當な品物を媒介するので、何處でも此の女を重寶がつて物を買つた。

これ位機轉の利く女であるので、その中自分で男の俸給口まで見付出し、早速其處に奉職させて、今では結構に暮して居るさうだ。

(一七一) 誠に几帳面な人

一方に駄法螺を吹いて廻る人間があれば、一方には又誠に几帳面な人がある。几帳面な人と云ふのは、行事嚴格にして折目正しき人を云ふのである。

几帳面な人になると、萬事に秩序整然として一絲を紊さぬ。朝起きて着物を着るにも帯を締めるにも、皆それ／＼に秩序がある。だから斯う云ふ人の着物を着た所を見ると、決して背筋が曲つたり、襟が開いて不作法に皮膚の露出れて居るやうなことはない。衞丈揃つた着物を整然と正しく着て、見た所から身體に一寸の隙がない。斯う云ふ人の穿いた下駄は、齒や臺が眞

直に平に減つて居るものである。

食事をするにしても、決して胡坐などは掻かぬ。整然と正しく坐つて箸を取る。また無暗に物を食べ散し、或は食べ残すやうなことは断じてせぬ。一旦食べた物は食べて了ひ、食べぬ物には初めから箸を付けぬ。斯う云ふ人の食事をしたお膳の上には、一粟の下地も溢れては居らぬものである。また茶碗は茶碗、皿は皿、箸は箸で皆それづくに、整然と其の在るべき所に納まつて居るものである。

斯う云ふ人は、夜間睡眠に着く時にしても、決して不作法千萬な寝方などはせぬ。整然と正しく枕をつけて、何時誰に寝姿を見られて、少しも恥づるところはない。また斯う云ふ人は、不断精神が落着いて居るので、睡眠も惣して安らかである。

仕事に従事する時は、整然と一定の規律を保ち、手を下すにも亦一定の順序がある。だから手と氣とが常に能く一致して、仕事もズン／＼果取れば、結果に於いても申分ない。斯う云ふ人は決して仕事に手を省かぬ。念に念を入れて大事を取つて進むので、仕事に少しも手落がない。

斯う云ふ人の言語は必ず正しいものである。人に一寸口を利くにも、決してぞんざいな言語

などは使はない。假初にも人を馬鹿にしたやうな言語などは使はぬので、自然人にも重く見られる。少くも人に侮辱を受けるやうな愛ひはない。

斯う云ふ手堅い人に限つて、決して己れの長上を凌ぐやうなことはせぬ。長上の人が打解けて、「サア何うかお樂に居らっしゃい」と言つても、長上の人の前で胡坐を掻いたり、大口を利いたりするやうな非禮な行爲は断じてせぬ。場合に依つては人に窮屈がられるやうなことはあつても、決して人に悪感を與へるやうなことはない。

斯う云ふ人は、總てに規律を守るもので、一寸物を使つても、使つた後で出鱈目に投げ出して置くやうな不始末なことはせぬ。少しの手数を厭はずに、必ず又一定の場所に置いて置く。だから斯う云ふ人は、急場な場合に臨んでソレと云つて、慌てゝ物を探すやうなことはない。人に物を借りるやうなことがあつても斯う云ふ几帳面な人は、約束通りに必ず返す。人に物を借りて置いて、その儘打棄つて置くと云ふやうなことは、斯う云ふ人には断じてない。自分が左様であるからして、斯う云ふ几帳面な人に向つて餘り等閑な仕打をする、必ず其の人の感情を悪くするものである。几帳面な人に向つては、此方も亦何處までも几帳面にしなければ、その人との交際は、決して長くは續かない。斯う云ふ人は此方に少し窮屈な思ひをさせる

ことはあるが、非理不法なことをして、此方に損害を與へるやうな事は斷じてないものである。

斯う云ふ人は使つても安全である。また事を頼んでも間違はない。世間で手堅い人と云ふのは、几帳面な人の別名だと思つて宜しい。

(一七二) 遊藝に達した女

藝は身を助けるほどの不仕合といふこともあるにはあるが、不仕合な上に身を助ける藝も無かつたならば、その上更に一層困ることであらう。さうした人間は人の門に立つてお残物を頂いて暮すより外には道があるまい。

或る女は遊藝に達して居る。別に達して居るといふ程でなくても、何を演らせて見ても一通りはやる。三味線も引けば琴も弾る。鼓も打てば笛も吹く。偶には法螺も吹くが義太夫も一寸語る。謡曲も謡へば端唄、新内、都々逸のやうなものも巧い。踊を踊らせて見ても結構やる。何しろ遊藝に器用な質で、薩摩琵琶を一度開けば其の琵琶歌を直に歌ふ。筑前であれ平家であるれ同じこと、浪花節などは誰の真似でも遣る。實に一種の遊藝的才能を具へた面白い女である。

或る物好きな醫學博士が此の女を呼んで、

「内儀さんお前さんは、遊藝ならば何でも一度目に觸れ耳に入れば直に其の通り遣れるさうだが勝いもんだな！」

「何う仕りました……」

「マアそんなに謙遜せんでも好いぢやないか。このレコードの中に元祿節といふ唄があるが、その時代の面影が偲ばれて、吾は太く面白く思ふ。併し蓄音器ぢや面白くないね！何うだお前さんこれを一度聞いて、其處で吾に唄つて聞せてくれまいか」

「それはお易いことでございます、と申し上げたいんですが、元祿節と申しますと何んな唄でございますませう？」

「こゝにレコードが三枚あつたと思ふが、何れか一ツ遣つて見やう」

「ぢやア伺ひますでございますませう」

女は凝と聽いて居つたが、聴き終ると共に顔を上げ、

「先生大略分りましてございます。それぢや一ツ唄つて見ませうでございます」

「ハア何うか聞して下さい」

「池一のツ、辨天さんに、無理な御願をかけましたツ、その願一イ、ひきましたら、龜の子すつぽん鰻に鱈に秋刀魚のヒモノダチ、ハアえんとこくくくくえんとこ」
 妙な唄だが二三度繰返して唄つて居る中に段々面白くなつて来た。物好きな博士は大層喜んで。これで其の人とも懇意になれた。この女には子がない。年齢は四十二三で、亭主は庭師である。家は氣樂に暮して居る。女は三味線の師匠をして居る譯でもない。近所の家に何か祝事でもあると、直に此の女を雇ひに来る。女は又喜んで行く。別に報酬と云つては取らんが、その爲方々から貰物がある。

亭主は大の飲んだくれで、おのれの氣に適らねば何處から呼びに来やうと行かぬ。庭師として、腕は東京で屈指ださうだが、餘所へ行つて仕事を仕かけて居つても、何か素人が一口でも差圖がましいことを言ふと、黙つて戻つて来て相手にせぬさうである。女は又小言も言はずに毎夜老爺と一緒に飲んで唄つたり引いたりして居る。つまりそれが此の女の道樂ださうだ。

(一七三) だらしの無い人

世の中には何事にも誠に几帳面な人があるかと思へば、他の一方には又至つて檢束のない人

間がある。檢束のない人間と云ふのは、心に引締のない人間のことで、斯う云ふ人間の言つたり仕たりした事は少しも當にならぬものである。

檢束のない人間の日常は、その萬事が几帳面な人の行狀の反對に出る。心に引締のない人間のことには規律もなければ秩序もない。斯う云ふ人は着物を着た形振からして何となく檢束がない。背筋が曲つたり羽織の襟が折れて居なかつたり、胸が開いたり悪くすると下前がバツと開いて、其處から人さまにはお目に懸けられぬやうな物を出して居るやうなこともある。食事などする時でも屹度不作法に胡坐を掻き、箸を取つた手付からして檢束がない。斯う云ふ人の食事をした後でお膳を見ると、汁椀には汁が残り、刺身は食べ散し、煮魚は刺き散し、まるで三ツ子が御飯を食べた後の様になつて居るものである。それ丈ならば未だ宜いが、お膳の上には茶が溢れ汁が溢れ、何うかすると其邊に御飯粒まで溢れて居る。斯う云ふ人の着物の膝を見ると、鹽氣が付いたり、油氣が付いたり、痰や涕や鼻糞などを塗り付けたたり、又は煙草の火で屹度彼焼いて居るものである。

斯う云ふ人は夜間睡眠に就いた時でも、その寝姿は滅多に人さまにはお目にかけられぬ。斯う云ふ人に限つて、寝相も甚だ宜しくないものである。朝も屹度朝寝をする。細君に手荒く蒲

團を引ッ剥がれて起きたは宜いが、つらく、惟みれば何か物足りないやうな思ひがする。

「オイ無いぞー」

「何がございせん？」

「禪をくれ」

「アレまあ昨日の朝新しいのをお上げ申したちやありませんか」

「だつて此の通りぢやないか」

「ちやア又風呂屋にでも置いて居らしたんぢやありませんか」

「昨日おれは湯に行つたかなア？」

「夕方入らしたちやありませんか」

「アハ、ちやア其の時だ！」

斯う云ふ人には得て斯んなことがある。人と眞面目な話をして居つても、決して長く座つては居られん。すぐに胡坐を掻くか横になつて手枕をし、

「左様か、馬鹿に話が面倒ぢや無えか」

「イエ別に面倒な譯ではございせんか事は大事を取りませんでは……」

「いやだ、廢すとせう、骨が折れらア……」

言語も誠に野卑である。斯う云ふ人は仕事にかゝつて居つても、始終手を省くことばかり考へて居る。心が仕事に食ひ入つて居らるので、何か仕事をして居つても、誠に不熱心で檢束がない。いやになれば直に廢して了ふ。廢さぬまでも好い加減にして一時遅れのことを遣る。斯んな人間に手堅い仕事は到底望まれるものでない。斯う云ふ人間は一寸下駄を一ツ穿くにしても誰の物でも足の先に突かける。顔を洗つて手拭が見當らぬと、禪であらうが雑巾であらうが厭ひはせぬ。まるで物の區別が立たぬ。斯んな人に物を貸したら決して返す氣遣はない。借りた時は貰つたやうに思つて居る、斯んな質の人間と何か約束して、それを當にでもして居るとそれこそ實に飛んだ手違を生じて散々狼狽かなければならぬ。

(一七四) 妙な癖のある女

人にや七癖といふからには、何にも癖のないといふ女も少なからうが、餘り色々な癖のある女を女房に持つたら、男は嘸かし煩いことも腹の立つこともあらう。

或る女は殆ど癖づくめだと言つても可い。つまりこれが其の女の病氣ださうだ。先づ第一に

は壁土を剝して食ふ。茶を嚙む。巻煙草を嚙む。

それから時々銅貨を舐める。勿論舐める丈で使ひはしないから減る氣遣はない。その邊は御亭主も安心なものだ。安心は安心だが厭な癖だ。銅貨などは何んな病人の手に觸られたものかも知れぬ。乞食の手にも握られたことがあらう、癩病患者や肺病患者の手に親しんだことがあらう。その點から云ふと第一危険である。併し女は好んでこれを舐めて居る所は、いかに病的に違ひあるまい。

未だ若い而も美しい顔をして居るが、外には未だ色々妙な癖がある。

何か氣に適らぬことがあると、直に障子紙を破つて廻るさうだ。

「イオこら何をやる？」

男が慍ると、一層これが烈しくなる。終には紙丈破つたのぢや承知せずに、障子の骨をメリ／＼折つて暴れ廻る。全く以て始末におへぬ。

その上この女は男と一緒に外に出たがる癖がある。雨が降らうが風が吹かうが夕食を食ふと家は女中任にして置いて、男を強請んで必ず何處へか行かぬことには承知せぬ。「今夜は何處へか散歩に出かけませう」と言つて居る所に、客にでも來られるといふと、男は實に辛い思ひ

をしなければならぬ。

「少し待つてお居てお客さまだから……」

斷つて置いて座敷に出る。少し話が長くなると、女は直と隣の間に来てがたがたと物音を立てる。客は驚いて耳を立てる。何か取つて投げるやうな荒い物音の聞えることも珍らしくない。「いづれ又その中に……」

中には驚いて歸る客もある。その爲男は客が來ると、何時も冷々して居なければならぬ。實に因果なことである。隣の間に来て騒ぐ位なら顔が見えぬから未だ樂だが、時に依ると座敷に出て來て男の後に廻り、

「行きませうよ、行きませうよ、おそくなるぢやありませんか」

斯う言ひながら男の足を踏み、或は膝で背を突く。居やうと思つても客は居られたものでない。皆匆々にして歸つて行く。まるで子供が老爺さんに駄々を捏ねるやうだ。

男は日本で有名な學者だ。女とは年齢が十七八も違ふ。餘り甘やかし過ぎたので、一ツは斯んなことになつたのかも知れぬと人は言つてる。この家に行つて見ると、何うしたのかと思はれるやうに何時も障子が破れて居る。便所の壁が剝けて居る。皆この女の所爲ださうだ。

(一七五) 事を投遣にする人

世には己れの責任を無視して、總ての事を投遣にする人がある。斯んな人間に事を頼んで下手に安心して居ると、實に飛んだことになる。斯う云ふ罪癖のある人は、人に事を頼まれて受合ひながら几帳面に其の約束を果さずに、「マア宜いわ、まあ宜いわ」で投つて置く。さうして愈々と云ふ場合になると、何か他に口實を設けて遁れ、知らん顔の半兵衛さんを極めて居る。頼まれた方はそれで宜いかも知らぬが、頼んで當にして居つた方では忽ち面食つてキリク舞をしなければならぬ。

おなじくことを頼むにも、好く其の人を見立てて話を持って行かぬと云ふと、世には時々斯う云ふすばらな人間が居る。うツかり斯んな人間を信じて懸らうものならば、後で何とも取返し付かぬやうなことが出来る。

人に對して一度約束したことを其儘投遣にして置いて、己れの怠慢故に人に迷惑を及ぼすなど云ふことは、如何にも相濟まぬことであつて、多少道義心のある者には、さう云ふすばらなことは決して出来る譯のものではないが、事を投遣にする癖のある人間になると、我れ故人に何んな迷惑を懸けやうと、また損害を及ぼさうと、その邊は一向平氣なものである。それを氣にするやうであれば出来ぬ事は最初から受合はぬ。出来ると信じて一度人から受合つた事であれば、必ず約束を實行して、己れの責任を果す譯であるが、我れ故人に迷惑をかけ、或は少なからぬ損害を及ぼして平氣で居るやうな人間は、初めから人の迷惑や損害など云ふことは、まるで自分の頭に置いて居ないので、斯んな人間は後で責めて見たからと云つて、蛙の面に水を打ツかけるやうなものである。

斯んなすばらな人間の常として、己れ自身のことにはさへ餘り重きを置かぬ位であるから、まして他人の事などを頭に置かう道理がない。斯う云ふ人間には、まるで誠意がないので、人に對して同情などの起るべき道理がない。何か人から受合ふは受合つても受合つた舌の根の乾かぬ先から直に忘れる。たとひ忘れずに居るにしても、「マア宜いわ、マア宜いわ」で一日延し二日延し、その中には忘れて了つて人から催促されて、「ア、左様だつた」と思ひつき、さすがに幾分は良心が咎めぬでもないが、何に關はぬで筋目の立たぬ辯解をし、それなりにして了ふ。實に悪むべきことであるが、根が斯う云ふ質の人間であつて見れば、それを知らずに頼んだ方が手ぬかりで、まるで喧嘩にもならぬやうな落になる。

人に對して一度受合つたことであらば何處までも此方の責任を果さなければならぬと云ふ了簡のある人間であれば、人から事を頼まれても、決して安受合をする氣遣はないが、極めて無責任な投遺主義の人間になると、後になつて約束を果さうが果すまいが、そんなことは始めからまるで此方の頭に置いては居らぬので「ハイ宜しい」また「ハイ宜しい」で何でも軽く引受けるものである。骨の折れる事を手軽く引受ける人間と見たならば、先づ其の人間は投遺主義の人と見て、その人の言ふことは餘り當にはせぬことである。

斯う云ふすばらな人間は、結局何う云ふことになるかと云ふと、一度その手に懸つて懲りた者は、誰も相手にしなくなる。たまたに其の人間の云ふことを信するやうな人があると云ふと、「彼の男の言ふことならば餘り當にやなりませんよ」と云つて、屹度横槍を入れる者が出て来るやうになる。終には世から葬られる。自業自得、自繩自縛、誰を怨むることもない。

(一七六) 癩持の女

鼻の下に黒い物の生えて居る人間でも癩癩持は好ましくない。往々失敗して後で後悔するものだ。人には嫌はれ、自分では損をする。困つた持病だ。

男にしても左様だから、これが女であらうものなら大變だ。一家の睦しく治らぬ丈ならば辛抱も出来やうが、世間との交際範圍が自然と狭くなつて來ずには居らぬ。癩持の女を女房にしたら、男は生涯頭の上らぬものと覺悟して早計ではない。

或る女は細そりと瘦せて背が高い。春風の吹いて居る日でも虚然一人外に出すのは危ないやうだ。青い顔をして居る。手の指は皆反つて居るやうに見える。

これが非常な癩持で、時々亭主にボロ／＼涙を溢させる。實に氣の毒なものだが仕方がない氣はしつかりして居る。時としては男も及ばぬ智慧を出すやうなこともある。男に彼此附智慧をして、金を取らせるやうなことも少なくない。だから男は此の女に頭が上らぬ。何か女と意見を見異にしたことがあつても、議論をすれば直に女に遣込められてグウの音も出ぬ。實に慘なものである。

この女が癩癩を出したとなると家一杯に黒烟を上げる。男は一縮になつて了ふ。男の額をコソと煙管の雁首でお見舞ひ申す位のこととは別に不思議もない。男は何時も色々な膏藥を買つて居るさうだ。

或る時二階から引摺り下して、散々酷い目に遭せて居ると、隣の主人が止めに來た。それが

何か氣に食はぬ事を言つたと言つて、序に隣の主人の頭を擲つた。これには亭主勝を潰し、ふのれの痛さは打忘れて、

「いかゞですかお怪我は無かつたでございませうか」

隣の主人が氣むづかしい男であつたら、話はお安く解決せぬ所であつたが、女位は相手にせぬ人であつたので、突然笑つてツルリと坊主頭を撫で、その場で得意の狂歌を詠んだ。

「あなかしこ其處此處打つは打たれたが坊主頭でケガ無かりけり」

この女の嗜好物は酒に煙草に鹽煎餅、炒豆、薑、唐がらし、その外何でも刺戟の強い物なら喜んで食べるさうだ。機嫌が好いとなると人に生命でも遣りかねぬが、少し風向が悪くなつて來たととなると、人の咽喉にでも食ひ付きかねぬ。全く危険な女である。扱方次第では敵にもなれば味方にも變つて來る。

この女には色々な癖があるが、一番見憎いのは人の前で鼻糞を掘くる。指先で圓めたり又これを捻り潰して見たりする。實に醜體極まつて見て居られぬ。次に此の女に就いて好く見る癖は、人と話をしながら小揚子で齒糞を取つて、それを小揚子の先に突掛けて、一々鼻先に持つて行つて其の臭氣を嗅いで見る。それから根氣に耳垢を取つて、それを一々火鉢に焼べて、そ

の臭氣を嗅いで喜ぶ。實に見て居られぬさうである。

(一七七) 兎角不平の多い人

世には如何なる窮地悲境に陥つても、その中に猶感謝の餘地を見出して、まづまづ有がたいと喜んで、極めて平和に其の日を送る人もあれば、何等の不足不自由もない結構な境涯に樂々と其の日を過しながらも、我が身邊の萬事に不満不足を鳴して、朝から晩までブウ〜と不平ばかり言つて居るやうな人間もある。

斯う云ふ人間は、終生満足の滋味を一度も知らずに果てねばならぬ、實に氣の毒なものであるが、その人の性分だとあれば、これも是非ない次第である。斯う云ふ質の人は、如何なる幸運に出會しても、満足や感謝の念は起らない。假令足下から拳ほどある金剛石が轉がり出して、有がたいとは思はずに、「何にたツた一ツか」と、すぐ口から不平が出る。

總じて斯う云ふ質の人間には、何から何まで不平である。朝眼を覺して見て雨が降つて居れば、

「ヤアこの天氣ぢや今日は困るなア！」

「すぐに最う不平を言ふ。天氣が続けば續いで、矢張それが不平である。」

「ヤア今日も亦天氣か。斯う天氣が続いちや仕方がない。一日位は雨にして欲しいもんだ」
朝飯の膳に向つて箸を取れば、すぐに又不平を言ふ。

「オイ、少し氣を付けんか、今朝の飯は馬鹿に強いぞ！」

「何うも相済みません！昨日のは柔か過ぎるとお叱りになりましたんで、今朝は少し水加減を
仕過ぎたと見えます。」

「少し氣を付けろ、こんな強い飯が食へるか」

「何うか一朝丈御勘辨を願ひます。」

「ブウ、言つて飯を食ひ、洋服を着て出かけるので、まあ好いと思つて居ると、玄關の沓脱
の上に揃へてある靴を見て、

「オイ、この靴の磨き方は何だ！この後を見ろ後を見ろ、こんな物が穿いて行けるか」

「何うも相済みませんでした！つひ未だ女中が馴れないもんですから……」
外に出て見ると、急に雪空になつて來た。

「オ、寒い、馬鹿に冷たい風だなア！こんな日も休まずに出かけて行つて、それで月給が

幾ら貰へる馬鹿々々しい！」

不平を言ひ、會社に出來ると、直に頭から一本遣られた。

「君この節は毎朝何うも大分遅いね、時間通りに出やうぢやないか」

小言など言はれると、猶更不平で遣り切れんが、上に向いて唾液を吐いては險難である。仕
方がないので口を噤み、

「オイ給仕、何だ、この机の上は、未だ掃除もしてないぢやないか」

「土狩君、一寸横濱のピーオー會社まで大急ぎで行つて來てくれ給へ」

「今日また横濱まで行くんですか……」

「厭かね？」

「厭ぢやありませんが……」

「兎角不平の多い男だね！行つて昨日の返事を確めて來るんさ！」

「ブウ、言ひながら外に出た。」

「ア、馬鹿々々しい、この節は使ばかりに追ひ出されて居る。今日は悪くすると歸りは雪だぞ
遣り切れんなア！」

汽車に乗つて見ると、生憎今日は客が一杯で、腰を懸ける場所もない。

「仕やうがないな、これちや向ふまで立ち通しに立つて居なけりやならん！」
横濱に着くと、白い物がチラ／＼と降つて来た。

「オ、寒い、今日は飛んだ貧乏籤を引いた、馬鹿々々しいな！」

「用事は首尾好く解決した。」

「何だ、斯んなことなら、用事は電話で澤山だつたぢやないか、こんな日に人を態々横濱まで追ひ遣つて……」

停車場に来て見ると、今其處に汽車の出で行く所であつた。

「仕やうがないな、一步のこと……」

「一汽車おくれて歸つて来て報告した。」

「ちやア君その見本を持つて日新會社へ行つて、早速註文を取つて來やうぢやないか」

「この雪に出かけるんですか」

「雪は愚か火が降つても商賣は休めんぢやないか」

「オ、寒い、これから又深川まで行くかなア、馬鹿々々しい廢さうかなア！」

斯んな工合に、萬事に就けて不平を鳴し、不満を抱く人間には、終生到底満足は得られない。假令満足な境遇に出會つても、本人は矢張不平で、何時もブウ／＼云つて居る。實に損な性分である。

(一七八) 呆れる程呑氣な女

女は概して氣の小さいものだ。其處に又男の氣の附かぬ鋭い所があるものだ。この軌道を脱した圖太い女よりは、女は女で矢張内氣な女の方が好い。併しこれも加減もので、いかに女だからと云つても、餘り氣の小さいのは困るが、女の癖に餘り呑氣なものも好ましくない。

そんな女を女房に持つと、連れ添ふ男までが一緒に脱線しなければ成らぬやうなことになる。男の呑氣過ぎるのも困るが、女の呑氣過ぎるのと來ては、いかにも檢束が無くて、おもひさま打擲いてくれたくなる。

或る女は評判の呑氣屋さんだ。これが又圖抜けた大女で、その蘇の長さと來ては人をして驚かせる。

「おん馬ヒン／＼の小母さん！」

近所の子供は斯う言つて居るさうだ。顔の長いやうに氣も亦長い。その上無性な事と來ては夥しい。髪を打被つて爪を延し、汚れ腐つて襦袢を下げ、ぞろりぞろりと歩いて居る所は、まるで貧乏神のやうに見える。

この女が或る年の盆前に亭主の浴衣を縫ひ始めた。この女が針でも持つといふやうなことは餘り例の無い話だ。流石は亭主、其處は夫婦の情合、

「でもまあ感心なもんだ！」

心竊に喜んで居つた。男を喜ばせたのは宜いが、何時まで経つても浴衣は縫ひ上がらぬ。その筈だ、時々おもひ出したやうに取出して、一針か二針も縫へば直に片脇に押遣つて、長い烟管でスバク煙草を吹して居る。この年は間に合はなかつた。明くる年の夏になると又取出して、時々一針づゝ縫つて居つたが、この年も又夏の間には合はなかつた。三年目の夏に又取出して、毎日その邊に取散してあると、男が見かねて寸断々に引破いて棄て、了つた。女は知らん顔をして居つた。

この女は萬事共に斯うした調子で、何一事として急所の間合つたことはない。事の間合はん位は可いが、餘り暢氣なので時々危険なことがあるさうだ。男は或る夜用事が出来て出か

けて居ると、家の方角に大火事があると聞いて飛んで戻つて來た。

南無三、最う其邊に非常線が張られて家に近附くことが出来ぬ。理由を言つてやつと家に近寄つて見ると、最う一軒置いて隣まで火の手が廣がつて居た。

「我が妻子は何うしたらう？」

内に飛込んで様子を見やうとすると、有難い、最う何處へか立退いたと見えて戸が締つて居た。併し荷物が氣になるので、戸を開放つて入つて見ると、何に女は子供を抱いて未だ寢て居る。

「この馬鹿者早く起きぬと生命がないぞ！」

男は夢中に蒲團を取つて引剥いだ。女は悠然として寢返を打ち、

「ナニ今に消えますよ」

全く以て呆れかへることがある。

(一七九) 奮闘心に富んだ人

人間は色々で、身に立派な藝能を具へて居つても奮闘心に乏しい爲に、生涯世に出ることの

出来ぬ人もあれば、これと云ふ藝能は具へて居らんでも、たゞ奮闘心に富んで居る爲に萬難を突破して獨立獨歩誰の力も藉らずに立派な人間になる人もある。

人は全く心がけ次第のもの、何か一定の標的を定めて、それに向つて倦まず撓まず己れの全精力を注いでかゝれば、晚かれ早かれ其の目的を達せぬと云ふ道理はない。人間の成功する否とは、強ち智慧ばかりに依るものでもなければ、また學問ばかりに依るものでもない。成程智慧や學問も己れの立身を助ける一ツの要素には違ひないが、その志が堅實でない以上は、到底立派な人間になり果せる譯には行かぬ。何よりの證據には、世に落魄して居る人の中には智者も多い。學者も多い。それで何時も何故見るかげもなく落魄して居るかと云ふと、その志が堅實でないからである。

他の一方には別に智者と云ふでもなく、また學者と云ふ人物でなくても、相當に人間の光を放つて、最も健全に最も平和に、且つ最も努力的奮闘的に人生の義務を日々立派に果しつゝある人もある。この種の人間に就いて人物研究をして見ると、その志たるや實に堅忍不拔なものである。斯う云ふ人間が一度決心の膽を固めて、おのれと奮ひ起つた日には、如何なる艱難に遭遇しても、如何なる障礙に出會しても、また如何なる悲哀に妨害されても、斷々乎として

奮進突撃、おのれの思ひを果さぬことには死んでも已まぬ。斯くの如き意思の鞏固なる人間にして、大事は始めて成すべきである。

「智慧があらうと、學問があらうと、そんなものは糞にもならぬ。如何に智力が発達して居らうと、また學問が博からうと、人間の智慧學問の奥底は大抵見え透いたもので、たゞ智力や學識のみを以て大事は斷じて無し得べきものでない。何よりの證據には、己れの智慧や學問を恃んで、大なる抱負を有つて仕事に懸るは懸つて見たが、さて遣つて見ると思はく違ひであつたとがツクリ腰を屈り、失望し落膽して、最早起つべき氣力のない人は世間にウジ／＼して居る。其處になると志の人は強いものだ、智慧がなからうと學問がなからうと困難障礙の度合が高まれば高まる程、多々益々不撓不屈の精神を奮ひ起して、飽くまで力行の持續を保ち、何處／＼までも志の爲に進むので、目的と自己との間に靈火が發して、竟には如何なる困難なる事業も屹度完成する。

靈火とは何ぞや、即ち人の一念である、世の中にこれ程恐ろしい物はない。人の一念が凝結して、段々に熱を含み、果は火を發して來たとすると、その火に觸れては岩も流れる鐵も溶ける。況んや困難、況んや障礙、この火の力に敵するものは世界にない。智力が人より劣らうと

學力が人に及ぶまいと、この火が胸に燃え盛つて來れば、地上の世界に恐るべき物は何にもない。

奮闘心に富んだ人の胸には何時か此の一大靈火が發せずには居らぬ。古來事業に成功した人々の胸には必らず此の靈火が發して居る。今人と雖も皆その通りである。智者も恐れるには足らぬ。學者も憚るには足らぬ。世の中に唯恐るべき者は健全なる奮闘的精神に富んだ人間である。

(一八〇) 機智頓才に富んだ女

去る年の二十十日の晝過ぎに男は青くなつて戻つて來た。

目の早い女は直にそれと見て取つた。早速一本浸けて出して見たが、男は膳の前に凝と兩手を組んで石のやうになつて居た。

「良人お一ツ如何です」

男は盃を手に取る元氣も既がない。

「今日は太い暴風になつて参りましたね！マアお一ツ召食れ！」

「何うも……」

男は眼を開いたが盃を取らうともせず、深い／＼太息を吐いて、また膳の前に萎れかへつて了つた。

女は自分で一杯飲んで男に差し、

「マア元氣をお出しなさいまし、今日は思ひ通りに行かんでも、明日は又何うした風が吹いて來んとも限りませんですよ」

「イヤ最う愈々いかん！壇の浦まで遣つて見たが、運の盡き、手も足もいやと言ふ程引換れて了つた！」

「そんな弱い事をおツしやつて、今のやうな商賣が出來ますか。良人も男子なら最少し確りお遣んなさい！」

男は悲憤の涙を流し、

「お前にも面目ないが、乃公は最う今日の失敗で世間に顔出しが出來なくなつた！實は決心して居る——死後を頼むぞ！」

「良人馬鹿な事をおツしやるな縁起でもない！サア死ぬる決心で最一度遣つて入らツしやい！」
懐に白い手を突込んだと思ふと、青い札を一束出して膳の上に置いた。男は悔りした。